日川協加盟



No. 697

六月号

西尾 栞 喜寿·金婚 句碑建立五周年記念川柳大会

日 時 昭和60年9月29日(日) 生前10時關場

	-				5000	1.1	11.1	A	10.17	24
会	場	新阪急	九点	テル2階	紫	の間				
		大	:阪市北	区芝田1丁目1	-35	TE	L 06	(37	2)	5101
	初	辞		…日本川柳協会	理事長	虚	泛 島	养	六	氏
	おはな	U		…川柳塔社相	談役	耳	[野	人	1	氏
	題と選	者(各題	[2句]	●締切12時	•欠	席投作	句拝記	辟)		
			ン」		1	木	干	代	選	
		一祝	杯」		橘	[i-1]	薫	風	選	
		空	気」		诗	尾	俊	平	選	
		間に	出出		11	松原	爽	介	選	
		[/Js	説」		渡	辺	蓮	夫	選	
		厂先	祖」		去	来川	E	城	選	
		厂太	陽」		磁!	野 (いさ	彭	選	
11/1	前投句	「情	熱」		14	尾	栞	謝	選	

事前投句はハガキに 2 句・締切= 8月31日 (宛先) 〒545 大阪市阿倍野区三明町2−10−16 ウエムラ第 2 ビル 川 柳 塔 社

□ 会 費 5,000円 (祝宴共)

□ 祝 宴(同会場にて午後5時~8時の予定)

主催 川 柳 塔 社

父の H

儿 尾 栞

るが、父の日は昭和二十五年頃より行わ 我が川柳雑誌の父祖は麻生路郎である。 かと思うと暗然となる。 る。そんなに母と父との敬慕が違うもの 理チョコのような感じのする父の日であ れるようになった。母の日からみると三 十八年遅れて始められたわけである。義 の日は日本では大正二年以来行われてい 我等川柳の柳祖は柄井川柳であるが、 六月の第三日曜日は父の日である。母

さんの小石さんも大変お元気で宿替え病

さて八十七歳の会長も、七十八歳の奥

払って、順慶町の凄いマンションに移ら 魔した。マンションというても、色々ご 月二十五日午後、岳人君と転居祝にお邪 れたので、父の日を待たずして、去る四 父は、名誉会長中島生々庵氏である。 そして川柳雑誌から川柳塔に生れ変った この度、生々庵氏が旧居諏訪森を引き

ざいまして、ダイアパレス順慶町という

にそれとわかった。

ここは一度見ておいて下さい、と與さ

ずかれた。 かったという話は、さもありなんとうな り広いのと、価格の点で二年間も売れな ションかと目を見張る広さであった。余 LDKまで知っている我々は、之がマン 洗のついた豪華なマンションで、通常3 室の外にキッチンと浴場と洗面場とお手 迷いに迷って、やっと十階に着いた。七 高級のマンションで、入る時から二人は 名の示すごとくダイヤモンドのような最

天守閣の偉容がはっきりと見られ、 騒音もなく、閑静なのには驚きの一語に 見したわけであるが、非常に空気もよく りを話にきいて愕いた次第である りしてつけられた言葉)の如きご活躍ぶ れもなく魔女(奥さんの御姉妹がびっく ビルの上に見せ、東の窓からは大阪城の つきた。南の窓からは、通天閣の頭だけ 十階のマンションというのは初めて拝 金剛の連峰が、 その後に春霞の中

> という笑いながらの忠告をうけた。 機械の厄介にならないようにして下さい」 いると、小石さん曰く「栞さんもこんな の要らぬ仕掛の入浴機械を見て感心して て入浴という非常に便利というか、労力 椅子から、その椅子へ又足踏機械によっ の椅子が、足踏機械によって移動して車 子で会長が浴室に入られると、湯舟の中 んの案内で浴室を見せてもらった。車椅 部屋に帰ると待ち構えたように会長は

さんにご安心をして頂いた次第である になった豪華マンションを御披露して皆 絵が静かにかかっていた。 川柳塔の発展を喜んで下さった。 会長御夫妻のその後の御様子とお移り 東の壁には直原玉青画伯の、 柱林の墨

木綿着でおごそかな父になりおほせ! 畑の中父の姿のありがたし 国の父に似ていて車掌きりそこね 麻生路郎の句集「旅人」より 郎

父の日の父は日曜大工する 父の日のいでたち娘のプレゼント 頭ほど光らぬ父でありにけり



本曽、長良、揖斐の三川が合流する辺り昔から桑名の焼蛤として名を知られた処、今は蛤も高級品になってしまったがF屋は泉鏡花の最布じめに始まってお椀、酒むし、焼蛤、の昆布じめに始まってお椀、酒むし、焼蛤、さしみ、しそ巻と一点ずつ次々と出てきて最さしみ、しそ巻と一点ずつ次々と出てきて最大分な堪能感がある。昔はここから七里の渡しで熱田へ向ったのであろう。

味の宿

Œ

本 尾

水

西

:

西

栞

選客栞

父の日

Ш

柳塔

六月号

目

次

題字・中島生々庵/表紙・直原玉青

覚の宿を書いてみる。

旅情の湯も四回続いたし、

気分を変えて味

六月は雨のうっ

正

本

水

客

味

宿

川柳塔

同人吟

賢島

東志摩の賢島にSホテルがある。伊勢湾の 東志摩の賢島にSホテルがある。伊勢湾の 東志摩の賢島にSホテルがある。伊勢湾の 東志摩の賢島にSホテルがある。伊勢湾の 東志摩の賢島にSホテルがある。伊勢湾の 東志摩の賢島にSホテルがある。伊勢湾の

水煙抄

上方前句

付集の雄編

明

石人丸大明神三万句集」

(9) :

Baj

達

義

雄

40

]

38

■川柳太平記

(85)

川柳の群像

大嶋涛明

東

野

大

八

:

 $\widehat{36}$ $\widehat{32}$ $\widehat{4}$ $\widehat{2}$

誹風柳多留廿六篇研究 (二十丁~二十一

秀句鑑賞

水煙抄

60年度二賞候補作品中間発表

林

瑞文

枝

58 73

金

#

秋 選

35

川紫香

42

「いりいん	瞳の奥の海は信じる外はない私の句	僕だけの心の中にある祭り座右の句	**	編集後記	各地柳壇(佳句地10選/田中正坊選)	本社五月句会	柳界展望	初步教室	「 佁 」	一路集「 煙 」	「結 ぶ」	〈林 瑞枝・春城武庫坊・八木千代・ほか全員〉	郡上八幡・白川郷の旅	竹内紫錆自選百句	小林由多香自選百句	愛染起
10	神平狂虎	(凡九郎)	*	薫風・鬼遊・史好… (97)				阿萬萬的::	牛尾緑良選 …	森田布堂選 …	岩井本蔭棒選 …	員〉				橘高薫風選 …
6)	97	84	80	78	76	75	74	74		68	66	64	61

下風呂温息

北海道と本州を結ぶ最短距離は函館と下北半島の大間崎を結ぶフェリーである。バスで半島の大間崎を結ぶフェリーである。バスである。夕食の膳に取れ取れ設付のウニが出てきた。元来私はウニが苦手なんだが、余りてきた。元来私はウニが苦手なんだが、余りてきた。元来私はウニが苦手なんだが、余りてきた。元来私はウニが苦手なんだが、余りてきた。元来私はウニが苦手なんだが、余りてきた。元来私はウニが苦手なんだが、余りてある。下北では夕食にはイカの糸作りが出てくる。下北では夕食にはイカを出さない。夜釣から帰った許りのものイカを出さない。夜釣から帰った許りのものしかお客には食べささないのである。

戸隠中社

長野の善光寺からバードラインをバスで一長野の善光寺からバードラインをバスで一長野の善光寺からバードラインをバスで一長野の善光寺からバードラインをバスで一長野の善光寺からが、天ぷら(根曲り竹)山うど(油いと山わさび、天ぷら(根曲り竹)山うど(油いと山わさび、天ぷら(根曲り竹)山うど(油いためみそ和え)うと菜(花かつおかけ)など十種類以上の山菜が心を籠めて調理けかなど十種類以上の山菜が心を籠めて調理けかなど十種類以上の山菜が心を籠めて調理けかなど十種類以上の山菜が心を籠めて調理けかるといが、天ぷら(根曲り竹)山方がある。

戸隠の山々に囲まれて鳥の声



西 森 花 村

大阪市

谷 垣 史

松原市

何時

か朝妻も年子も起きている

天王寺今日も端切れが売れ残り 来歴の古さを漬物石言わず 長靴を穿けば男を蹴りたがり

物憂きは春

も終りの小間物屋

春雨

Ш

椒魚言葉少なに生きている のニュースに続く土砂くずれ

好

菜種梅雨古い鏡の曇りがち

П 住

パンの耳捨てる男のマンガ好き楢山の話がはずむ日向ぼこ

流の店でねずみの肥満気味

Įŗ. 庫 県

遠

Ш

喉仏ひとの怨みを買うことも

こうしてはいられないのと茶をよばれ

輸入品を買わない奴は非国民

老人大学ここも余生をもてあまし

甲虫かごを逃げても歩道橋 お彼岸の傷痍軍人また太り

> 無病息災晚酌 犯人の法律論に 負け 本あればよし 7

る

ご先祖のどなたか憎い血が混じり

妻に出来ぬそんな女がいてたのし 大正が混ざると義理がからんで来

白足袋が白く乾いてさみし 疲れて亡父母 の夢ばかり見る い日

歌山

क्त

儿

山

幸

少し

ひと言が多いあなたもわたくしも おんな同士の受話器だんだん重くなる めざし焼くけむりもひとりぼっちだな

松原市

玉.

置 重

人

尾

西

栞 選

指先の向うが見たい白杖よ		買いかぶった妻とそのまま五十年	八十に成っても巡る誕生日	献血が燃えているのは判るまい	立	月細る天動説を信じよう	鎌を研ぐ夫を怒らしてはならぬ	岡山県	一気飲みゆかしき酒が泣いている	あきんどの子に連休よ雨になれ	妻のない男に仲のよい夫婦	城下町おいしい水がたんとあり	積翠城ほめてはならぬ力石	旅の湯舟にまだまだ生きる鬼の首	八尾市	歌舞伎座の余韻タクシー奢っとく	包丁は一本悪妻かも知れぬ	でかくし言葉に気付	水やっているのは自分の花ばかり	新緑へ夢が勝手に走り出す	プッシュホン軽い話にしてしまう	大阪市	めでためでたで残高が減りはじめ	名跡を継ぐ水垢離の厳しい目	父ちゃんに聞かさぬ方がよい話
	堀							土.							高							西			
	江							居							杉							出			
	正							耕							鬼							楓			
	朗							花							遊							楽			
金払う男は店の外で待ち	約束ができて時計ばかり見る	娘の料理節約ということをせず	靖国神社に行けば二人も兄が居る	居酒屋で数字の違い思い出し	手術痕見せ同病の友見舞う	倉敷市 野 田	莫迦になり通せた今日の陽が沈む	足音が遠のき哀しみだけ残る	春愁やわたしの影を折りたたむ	踊る気はさらさらになし笛を聞く	真実はひとつ心の奥にある	聞き上手欺され上手でいい姑で	岡山県 嘉 数	時という鎮静剤をあげましょう	納得が行くまで聞いてうとまれる	すれ違うバスに会いたい人が乗り	ためし書き筆は意中の人の文字	この辞令終着駅ねお父さん		堺 市 高 橋	大切な妻 妻のため髭もそる	聞き違いかも知れぬから笑っとく	惚け上手に酔わされてくる桜かな	盃は茶碗のまるさより嬉し	理屈などどうでも両の手温かい
													24							Unil					

兆代賀

素身郎

千万子

あい宴ぶ くいい	はと話が変る雪柳 はと話が変る雪柳 なと話が変る雪柳 なと話が変る雪柳 なと話が変る雪柳	二〇〇一年へ手紙を書いておくように でこまでも白い未婚の母である どこまでも白い未婚の母である を許すことにする 平田市 作れぬ私をコピーして置こう 平田市 でれぬ私をコピーして置こう	にいく度体重計に乗の視野にひまわりの
宮	岩	久	小
西	田	家	島
弥	美	代仕	闌
生	代	男	幸
が知恵者に見え が知恵者に見え が知恵者に見え	主語持たぬ手紙がある日流れつくコンタクトレンズが落ちた通せんぼまん中を独り歩いて草臥れる勝炎の中の牛の瞳日々やさし場ところに真珠のごとき恋ごころふところに真珠のごとき恋ごころなところに真珠のごとき恋ごころ	乳ばなれ出来ない愚痴とたそがれる寝化粧を忘れてからの自閉症自家製の料理がぬくい花の下おぼろ月女らしさが匂いだすが違の火事を親身に受け止める中流の鼻高からず高からず	賞でる男も女もやさしい眼の道すすむと仏の顔に会う
奥	森	小	津
谷	下	砂	守
弘、	愛	白	柳

汀

論

朗

伸

色傘 バい倶 毎雑 前踏 移四 想い出や IHI とば 3 3 H 踏 しさ大 しさは憎 17 会 に切 0 りの を果 クミラー は かい 0 聞 40 鱼 焼きを一 かい ch 10 0 世紀し ひとり なあかんな呆けの 1) 散 唄 処こ 殺 0 7 誘ってくれたなたね 奴 大 10 の冷め た話 5 尾 py 待 丸 す から き るに 行かぬとこなし花だより L まれ 1) 0 灯 季 E 他 顔 良 0 0 前 10 は修行 記 この 如 世 人前とする夫婦 落 心 としての花の に乗せた旅 てたような風 人事とは思 0 だと信じ 過 ってやり 茶 一去の るまでの欲を追う 0 事 体の П 的 を妻にや し穴あり筑 口の仲で生 辺 0 0 とは 痛 似 遅 から からちと 場のな まだ足 みは拭 非平 切 n 1) 小がち 谷 適 n b t) 下 12 梅 波博 n ŧ め 和 いって 逢う b ま 期い F 1 大阪 京都 島 伊 1) 20 根 开 おく 県 市 市 市 堀 都 樫 中 倉 谷 江 芳 134 求 寿 子 雀 芽 馬 開発 手ボ我鏡ヶ慢 児春の 表年輪 歯 自 骨 魚 遠くから案じ 脚色の身の お 焦 おだてにも乗ります惚けたふ 豹 げ 音 茶 月 ケたくはないと若 0 曲 董 車 春 1) 漬 L 如 L を がそこ迄迫る芹 たくはなかったためらい傷 を の日も心に光抱 るまで鍋忘れてたボールペ 異 のゆがみを店のせ の裏にしゅ 主 7 0 ニア自 く組 きで酔 組 義 0 3 証 1+ て我慢をさせ 削ると父の 0 動 背 ん愚痴を聞 立ててゆ E 0 0) 10 父 家あ 土を詰 Ŀ 角 残 の名 世 る夫の憂 を行 てい 一ばなし i) うて 分 は んも骨を うとめおこ ち も出 言 1 く青 ます血 返 顔 男 to < 8 かなず て育 董ぬ 帰 聞 かす ち 事 13 L 耳 る 干ボケは いてます 魚拓 なる 水め 3 < だ 地 60 顔 0) 田 てら けし を立 湯宿 12 は罪つくり XII 子-いてくる H な 0 方 塚 なり 1 話 する 2 版 和 和 じめ とく りもする n b 歌 歌 前 iti 市 市 11: 福 波 3 野 # 本 Ŧ. 英 Ŧi. 楽 子 庵

	すばらしい髭にころりと騙される 服和の射多円グラロきに任	党の商発Eグラリミニ	退陣の宴へ花吹雪舞う	松江市	叱られたぐらいでなんだ子を諭し	ちょっと好い朝妻の笑いで送られる	政治家には英語で話せぬのが多い	焼わかめ出雲風土記は閉じておく	嘘のない生活鰯が焼けてくる	鷹の子に育てる塾へかよわせる	松江市	正当化したい気持ちはわかるけど	お友達プラスアルファに甘んじる	胃袋がつくり話にもたれてる	もうすでに椅子とりゲーム投げている	好きだからその手に髪をゆだねてる	判断の甘さが踏んだ針の山	吹田市	肩車パンダが珍しそうにみる	うわの空となりの拍手はなんだろう	二枚舌いつかは薬の世話になる	電柱に淋しい蟬だけ寄ってくる	単身赴任三合炊きの炊飯器	もり上がり無くてもいいのよ私小説	米子市	眉細く書いてネオンに溶けてゆく
				舟							小				•			西							政	
				木							林							Щ							岡	
				与根一							孤呂二							景子							日枝子	
30	橋のたもとで引き返すのは卑怯者に嶋市		人さまの器量のことが	寄り道も花の浄土よ春遍路	古老だという人ばかり地引網	好きな道だからゆっくりとカタツムリ	とび切りのボーナス他所で出た話	星の位置覚えて首が痛くなり	今治市	酔うて言う昔むかしを聞いてあげ	あの人もあの人も紫の似合う女	老いて子に従うことも余生とか	春が来た人間ジャンプしたくなり	時々は他人にもなって夫婦老い	獅子舞に頭さし出す梅日和	島根県	モンローの人気冥土で落着けぬ	さり気ない言葉で怖いことを言う	先生にとばす輪ゴムをかくしてる	輪の中で泣かぬと決めた白ネズミ	耳の栓抜いて女は門をあけ	冬の蟬私の耳の中で鳴き	米子市	タイミングを狸寝入りは計ってる	縄電車孫と先頭入れ替り	年金の世帯主とは淋しいぞ
	看	ŕ				.5			矢							錦							石			
	坊	ţ							野							織							垣			
	年	=							佳							文							花			
	14	Ċ							雲							子							子			

るう	連斃かまはらに咲いて喪が明ける 東大絣と麻の葉模様好きで老い 業種梅雨菜種畑は昏れ残る 、大絣と麻の葉模様好きで老い ・	をとりもおじゃみも下手なおばあさいたいとハガキー枚だけ残るいたいとハガキー枚だけ残るいたいとハガキー枚だけ残るいたがきの色街は出雲市出も特等席は金が要りだ売れずカラスと一緒に帰れないたたとはぼけて無いのが言う言葉を書けば紙はひとりで歩き出すへのハガキかしこが気に召さずついてくれとも思う娘の適齢出雲市	きこうら向り入ってき自用し
	越		
	村	山 垣	
	枯	多 質 子 酔	
,	梢	子	
石が遊びにあきて肚を 芸に一途老いたる余計 白の詩原語で聴けば屁	大の字に寝て吾が城よ青畳をの気を故郷へ戻す新わかめ客の気を故郷へ戻す新わかめ高石市指切りの爪人知れず研いでおく振責任に夫婦に線を引く他人を雷や命がひとつ目を覚ます人情もお裾分けする庭の花	い出を繋ぎとめたい糸 くみ笑い女秘密が楽ー くみ笑い女秘密が楽ー 付たぬばかりになめく が似合う女で孤独なり が似合う女で孤独なり が似合う女で孤独なり が似合う女で孤独なり が似合う女で孤独なり	1
草	+	清	\mathbb{H}
ΧIJ	尾	野	7
堕	糸录	この意	芜
駄	良	う	É

文	結論は出さずに終る風の旅 を を を を を を を を を を を を を	歩五分すぐそこにある ・ ・ ・ ・ ・ を を を を き う に だ 一 本 の 潮 胸 の 中 ま で 満 ち て の 潮 胸 の 中 ま で 満 う た だ 一 本 の 風 に 、 は 、 と も う た た 、 と う ら う た う た う た る う の う の あ の あ の あ の あ の あ の あ の あ の あ の
の席へ母の物腰そのままに ミステーション桜吹雪がふ される範囲の浮気の宿の下 らない男の話ならきこう 島にない言葉を女からもら	刑期だと思うスランプ灯がまぶし 別れ味を試すレモンにある痛み 切れ味を試すレモンにある痛み 哲むかしの祖母につながる五目めし 西宮市 藤 村 宏 子昔むかしの祖母につながる五目めし いじめっ子北山杉を見てごらん いじめっ子北山杉を見てごらん	安が敷く道へ絆の十重二十重 (ない、)のでは、)のでは、)のでは、)のでは、)のでは、)のでは、)のでは、)のでは

お嬢さんと呼ばれ出戻り照れるのみ お嬢さんと呼ばれ出戻り照れるのみ 育別という心の毒は捨てましょう お嬢さんと呼ばれ出戻り照れるのみ 静市 藤井	市 小 · 野	雲弁がしみこんでいる僕の英語 面の歌手に厚い壁がある 二支へ象も入れたい国もある 二支へ象も入れたい国もある	は神棚に ・	ときどきは狂う私の左耳
春		鶴	叫	
日	枝	丸	紅	
人気力士負かして人気出る力士をの日の母子団欒つくし採り出道の贅は落花を一人浴びがかりがかれて一と言う日本語に愛があり	に棚の茶寮で天気待ってい 日だけは阿呆になれと他人 日がけは阿呆になれと他人	差当りなんてする気かしない気か をじょっこもふなっこも居る川が好き で出が同窓会の音頭とり 転んでも只で起きない鷲摑み 転んでも只で起きない鷲摑み	馬鹿話に花を咲かせた午後の雨 様せは花と対話で明け暮れる 葱坊主敬遠をした番蝶 生甲斐は達者な妻の笑い顔 満ち足りた顔で草花摘んでいる	倉敷市
松	大		松	小
JII	Щ	野	本	幡
杜	ک	甦	忠	里
			Ξ	

柳井市 弘	やさしさを花に託して旅に発つ	先輩急逝を悼み	理不尽な人事不運で済まされる	父の日のプレゼントまた養毛剤	若者のマナーに車内ふとなごむ	忍耐の緒を切った訳妻が支持	東京都増	倖せは孫にも好かれ子に好かれ	孫十人よい子わるい子普通の子	叱るにも褒めるにもタイミング	"恕』の心私も大人の仲間入り	歓待する母が居るから友をつれ	仙台市 川	思い切りの悪い男で酒が好き	憎んでも尚余り有る花の雨	双六の一目狂っただけの事	アイウエオそれから先は一人ぼっち	毛虫から見れば毛虫はよい男	玉野市 小	水煙の先だけ見える花筵	お礼の絵馬の数の少な過ぎ	夢に来る少女は何時もラムネ色	風鐸は黙して語らず桜の寺	鼻唄で祖母は何やら縫うている
津							田						村						谷					
柳							次						映						仙					
慶							章						輝						Щ					
髭を		n.																						
髭をそる鏡に春の雲が浮く	今治市 越	傷なめあって半世紀の歴史	最高の贅沢土の匂いかぎに行く	現場を知らず徹夜で議論する	贅沢な孤独乱されまいとする	うそつきな暮し刀が長すぎる	大阪市 天	官能の坩堝とポルノ大げさな	口笛を吹いて初発に乗る仕入れ	ビジネスホテルの窓から仰ぐ重い空	六月のあくびは何を求めるか	ガン手術成功麻酔さめかける	岸和田市 福	一線を画すと歯車が軋む	シルエットに汝姦淫するなかれ	似顔絵の嘘に満足感がある	深刻な顔は出来ない聴診器	人事異動おいしい酒とにがい酒	美祢市 安	単身赴任ハンカチの皺哀れ	なりゆきを襖の陰から聞いている	サロンパスの匂い気にして満員車	電話をまじめに受けた四月馬鹿	もうそろそろもらいなさいよと七回忌
そる鏡に春の雲が浮く		なめあって半世紀の歴	高の贅沢土の匂いかぎに行	を知らず徹夜で議論す	な孤	L	īfī	の坩堝とポル	笛を吹いて初発に乗る仕入	ホテルの窓から仰ぐ重い	のあくびは何を求める	ン手術成功麻酔さめかけ	和田市	線を画すと歯車が軋	ルエットに汝姦淫するな	顔絵の嘘に満足感があ	刻な顔は出来ない	事異動おいしい酒とにがい	袮	身赴任ハンカチの皺哀	の陰から聞いてい	ンパスの匂い気にして満員	をまじめに受けた四月馬	もうそろそろもらいなさいよと七回忌
そる鏡に春の雲が浮く	越	なめあって半世紀の歴	高の贅沢土の匂いかぎに行	を知らず徹夜で議論す	な孤	し刀が長すぎる	市	の坩堝とポル	笛を吹いて初発に乗る仕入	ホテルの窓から仰ぐ重い	のあくびは何を求める	ン手術成功麻酔さめかける	和田市 福	線を画すと歯車が軋	ルエットに汝姦淫するな	顔絵の嘘に満足感があ	刻な顔は出来ない	事異動おいしい酒とにがい	祢市	身赴任ハンカチの皺哀	の陰から聞いてい	ンパスの匂い気にして満員	をまじめに受けた四月馬	もうそろそろもらいなさいよと七回忌

夫婦坂長所短所を知りつくし	鳥取市	川柳的君の発言親しまれ	小粒でも辛いと演壇人を呑み	故小松園氏を偲ぶ	姿見へも一度映し嬉しい日	真か偽か出雲神話に七不思議	春眠の暁よりも早よう覚め	出雲市	アドバルンふんわり浮いてる花曇り	腕力の慢心智恵はまわり兼ね	入社した洗礼デモに狩り出され	運動に限界があり市長選	朗報を朝の茶柱に結びつけ	大田市	根廻しが効いて拍手の数が殖え	お父さん美人に生まれないと損え	新入社もう薔薇の棘突き刺さり	母にだけ分る娘の顔があり	家中の慰め役の母であり	熊本市	半分は濡れてまたよし春の雨	菜の花が貧しい部屋を明るくし	わが庭で猫堂々と恋をする	人の喪をよそにあひるの歩きよう
	小							原						藤						有				
	林													田						働				
	由多							独						軒太						芳				
	多香							仙						楼						仙				
信号機誰も通らぬ青赤黄	男には見せぬ女の意地があり	藤井寺市	かたつむりの歩幅で闘志内に秘め	からまわりしてる闘志にあるあせり	焦点をずらし反省待ってやる	目標はみんな持ってる草の種	発言の勇気を父として話す	鳥取市	古都の鹿英語もすこし分かるらし	廃線のレールを春の草も哭く	春や春松田聖子も恋に泣き	本妻の意地です妻の座を温め	同じ神信じて戦火まだ交え	鳥取市	アダムより迷わず食べた握り飯	死に水へ急に拡がる嫁の夢	お隣もローンで建てた隙間風	逆境の仲間の棘を抜いてやり	癌に勝つ日を信じてる知恵袋	米子市	ライバルへおくる拍手は一つ減す	不景気な話題を変える酒にする	刑終えたように単身赴任終え	マニキュアの指が指切り派手にする
		児						森						両						小				
		島						田						Щ						西				
		与						熊						洋						雄				

R

々

生

酔痴れてみたい男の悲しい日 京菓子をつめて出稼ぎ切符買う 島根県 西 村 早 苗	0	たプいのた		今更に親父は考えてはならぬ ケ阪市 江 城 修 史気休めの言葉は素通りしてしまい
風媒花人の心も人の世もパレットにまだ赤があり青があり露絵まだ踏まねばならず六十四	は、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	東を詐欺罪とは大げさなまを詐欺罪とは大げさな	東大阪市 斉 藤 三十四 というに では、 東大阪市 斉 藤 三十四 というでは、 でいる自信 というが という はいかまた 道迷う道 という はいか また はまり ぎょうきに 合わせ 左へ右へ向く まだい かいしょう はいかい かいしょう はいかい また はいかい かいまい はいかい かいまい はいかい はいかい はいかい はいかい	また逢えるあの世に亡妻がきっと待つ出かかった嘘善人が居て止める音のない底へ沈んだ不信感

風にまぎれて春はコントを撒きにくる 若き日の恋路を天に盗まれる サイタサイタサクラは今日の現実か	体機むくその日暮しの指の冷え を選生日のばらに本音をのぞかれる にないででででいます。 はいうそがある はいうそがある	旅に出る妻が美容院へ行く と言う俺ものんでる夜の電車 と言う俺ものんでる夜の電車 と言う俺ものんでる夜の電車	経電車他人面した街につく なめらわぬ背中で泳ぐネオン川 なめらわぬ背中で泳ぐネオン川 ながれる子感背中は見せられぬ ないれる子感背中は見せられぬ	議事録をしまってからの快気炎余っても困る予算へうまい知恵
林	H	臣	時	
	B		末	
折開	Ţ	笙	i —	
枝	矿) 生	打	
春の陽へ仁王の部屋がせますぎるパンジーの二色紫には負ける明乳をうけても磁石北を指する。	大の町も等でであれます。 で雪とまではゆかぬが花の下 か雪とまではゆかぬが花の下 か雪とまではゆかぬが花の下 で雪とまではゆかぬが花の下	を	下りして素直に月の傘に入る 皆れて古い暦を母が繰る 岸にわたしの影は繋がれる 岸にわたしの影は繋がれる 米子市	たらちねの歌屑が舞う桜土手
	寺	菅	桑	林
	沢	井	原	
	み ど 里	と も 子	伊	荒
	Comment of the Commen		都	介

唐津市	したいこと山積みにして寒い部屋	電話帳ひとりの部屋を離さない冬の扉を開けて旅立つサングラス	くいつまで続く母	臆病な窓でも風を少し呼ぶ	米子市	健康食などにだまされないでおく	雑然と私の部屋のやすらぎよ	故里の白い嶺には逆らえぬ	如来にも桜吹雪を届けたい	あの時の父に似ている仁王さん	米子市	まるい瞳が話のつづき母に乞う	大部屋の窓に風船のぞきます	少女等の夢を育てる白い部屋	寝ころべば新芽の合唱きこえます	父逝って天は椿の花ざかり	米子市	坪当たり空の値踏も入れてあり	十の指に余る勇気を持っている	敵味方わけへだてなく雨が降る	足踏みをしない時計を母がもつ	鳩時計今日も無事故で鳴り終る	米子市
仁					雑						青						沢						田
部					賀						戸						田						中
四					美						田						千						亜
郎					世						鶴						春						弥
蒼氓の唄開発の裏話	唐津市 田	老夫婦互いに病んで口達者きかぬ子へ老父はふかく煙草喫う	二段ずつ駈けて昇った発車ベル	湧き水を汲む遠足の小休止	草の露汲んで硯の墨をする	唐津市 浜 本	土用丑鰻にょろにょろしておれず	母の星見つけた遠いかくれんぼ	甲子園で泣いた昔の砂袋	花びらの行方を鯉は見に上り	花びらがさらばさらばと散り急ぐ	唐津市 浜 本	円安の喜憂を知らぬ水面下	さりげなくライバル埋める穴を掘る	止り木で鬼がぽきぽき指を折る	偏差値を守る男で酌ぎにくい	飽食と自由の中の偏頭痛	唐津市 久 四	皆勤の賞を小声で妻に告げ	カタカナのプランが好きな知事の秘書	確率を読んではならぬ通知表	会場へ着いて気づいた服の色	花便り待たせて君の後影
						4						4						保					
	口虹					平義						平 久仁於						1年正					

春うらら老いも夢あり花の下廃止線鉄路は錆びて春の雨	鳥取県森田	今日もまたテレビの捕虜になって暮れ	青春を語れば干戈横たわり	ものを観る心に埃ためていた	余生図の道標記す文字がない	また一人旧友の訃をきく花の雨	鳥取県林	定年に僕の土俵も後が無い	技能賞というのは政治家にはやれぬ	盃が有るから酒もきっと有る	少々の風邪はうっちゃる靴を履く	春眼を何時も寄切る母の朝	鳥取県 清 水	煙までルンルン気分煽り立つ	噴煙を看板にした桜島	からしから飴にもどった肥後土産	いい顔が見たく面相七変化	親切の押売りに来たシルバー席	唐津市 木 塚 圭	確率がそれて重たい傘と靴	夜もすがら語る亡夫の三回忌	お彼岸の母へ弘誓の舟が着く	爪弾きのギター老兵の唄となる
	布						路												素				
	堂						杖						保						石				
うるむ瞳に焼きつく人の背を送る激しき雨よ恋の飛鳥をなぜ責める	積木は崩れ	和歌山市 松	青写真抱いて男の靴がなる	冗談もまぜてやんわりする意見	小さな嘘ついて二人に春がくる	見せかけの善意笑顔で受けておく	豊かさに慣れてゆたかな心消え	和歌山市内	シルバーシートに座らぬ意地はまだ失せず	ポケットに手を入れるにもある個性	四六時中淡い恋ならしています	平行線を上手に活かす夫婦です	信じ合う手の温もりは逃がさない	和歌山市 堀	決別を告げる旅路の赤電話	ほどほどの距離を崩さぬ無二の友	日本男子なら手折れない山桜	一人だけルール守ってからかわれ	漫才作家しかめっ面で書いている	和歌山市 若	砂を踏む児の足跡の漫画めき	新築の二階は畳まだ敷かず	二日酔い財布のぞいて腑におちず
		原						芝						端						宫			
		寿						登						三						武			
		子						登志代						男						雄			

青春に記まり太陽にも巨身 呉市慎田英詩	季二寺ら) 広島こら目れはあれでいいことなげすてた重い心の冬衣	春めいて心に宿る花時計美味しいと必ず分けたい人憶う	子が帰り時事放談になるわが家 岡山市 川 端 柳 子	装うて鏡の中へはいチーズ三面鏡三つの貌を持つ女	洗濯機待たせております長電話食パンの耳で野鳥とおつき合い	島根県北川民子	愚痴ひとつワイングラスに漂わせ	けだるさよ春雨は人を慕わしむしっとりと心の襞に梅雨降る	に逢うと不思議に気が	十の氐亢ごううかも	彰状以下同文の	無為無策春確実にめぐり来る	新築がまだ間に合わず燕の巣	国富んで路頭に迷う下水道	成長率伸ばしてドルにたたかれる	島根県 石 田 清 泉
\$ B	天気と花と気の合わず桜をしかと見た稚鮎	今笑うたのが仇名を知っているハミングの妻贈物来たらしい	退職のしかたが妻の気にいらぬ 寝屋川市 江 口 度	五万発の核抱いている平和娘の新居僕のボトルも並んでる	オルゴール娘が懐妊という知らせ食うための仕事はしないベレー帽	朝めくる家事カレンダー一人住み	豊中市 田 中 正 坊	二女のメニューにまだ大学の姉が棲む	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	回复明日々新になる二人邪星一笑に付され虫垂炎の虚無	竹原市 森 井 菁 居	和解する鍵は弱気な方が持ち	期待する視線の中でエラーする	ねぎらえばねぎらい返す共稼ぎ	俄雨儲け話をうやむやに	ラッシュという洗礼受ける新入社

嫉妬いくつ匿す女の峠裏 偶像の首に老化がひどくなる 西宮市 林 は つ 絵	年金の暮らしカサコソ音がする	水割りのグラスの中の浮き沈み	焼香の順へ群雄割拠する	語家の杯		言いたいが立場が言わせてくれません	天平の染に昭和が魅せられる	木蓮にそぼふる雨は銀の雨	ばら	写経する筆に亡母がのっている	大阪市 神夏磯 道 子	クレジットカードが麻酔かけてくる	パソコンのおもちゃに悲しくなってくる	正面を見つめて喪服の帯結ぶ	お葬式雨天順延とはゆかぬ	雨降れば雨をよろこぶ文机		怒っているので頭冴えている	眠れない夜はカボチャの馬車を呼ぶ	ゆるむ指輪かしわ手の日がつづき	足音へ応えるように桜散る
春休み二人の孫の電話番孫二人入試合格春爛漫年下の御主人友の厚化粧	年金のネクタイ地味な色に変え	ペンだこに私なりの字が並ぶ	飴玉をしゃぶれば糖の降りる歳	孫魚座山淑小粒で俺に似る	休日の手足は迷い猫となり	和泉市 西 岡 洛 酔	ソロバンに合わぬデートもする若さ	ひと言の重さ知ってる嫁姑	金持ちも弱点金という不思議	早起きが苦手なうちの年寄りで		新宮市 川 上 渓 水	クラス会友へ黙禱から始め	なり	あと一球嬉し涙を用意する	花吹雪浴びて舞台に立つごとし	おたやんの面をかぶった落し穴	神戸市 仲 どんたく	若葉風傷を忘れたゆでたまご	雑炊のぐつぐつ煮える忍に似て	大波の打つ日よこころ海に似て

試されて 疑うと真 引き延 脱屋 -7 時 旅 人场 他柿 渦 や歩 皿陽 喜娘 調とれ 々は 、めてお 洗うバ 10 台 隅 はよし 0 0 人より 去は過去寡婦は割りきることに 0 炎 寿 0 だ足 酒 + くり 好 種 0 が料 ば 天 照 て試 1: 13 WD 来 7 # 理 袋 実に じ当 夫婦 と行 イト 吉 T 僧 け告別式の とれ 6 かい L n 10 7 私 人語 作戦 す心 E 1 が 心 夢 7 0 10 残 0) ぶや 色付い なぞ 亡父の哀 努力 T 地 こう水車もあ と思う妻 へ妻 の病気持て余す L で途中下車 1) +1 女がもえてくる 夫婦 を読 て置 0 バ ソングで酌 15 八江 ネタ > 0 の足はず ない母ごよみ 42 有 番: の糸 汗 んでい く愛 7 1) そ て来る r) かい は 1 かい 7 0) 0 る涙 愚痴 冷え を あ 1 0 から 11 ままに せ なぐ 3 ル 3 ぎにくる 好 如 声 む 知 0) + を誘 12 をきく F る E 通 京 浜 都市 1) 良 H 屋 10 馴 市 市 市 出 11 佐 Ш 大 森 17 本 林 木 規 曲 力 不 h ズ 裕 手: 風 I ニン こだ 接続気 その 三猿 来年を知る由 義 # in 胸 自春向 原バお 何 ラン 似 から 風 爆を る 分にも寛大なれ か 様 西寸 かりも居 to 月 给 12 合 を 重 0 里 迈 好 0 41 0 かい きで鈴 間 でこ プー 字 60 りを捨てて は 味 事 0 III 風 昔 ス in 誓 御 か息 爱 きっ 0 財 未 は び返 0 0 ばなしにして平 Vi 在 ご夫婦 とれ 知ら 見 重 布 だ 0 事 ぼ 40 す ムを生んだ さ私 0 E 眠 くり箱 こ道 と喜 子 E 嘘 E もなし雛 7 0 軽 ける 聴き言 E 急 な り出来る程 白 のこつこつ た食事が旨 知 頼っ と春 居 かい 10 行 10 10 U ですがよく b 42 ティ 役 連 来ると鳴 潰 せ 眠 12 + 通 82 れそう てい り上 人 引き受け 3 0) 62 過 L 12 宫 n かしら 1 まう n た コ てくる 0 る苦笑 手く のこと < かい 寄 飲 スプー ておく V 1 る 1) 喧 附 H 西宮 H なり 曄 1 林 林 H iti 市 市 市 奥 中 H 藤 形 JII 美 泰 幸 2 子

子.

緒

宇部市 おれる 市	尾	の 披 露 町 田 市	くらさくら大阪城も春の顔 し子を貰うたように蘭貰う は都わすれの花の彩 は都わすれの花の彩 はでは都わすれの花の彩
平 銷	松	竹	杉
田 オ	高	内	本
実 節	f 秀	柴	智慧子
男 子	- 峰	錆	子
本の橋に蛇の目が欲しい雨が降る さが衰し先ず親切の裏さぐる さが衰し先ず親切の裏さぐる に崎市 春 城 武恋の字は若者だけのものとせず 尼崎市 春 城 武帝の帝は若者だけのものとせず	で見る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	ミ増やす家電のニューア殿様気分にさせてくみのしぐさに負けた借ば釘を手足もサビて行はのといたは	二級酒の消費が伸びてるのが嬉し 「級酒の消費が伸びてるのが嬉し 「級酒の消費が伸びてるのが嬉し

千羽鶴まだまだとべぬ花便り夢を追う女の的がしぼられず	窓開けてそれっきり人間不在 出雲市 吉 岡 きみえ 窓開けてそれっきり人間不在 す と と と と と と と と と と と と と と と と と と	を見へ笑って見たがはじまらず 登見へ笑って見たがはじまらず 登見へ笑って見たがはじまらず を見へ笑って見たがはじまらず を見へ笑って見たがはじまらず を見へ笑って見たがはじまらず を見へ笑って見たがはじまらず	右左見て会席の箸をとる 東大阪市 崎 山 美 子 ほろ酔いでした指きりは高くつき 乗大阪市 崎 山 美 子	熟年の少々狂う腹時計 暦下丹田ちょっと充電しておこう 暦でを眺めて夢の絵をまとめ
今は亡き祖父の自慢の勲八等横綱の不覚拍手が沸き上る	を に に に に に に に に に に に に に	大阪市 北 勝 美でルサイユ悲劇のバラはそのままに エーゲ海の船でヒロミの歌を聞く エーゲ海の船でヒロミの歌を聞く ジャパニーズの甘さへ掛値土産売り カーロッパの旅で	八尾市 宮 崎 シマ子を寄って吠えなくなった犬と居る年寄って吠えなくなった犬と居る年高の日がおもちゃにされる四月馬鹿生真面目がおもちゃにされる四月馬鹿	「「大学では、「は、「いい」」」」 「大学では、「は、「ない」」」 「大学では、「ない」」」 「大学では、「ない」」」 「大学では、「は、「は、「は、「は、「は、「は、「は、」」」」」 「大学では、「は、「は、「は、「は、」」」」 「は、「は、「は、「は、」」」」 「大学では、「は、「は、「は、」」」」 「大学では、「は、「は、」」」」 「大学では、「は、「は、」」」」 「大学では、「は、「は、」」」」 「大学では、「は、」」」 「は、「は、」」」」 「は、「は、」」」」 「は、「は、」」」 「は、「は、」」」」 「は、「は、」」」 「は、「は、」」」 「は、「は、」」」 「は、「は、」」」 「は、「は、」」」 「は、」」」 「は、「は、」」」 「は、「は、」」」 「は、「は、」」」 「は、「は、」」」 「は、」」」 「は、」」」 「は、」」 「は、」 「は、

鼻の高さを競いあっている米ソほの白い林檎の香にも似た女雨期たのし銀の雫の下にいて		戦没の霊へ平和の木魚打つ	道一つゆっくり夫に添うてゆく	うるむ瞳の笑顔が送る今日よき日	七くせの中の長所を探し出す	嫌われる寒波もあって四季稔る	和歌山県 天	前を行く後姿に貌がある	ひと筋に妻の時計は狂わない	山笑う里では梨の花笑う	善玉か悪玉か梨の頬かむり	紫の袱紗に家紋主張する	倉吉市 野	待ちかねた一人の夜も寝てしまい	道楽は若いうちだと今分り	火葬場へ行く窓から見た桜	どの橋も一人で渡れた事はなし	良い返事親は寂しく聞いている	松原市 北	かえろうよ夫婦漫才ひと筋に	森に来て未完の地図がやっと描け	前向きに歩こう倖せにげぬため
	井						満						中						野			
	佳						Ξ						御						久			
	香						三千代						前						子			
別れ幾度重ねて無機となる素顔かぎろいし野辺で交わさん相聞歌春の野の花に倦かない道祖神			子の船出父と一升やっと空け	雑魚の海再就職の船出です	肩を張る父の前職影残る	春の蝶新米社員の足に似る		岡山県 行 吉 照	宵の内真面目な話飲み始め	教室の四ン月若い花ざかり	ぐんぐんと空気が美味い児が伸びる	いつからか若い意見の夫婦仲		和歌山市 玉 井 豊	掃き捨てる程の中に居る私	偶然も奇跡もあって勝ち残る	春の雨頻りに亡母が恋しくて	花吹雪亡母の笑顔の見え隠れ		和歌山市 坂 部 紀久子	たかが五尺されど無限の可能性	守られる鯨のかげで泣く漁民

お団子の味で童話が眠くなる	束を持てば男の道になようなら運命線と対話	野仏のうしろに沈む別れ雲黒ゆりのつぶやきを聞く山男に崎市に	師のお祝いに高砂一番愉しみに武原はん八十路の舞いに狂いなし、大相撲の後は野球の熱戦待ちかまえ	●語へのの食り カーズ 西宮市の料傘寿過ぎても仲介者役 西宮市	山の雪容けて春めく谷の水はんざつな靴片寄せて客となりはんざつな靴片寄せて客となりはんざつな靴片寄せて客となりなって来ときめて迷える気のそぞろいイハイの二度の返事は叱られる		仕付け糸切るもどかしさ花衣 鳥取県・
		角野		朝山	長谷川	č } 	中原
		か		千	者		諷
		ず子		世子	Į¥		人
	手術と	アルバムを憎	きれい好きこ	パーに来	赤のれん潜 一滴がグラ はの知恵ま	ち 病院を出 こころ によろ	奏逝って
岡山市	諾の手が震え	をめくれば赤い干をかき僧めど障らぬ神で居る	こー替れルえ	世間知らずを笑われるまで妻はよもぎつみ	のれん潜れば本音喋り出しの知恵まだまだ生きてる自然食の知恵まだまだ生きてる自然食の知恵まだまだ生きであ	大に尾を聞かれてくれて	って包丁を研ぐ空しい日 尾崎市
Ш	諾の手が震え	めくれば赤ハ干めど障らぬ神でで水を待つ祈り	これが病いのもとでしールスマンに焦げた鍋替えると直る肩のこり	世間知らずを笑われるまで妻はよもぎつみ	夏星 しる 自然食	が手を聞かされる がに尾を振られ おり灯にさわぐ あり灯にさわぐ 兵庫	日尼崎
市	諾の手が震え	めくれば赤ハ干めど障らぬ神でで水を待つ祈り	これが病いのもとでしたールスマンに焦げた鍋	世間知らずを笑われるまで妻はよもぎつみれる	寝暑 日	グチを聞かされる いてくれてから 大に尾を振られ あり灯にさわぐ 兵庫県	日尼崎市

和泉市 岡	人間ドック嫌いな話してくれる	玄関で待たされ嫌な胸さわぎ	知らん振りするのも出世の芸のうち	人生へ居直り夫婦の時刻表	ハイミスで咲くのが怖い恋の花	河内長野市 井	アメリカへ転勤喜寿の母もつれ	亡夫からの引つぎ植木枯らすまい	納骨も順番ならぶ春彼岸	黄泉で逢う楽しみ遺骨へして別れ	遺骨出す仏だん奥歯抜けたよう	亡夫納骨	高槻市 竹	くす玉は弾けて鳩は戻らない	昼寝から覚めて松明つくらねば	先生がうつむいていた競艇場	ある日ふとフーテンの寅に憧れる	憧れの一本杉に逢いに行く	鳥取県新	花冷えを消す熱戦譜甲子園	お互いの青春ぼやき大正っ子	禁煙を破る春宵軽い悔い	嫌煙へ怪我の功名春の風邪	便りまでしつこい春の風邪にふれ
井						上							内						家					
						上喜																		
やすお						酔							花代子						まさる					
仏壇の開眼供養梅の部屋	姫路市 人 見 翠 記	ターミナル柱の向こうも待っている	観梅に決心つかぬ風の冴え	通勤も吊革で寝る程に慣れ	どう見ても偽名の文字は女文字	明日の網繕う漁港の昼下り	大和高田市 岸 本 豊平次	鎮魂の墓所にも初夏の風薫る	言い勝ってみたってしょうがない夫婦	忘れたい人と語らう破目となり	方言で友と語って酒うまし	名園にまた名水の箔がつき	豊中市 上 田 登志実	ご先祖を語る欄間の彫りゆたか	ロボットの乾いた手からもらうお茶	早がてん迷惑らしい目に出合う	少しは飲めと子から届いた赤ワイン	お手あげなのとはずむ声聞く電話口	尼崎市 伊藤春子	腕白がたくまし過ぎて迷惑し	シルバーの望むところにシートなし	メーデー歌そろそろ歌詞の変え時か	列車ストないとお勤め休まれず	驕り過ぎだろうか包囲され始め

人間が赤裸々となるお葬式頑張りの球児も泣いた菜種梅雨	舞いに行く日を延ばす胸までも生きるつもりのプの家ピンクの椿盛りなり	Ì	自分で自分に枷を切る	息抜きに丁度よい女で誘われる何にでも手を出し最後に足を出す糸電話小さな耳と向い合う	篁の緞帳おりる名演	7 6 B	春眠は永眠につづく道かしら 悲しさは思うにまかせぬわが五体 悲しさは思うにまかせぬわが五体
	塚	1	田		野	1	П
	節	ź	紅		房		t
	子	±	葉		子	į	上 聿
欲ばった過去が聞える神経痛島根県	9	さよかさよかばか	竿竹屋路地の直角曲れない冬眠をうちの亭主は夏もする吾が背なも流せぬままでたそがれる	齢八十まだ嫁に任せぬ気骨持ちがイエットする気へ針はそのまんま	好きな柄よく着た着物よありがとう完敗を感謝笑える日を待とう	い勝ってつ	薬もカラフル のいから上目づかいのソーダ水 のいから上目でかいのソーダ水
大	:	栂		山		榊	直
森	Š	4		根		原	原
孝	£	ど		5		秀	七面
華	č.	1)		つを		子	Щ

名も知らず義兄の春を名も知らず義兄の春を	同い苗は泰然自告歩を重ぶ 野話もあった夫婦茶碗がいま遺品 野子くる音もなく老いの朝空し 野子の地蔵事故の子に似せて 野子のでは、 野子のでが、 野子のでは、 手がりでは、 野子のでは、 手がりでは、 手がりでは、 手がりでは、 手がりでは、 手がりでは、 手がりでは、 手がりでは、 手がりでは、 手がりでは、 手がりでは、 手がりでは、 手がりでは、 手がりでは、 はがりでは、 はがりでは、 はがりでは、 はがりでは、 はがりでは、 はがりでは、 はがりがはが、 はがりが、 はが	長会ベッコウの眼鏡が並ん を娘の枕あすへの夢多く で娘の枕あすへの夢多く	大 一	おだてにも乗れて幸せ続く人帰る家あって楽しい旅がえり感動へ輝く今日の桜花
竹	Ξ	細呂	村	佐
内	宅	木	L !	野
寿 美 子	3	魯	光	白
子	亭	木	輪	水
回誌を手にする を動きますがいたんの 大災は忘れない	を の墓を も	約束を崩 がなと語	私でも美人に 三つとも無事 こっとも無事	神様の境
話を手にすると残り火燃えて来る。	こ るたん と あんと を あんと を あんと を なんと を かんと	してしまう春はやてってタバコくゆらせるな夫婦にもある妥協点な	事に帰ってる北の老母 にはなれぬバラの花 にはなれぬバラの花	現に赤い椿植え つもひとりで立っている でぬままで椿の花が落ち
すると残り火燃えて来る かってとやってくる 守口市 野ないでとやってくる 守口市 野	心にといかける 心にといかける のしい回り道 の両手に菜種梅雨 島根	阪市	と待ってる北の老母にはなれぬバラの花にはなれぬバラの花	に赤い椿植え もひとりで立っている
5.00	心にといかける 心にといかける たのしい回り道 島根県 島根県	版市 大	と待ってる北の老母にはなれぬバラの花にはなれぬバラの花	に赤い椿植え もひとりで立っている もひとりで立っている
野	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	阪市 大野	を待ってる北の老母 にはなれぬバラの花 にはなれぬバラの花	に赤い椿植え もひとりで立っている もひとりで立っている

1.1.1.1.1.1.7.2.4.1.7.4.4.1.7.4.4.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1	後ぶ鳥よ羽が行方を印っている	産長されるの句で 後三時ノルマのねじが	わりの誤算前線紛	姫路市 大 原 葉 香	年金はハナハトマメの年代期	春うららカラオケ唄う台所	嫁入りにへそくり出した朗らかさ	断崖を背負う釣糸春の海	奈良県 宮 川 古都路	夜桜へ孫の両手に支えられ	三時間の停電工事見たりはいったり	三時間の停電恋しくなるテレビ	陽に干した布団が匂う快さ	芦屋市 竹 中 綾 珠	薄情な人が狂わす春三日	感泣の気持も一日経って消え	週刊誌の漫画を読んでも腹立つ日	未来図に合わぬ演歌を口ずさみ	岡山県 岩 道 博 友	ねじを巻く時計にセコンドの音がある	離婚等思わず言わず五十年	箸に掌を合せば肉の味鯛の味
 米担君の見みること言れ	吃分 定者 に 冷力 となる 歯 哀 オ	っぱしば分くここの冷夏い勝った余韻砂の味がす	ーラス	姫路市 丁 坪 サワ子	善因善果子供のころから信じてた	年金夫婦合格祝いも割勘で	老母連れてミシガンに乗る春四月	老妻思い山田五十鈴を賞めぬ夫	大阪市岡田ふみ	明日を待つ廻り舞台で瞳をつむる	お祝いに本音も見えた美辞麗句	宝くじ当りまへんなとまたも買う	晩年を招くミレーの絵よ鐘よ	羽曳野市中 村 優	税務署へ叱られに行くあほらしさ	子育ても終り我に何も無し	剃られつつ眠る床屋に春うらら	初節句祝う老母あり五月晴れ	大阪市 欄 蘭	町なかに村ありその名映画村	ため息を嫁は実家へ持ち帰り	腹の子に魚の骨もたべてやり

急行の停らぬ町に花と住む 寝屋川市 堀 江 光 子 巻子一つめぐり男の意地が燃え 寝屋川市 堀 江 光 子 巻子の停らぬ町に花と住む	ばれてからが七坂待つ夫婦 隣の羽振りへ妻のねたみ口 隣の羽振りへ妻のねたみ口	土より下界を洗う彼岸雨年の友逝った日の花の冷で血圧守る味にさせった子の部屋に西日が深球今飢餓と文明に虫ばまずの大田の花の冷ではません。	豊かさが単細胞をまた増やし 西宮市 津 山 冬 子売り言葉舌がもつれて買いそびれ 西宮市 津 山 冬 子体質が困らす僕は花粉症
世界の成 と摺も海荒れてこそ絵にもなり は一直を過ぎれば遍路坂 四国路の旅 四国路の旅	大阪市 坂 本 仙がンザイの主役の裏へ下り線嫌われているとも知らぬ高笑いがられているとも知らぬ高笑いが、 本 仙の 逆らった母にすまない罪いくつ	とそんな発想もする孤独のとそんな発想もする孤独のとそんな発想もする孤独のとそんな発想もする孤独のとそんな発想もする孤独のと	痛いけど御免なさいの瞳がきれいなぐさめは黙って注いでくれる酒を当ってに通夜の客本蓮の白を目当てに通夜の客本蓮の白を目当てに通夜の客。 おいし 川 克

寝屋川市 岸 野	かぶとの緒しかと結んで夫達者	別居してどちらもしびれ切れはじめ	満開は下手なマイクへ散りいそぎ	音もなく桜をぬらす古都の雨	交野市 山 本	妥協などない闘争の胸算用	椋鳥になりたい女が独りいる。	三面鏡女の個性は映さない	背信の鏡を磨ぐ妻の意地	島根県 岸 本	首かせになるのは一カラットのダイヤ	花嫁のドレスに似たり雪やなぎ	水やりへ一鉢毎に話しかけ	ちぐはぐの服装で来て落ち着かず	西宮市 西 口	負け知らぬくずれルックとこじき型	年金でくらしの歩幅変えられず	古世帯夫の言葉は「めし」と「ふろ」	番大も一%の餌代を主張する	. 西宮市 山 片	白紙には戻れぬ橋にさしかかる	境界線割って筍皮を脱ぐ	立ち止まる橋に答えが流れだす	八十二まだまだ雑巾しぼりきる
あやめ					テルミ					輝水					いわゑ					紀雄				
	さからわぬ事を覚えた年の功	忍従の果ての空しさ持て余す	花冷えに延々続く愚痴話	カレンダー連休ばかり計算し	大阪市 板 東 倫	玉手箱引算ばかりするカード	印を押すだけでよいよと軽く言う	何がどうしたのか近頃そっぽ向く	名士だけ読んで弔電その他略	岡山県 二 宗 吟	ナルシストだから木乃伊に志願する	六月の雨の切れ目で泣いている	かたつむりが行き過ぎるまで拍手する	ゆりかごにきっと落ちたい流れ星	鳥取県 森 山 盛	校舎建つ池のたにしはどこにいる	老人じゃないこれからが青春よ	教授先生老いても威厳つくらねば	寒いよと訴える目の冷凍魚	豊中市 奥 田 満	財布一つ買えば中味が減りました	逆うてばかり居るなと亡母の声	切り替えの早い頭の薄情さ	ボケに克つすべを勉強しています

桜

平

女

子

選 集

みの 花曇り道に迷うと大と行く 虫もうまい と思う朝 の風

黒

Ш

紫

香

輪に入れば和の楽しさに包まれる 借り傘を返すと雨が降って来る

手の

つけぬ料理にサービス料がつく

本 H 恵

朗

新札ももう皺くちゃという苦労

春四月先ず税金がやってくる

春うらら露座の大仏まで出かけ 人生は疾風いつしか死を見つめ 見詰められるのが幸せとは限らない 沈黙が壁に向 ムをすぐ使う子に親しめず っては ね

忙中閑ふうせんの行方見ていたり

I.

藤

甲 吉

本 水

正

捨て犬と負け犬妙にうまが合い

森繁が好きとコーヒー

追加する

欲少し捨てたら肩が軽

くなり

形式の古さが案外売れている 碁仇の負けても負けぬ捨てせりふ 雑学者とも生字引とも言わ

n

客

定年でやっと私に来た戦後 この婿に してまろやかな嫁姑

大

東京を堂々とゆく津軽弁

久しぶりの東京で

矢 +

郎

15050																			
握手した奥さまの硬い手よ	石仏の里で見つけたふかし饅頭	頬かむりして潮時を待つ男	春満開天気予報はぱっとせぬ		太い掌に包まれ少年感激す	政治家の名が残ってる赤字線	土砂降りのあとに街路樹ぬっと立ち	蝶一羽元の姿のかげもなし	草の種子女の裾を借りる知恵		味のある男と思う頼り甲斐	肚割って胸開け懐古はせぬことだ	見回せばたしかに古稀は青二才	緑みどりに魅せられている若返り	春愁や詠嘆ばかり煩わし		輪禍の日から殿様のお子みたい	叱り度い程に賽銭はずむ妻	素通りがわかれば怖い家がある
				Ш						長						野			
				内						野						村太			
				静						文						茂			
				水						庫						津			
	天気子報あたりだしたらあたりだし	どうなろとやれやれ入試だけ終り	素人の荷造り笑いそうな紐	世は酒と言わんばかりの飲みっぷり	女とは酌の合間もコンパクト		花道とおもう素足に踏みしめる	箸の向き茶碗の位置のわらい声	盃の数からはずむお久しぶり	目を閉じて有為転変の桜花に向く	笑み給う梅に母なるいのち知る		春よ春学校帰りのチーパッパ	算数は○点六・六増減案	さあ咲くぞ春一ぱいに吸いこんで	減塩に馴れてだんだん牛になる	饒舌が票田PTA役員		お手をあげ下さいお恥ずかしい私
	天気子報あたりだしたらあたりだし	終	荷造り笑いそう	酒と言わんばかりの飲みっ	酌の合間もコンパ	米	みしめ	向き茶碗の位置のわらい	の数からはずむお久しぶ	転変の桜花に向	いのち	水	りのチーパッ	·六増減	咲くぞ春一ぱいに吸	塩に	舌が票田PTA役	尼	かしい
	天気子報あたりだしたらあたりだし	終	荷造り笑いそう	酒と言わんばかりの飲みっぷ	酌の合間もコンパ	米 沢	みしめ	向き茶碗の位置のわらい	の数からはずむお久しぶ	転変の桜花に向	いのち	水粉	りのチーパッ	·六増減	咲くぞ春一ぱいに吸	塩に	舌が票田PTA役		かしい
	天気子報あたりだしたらあたりだし	終	荷造り笑いそう	酒と言わんばかりの飲みっぷ	酌の合間もコンパ		みしめ	向き茶碗の位置のわらい	の数からはずむお久しぶ	転変の桜花に向	いのち		りのチーパッ	·六増減	咲くぞ春一ぱいに吸	塩に	舌が票田PTA役	尼 緑之	かしい

2000000									2000										
健康が蹴散らす生きて行く不安平均寿命より下で祝うて欲しくない	金	雑踏のみんな見知らぬ人ばかり	長生きはきっと出来ないサラ金屋	叩いたら馬鹿げた音のするバケツ	ふたりっきりで来ることはない珈琲店	ここらで締めておかねばならぬ桶の箍	小	花首を待ち受けるのも雑草だ	這うてきた道を雑草隠せない	雑草の耳には水の音がある	しあわせをこぼしても咲く草の花	川岸の草のはなしに耳を貸す	八	にっぽんの夕日きれいな鶴の舞い	まるい言葉出るまで時を置く母娘	娘の信念にまかし見守ることにする	国家試験パスしてるわよと言う自信	六年は長いようで短かかったと卒業す	高
	井						出						木						橋
	文						智						Ŧ						操
	秋						子						代						子
還暦になお	還暦の	還暦の	還曆〈		どん	黙々	主義	坂道	苺つ		婚約	桜散	ナメクジ	寝た	ふれあい		水の・	生甲非	禁煙一
還暦へ奥歯気弱な口を利き	の若さはPTAに籍	の記念に柿右衛門の赤	へ孫という名のプレゼント	川口弘生	どんなこと言うても母はただ微笑	黙々と文句を言わず座りだこ	主義主張言えない母の白い旗	のドラマ峠に埋めておく	苺つぶす女の見事な嘘を聞く	藤村々女	婚約をしてから送り送られる	れば次はさつきで飲む話	クジの線は昨夜の行動記	寝たきりも平均寿命の中に入り	あいを説いて夫婦が折合わず	月原宵明	止め忘れあふれただけで済み	表があるから呆けはせんだろう	禁煙二年灰皿穢いものになる

同人吟

文 秋

前月号から一

そういえば筑波はどこにあるのかな

う。こんな盲点をこの句はついている。 学博が出来ることで初めて知った人も多かろ 旅なれた人ならともかく、筑波の地名も科

貧しくてすぐに値札を見てしまう

を知らないとあきらめがつかないのだ。 る。手の届かない品だと思っていても、 こころが貧しいと欲しいという気持がつの 掘り下げて聞けば受けうりだと逃げる

逃げたくて一般論で答えとく 高 橋 千万子

うろたえかたが面白い。 れると自信がなくなる。第三者から見れば、 知っているという優越感も掘り下げて聞か

いい返事して実印の迷うなり

杉 游

> 胸を叩いたのはよいが、本当に来られて引込 困った時はいつでも相談に乗ってやるよと

医者探し試食するようにはいかぬ

出来れば、乱診、乱療の犠牲になる人もいな かったでしょうに、お気の毒でした。 試食とは見方が面白い。しかしそんな事が

戦争は嫌い基地だけ貸すとする

さん居るんだから、痛しかゆしですね。 基地を貸す事で生活をしている人も、

下り坂二人三脚もめはじめ

気分なんだが、下り坂になると、たとえ夫婦 でも足並が乱れがちになる。 順風満帆の時は足はこびも軽く、ルンルン

連れ添うてとうとう空気にされちゃった 神夏磯

手をつなぐそれだけでよし老いの愛

ばのとした老人の愛情。共に平凡の良さです ね。いつまでも幸せに長生きして下さいよ。 空気と言われても満足している女房、

でも甘い汁を吸わせておけんよ。大役を仰せ 三越のお家騒動を思い出した。そういつま あまい汁吸われたあとの役につき

狂うから面白い人生設計 H 次

つかったが、なんとか立直らせなくては。

ると思うんですが。 計を上に持ってくる方が、リズム感がよくな 盛し、易者も食って行けるんですよ。人生設

人生思い通りにいかないから神社仏閣が繁

丁重におどす税務署の説明

入れかえた方がよいと思います。 そんな感じがします。この句も上八と下九を おどすわけではないんでしょうが、確かに

障子戸はいいな血圧下がるよう

な。とにかく老人には心身共によいです。 障子戸の落ちつきは、ガラス戸で出ません

煙草屋の娘からたばこ買いたいな 芝 登志代

つわりの娘戻れば婿まで転げ込み 自販機は味気ない。昔がなつかしいです。 野こう

母親が逆に使っている敬語

ちかごろこんなケースが増えてきました。

時代が変ったんですね。

中年を孤児と呼ばれて母国踏む

飢餓の子のニュース見ながら食べ残し

人生の中の明と暗を見ました。

頰被りのまま握手求めてくるソ連

いを前向きでしてくれんかな。

北方四島など持ち出さずにば開発の話し合

今回は本音の句を鑑賞させて頂きました。

川柳太平記 (85) Ш 柳 嶋 0 群 像 涛 東 明 大

ったのは「講談倶楽部」の井上剣花坊選に居を大連に定めた時からだが、その契機とな君臨する第一歩となった。

掲載されたので、私はすっかり有頂天。川柳が上位入選したことにある。 「生れて初めて作った川柳が三等に入選し「生れて初めて作った川柳が三等に入選し

会へ出席しないかといってきた。 これに眼をつけた大連川柳界から、川柳句にれに眼をつけた大連川柳界から、川柳句組しやすしと大得意である」(句集「娘々庙」後記)

からも注目された柳誌である。

「私は大連川柳会の同人として活躍を続けるうち、いつか新参ながら会の指導者にまつりあげられていた。(略)川柳はすっかり私をりきつけていた。俳句や短歌に比べて、歴史の浅い文学で完成されていないものがあるように感じた。「大いに開拓する余地がある、新しい川柳を作らう」と私は同人に訴えたものである」(同上)

ところがこの新柳誌も、伝統派の高橋日南

この訪問によって、彼は二年後に大正川柳のなが、満州からはるばる訪ねてきたと剣花坊も喜んで会った。これが本格的川柳家にななもで会ったと彼自身述べている。つまりま明は大正五年官用で上京したのを機に剣

しかしこの柳誌は涛明個人の出費によったとが、経済力がともなわず三年目の大正11年ため、経済力がともなわず三年目の大正11年ため、経済力がともなわず三年目の大正11年と財政援助を申し出たので生れたのが、大陸と財政援助を申し出たので生れたのが、大陸と財政援助を申し出たので生れたのが、大陸と財政援助を申し出たので生れたのが、大陸と財政援助を申し出たのでは、10年間の大正11年4月であった。

く涛明は懸命に立ち廻ったことだが、かえって大変な騒ぎとなった。この事態を拾収すべて大変な騒ぎとなった。この事態を拾収すべて大変な騒ぎとなった。この事態を拾収すべて大変な騒ぎとなったのは大正14年剣花坊の

革新派で固まったのを機に休刊になる。らの保革同舟から内部分裂を起し、昭和3年に小林茗八、革新派の井上鱗二、和田黙然人

びる破目になった。
て伝統派の連中から「両刀使い」の批判を浴

昭和に入って非詩派の石原青竜刀、小林茗 八らによって「青泥」(昭5)が発刊され、涛明 八らによって「青泥」(昭5)が発刊され、涛明 (はまた保革中間派の実力派柳人を糾合して、 を掲げ続けた革新派は、佐々木三福が東京へ 井上鱗二は奉天へ、中野柳陽は山海関へと分 散し、次第にその勢力を弱めていった。 満州国政府が誕生し、満州芸文協会設立と ともに川柳部長(昭3)、それから戦争の進展に ともに川柳部長(昭3)、それから戦争の進展に ともに川柳部長(昭3)、それから戦争の進展に ともに川柳部長(昭3)、それから戦争の進展に ともに川柳部長(昭3)、それから戦争の進展に

ある満州土木建築公会の誕生とともに理事長

会長に推された。 会長に推立れた。 会長に表した。 会した。

昭和18年、大陸土建業界の一大統合機関で昭和18年、大陸土建業界の一大統合機関では一つの大きな転機といえよう。 理知を歩いてきな転機といえよう。 では一つの大きな転機といえよう。

に就任している。この頃、筆者は新京日日記者で立場上よくこの頃、筆者は新京日日記者で立場上よく方に出入りし公私ともに多大の御支援を蒙っうに出入りし公私ともに多大の御支援を蒙ったものだ。その際、彼は筆者との柳談の中でたものだ。その際、彼は筆者との柳談の中でたものだ。その際、彼は筆者との柳談の中でたものだ。その際、彼は筆者との柳談の中でない。

創刊され、さらに全満州川柳人の大同団結に

より東亜川柳連盟に生れかわると涛明はその

中庸の川柳の道がそれだと思う」中庸の川柳の道がそれだと思う」
「青泥」に拠った非詩派の闘将、石原青竜
「青泥」に拠った非詩派の闘将、石原青竜
である」とよく若い筆者らにこう揚言してい
である」とよく若い筆者らにこう揚言してい
たものだが、この涛明作品の中の
太陽をまん中にしてみんな生き 涛 明

る。

涛明を語りつくした好出版物である

ま業の指をほどけば何もなし 涛 明 虫けらもやはり自分の世と思い " 虫けらもやはり自分の世と思い " 虫けらもやはり自分の世と思い " カだとわれわれは感銘したものだしかし、この青竜刀のいう涛明の格言川柳しかし、この青竜刀のいう涛明の格言川柳

に心配りも行き届いた世話をしたことはよく らやつかみをかったことが、筆者にいわせれ 陸の涛明に送ったこともある。剣・久両極端 良伎が絶賛し、自ら半折にこの句を書き、大 あったのである。「粋人の」句などは阪井久 であり、宗教である」というのが彼の生涯の 知られている。ともあれ「川柳は一つの信仰 ば保革二刀流の流言の因をなしたのだと思う。 賞されたことが、往時の大連の既成川柳人か の大家に大正の末ごろ、大陸に涛明ありと推 貫した主張であった。 涛明死去の翌年8月 という味覚豊かなおいろけ川柳があるには 娘々庙―大嶋涛明川柳集」が発刊されてい 涛明は大陸を訪れる川柳人は、すべて平等 四畳半女の無理を聞くところ 粋人の俺と無粋の彼との差 涛 明

大嫌いだった。つまり新しい川柳とは、今日

端を行く言葉の切れ端のような新興川柳も

ただ今を正しく生きていることの証しである

★次回は「清水美江」

大陸における涛明は旅順以来、

一貫して十

誹 風柳多留 廿六篇研究(11+1-11+11-1)

南 得 小 野 真 孝 本 多 Œ 範

石 Ш 成 大 屋 郎

木 黄 石

H H

光

木

敬

故出

 \mathbb{H}

甫

335 百人て御機嫌をとる御延引

ろう。歌加留多で御機嫌の取結べるほどの年 御むずがりになるのを、お附のお乳の人、奥 南 = 花の雨で御延引と決まって、駄々をこね 齢の姫君を想像すればよいと思う。 女中達が歌加留多で御機嫌をとり結ぶのであ

八木一賛

御延引古歌をならへて御たのしみ

0

多田一替

出典不詳句に「夕立と雪見の間に

弟子ハ雨先生は雪て名が高し

11 14 37 上: 19 しし・9

風雅さハ師弟の名句雪と雨

秋葉道」。

田田田田田

岡田 多田

336

師ハ寒く弟子ハ涼しい名句也

337 鶴といふ字も舞ッて居るのどやかさ

> 凧のこと。鶴とかかれた凧が長閑やかな新春 の大江戸の空に舞っている叙景の句 南=「鶴といふ字」とあるのは、鶴の字の字

にころぶ所迄」。「弟子ハ涼しい」は其角の 南一「師は寒く」は芭蕉の「いざさらば雪見

「夕立や田を見めぐりの神ならば」。 いずれも名高く、名句であるとの意

四六:34

鶴の凧亀屋の家根へ引ッかかり

多田一赞

世に振るハ師匠の雪に弟子の雨

雨にぬれ雪に転んで名が高し 五九・29

岡田―同

338 我としへ四字足したのが名句也

句なりとの数字を弄した謎解きの句 という)が、それに四字足して詠じた十七文 字の「井の端の桜あぶなし酒の酔」の句は名 南=十三のお秋(後、其角の門人となり秋色 十三の春十七の名を残し 一儿 4

井戸ばたの桜あぶない年でよみ

一 〇 九 · 35

多田=賛。
石田晋=わかりませんでした。多謝

さくらより娘あぶないとしによみいつ迄も桜さめせぬ名句なり 三六・21

岡田一賛。

339 おどり子にはまり切たも一首入れ

亀索を寵愛されたのは後鳥羽上皇で、その御南=小倉百人一首の中で踊り子(実は白拍子)

世を思ふ故に物思ふ身は人もをし入も恨めしあぢきなく

の一の動機だという。

この亀菊と地頭との争いが、

承久の乱

多田―賛。

承久の乱は転びの出入なり 安四・叶2

圏田―同。

二十一丁

3個 美しいすつとのかわを御てうあい

たり、盗人、盗人根性」と広辞苑にあり。『川 小野=すっとの皮は「すっぱの皮に同じ。か

> 来る腰元と註してあるが、語意からすれば小 柳大辞典』ではこの句を引用して、忍び足で

美しいお妾を小便組とも知らず御寵愛にな便組のことであろう。

本多=-妾説には賛だが、小便組とまでは決めるお殿様を詠んだ句。

★屋=「すっとの皮」「すっぱの皮」の用例 大屋=「すっとの皮」「すっぱの皮」の用例

ではいることばとしての例が圧倒的に多いので、「小ることばとしての例が圧倒的に多いので、「小ることばとしての例が圧倒的に多いので、「小ることばとしての例が圧倒的に多いので、「小ることばとしての例が圧倒的に多いので、「小ることばとしての例が圧倒的に多いので、」

めりやす物

●出一大屋氏説のように「すっとの皮」はののしることばに使われているようです。「妾」

三二一」という句がある。心ある家臣の眼か岡田―賛。「お妾のむつごと呉れろく〜也」

34 よひ花を見なから水をくんて居る

夏の宵、夕顔を賞でながら水を汲んでいる

本多=叙景句説賛。

家の井戸端近くに咲いていた夕顔を眺めなが

石田成=「朝顔に釣瓶とられて貰い水」。隣

八木─①千代女、②秋色女、以上二人を考え汲む千代女か。

南=八木氏秋色桜説賛。

多田=秋色桜賛。

混同して使用していました。

342 きょすのあさる所から御ひろひ

小野=「きぎす」は雉子の古名。地唄、長唄、

とて例外ではなかった。つまり大名の吉原へ大門前で、ここからは全て徒歩であり、貴人大門前で、ここからは全て徒歩であり、貴人と洒落れていったものであろう。場所は吉原めりやすが聞えてくる事をきぎすのあさる

八木―いろいろの用例から「雉子のあさる所」のおしのびを詠んだもの。

多田―野掛説賛。そういう光景を奥様にお目の野掛けを詠んだ句であろう。

そこで句意は、例えば大奥御女中達の早春

したのか。

岡田─諸説で語句の追究はすんでいるが、ど が一ばん無難か。

上方前句付集の雄編

『明石人丸大明神三万句集』 (tt)

711

義

雄

瓦竹堂李坡点の川柳史的地位

発生させている 川柳点に近似した句を生んでいるだけでな 出すに止まっていたが、寛保三年になると るべき句はなく、李坡点の系統と見られる 後の晩鈴点を媒介として川柳点の先駆を見 年の頃の李坡点には未だ川柳点の先駆とな めるに至る過程を概観してみると、寛保二 李城点の川柳点に対する先駆的地位を占 明らかに川柳点の先駆と見られる句を

然るに、延享元年になると、この李坡点

と、江戸の湖月点、泰月点なども、李坡点 神三万句集』を見ると、川柳点は勿論のこ

が出来るようになるから、この頃に至って 李坡点は次第に川柳点の先行的地位を示し の湖月点や川柳点の先蹤句を多く見ること てきたことになる

の中に、江戸で川柳点に最も近似した句風

っていることも頷かれることである。 泉流が江戸の湖月と共に、同じ李坡点を採 な投句者であった事実を想起するならば、 次に、延享四年の李坡撰『明石人丸大明 なお、兵庫の泉流が嘗て李坡評への熱心

> の句を供し、李坡点が江戸万句合や大阪の 川柳点だけではなく、江戸の露丸点へもそ に大阪刊の『折句式大成』を媒介として、 によって影響されていることが知られ、更

柳点への影響が最も大きかったことになる。 にまで伝播したことになるが、中でも けて湖月・泰月・露丸・川柳等の各万句合 は、京都・大阪・兵庫(の会所本)などで あって、江戸ではそれが宝暦から明和にか にあったことが益々明瞭になってくる 折句集などに対しても、先行垂範的な地位 従って、堺の李坡点の影響の及んだ個所

なお、江戸の収月点が泉州の双峨点の句を採っていることを考えるなら、泉州の点者が江戸の点者に対して如何に優位にあったかが知られよう。

次に、右の泉州の会所本に見られる特殊は、遺憾ながら事実のように思われる。は、遺憾ながら事実のように思われる。要するに、万句合においては、佳句が概要するに、万句合においては、佳句が概要するに、万句合においては、佳句が概要するに、

延享四年における李坡点の地盤とした地延享期の泉州点者連に附句の一句立可能体延享期の泉州点者連に附句の一句立可能体の風姿を整えさせたものであろう。

年以来の大阪の会所本一般に見られるもの

に、このような特殊慣用前句題は、享保十慣用前句題を検し、この系統を辿ってみる

勢力は全国的であったとも言われようが、域が摂津・和泉・紀伊・河内・播磨・阿波域が摂津・和泉・紀伊・河内・播磨・阿波域が摂津・和泉・紀伊・河内・播磨・阿波域が摂津・和泉・紀伊・河内・播磨・阿波域が摂津・和泉・紀伊・河内・播磨・阿波域が摂津・和泉・紀伊・河内・播磨・阿波域が摂津・和泉・紀伊・河内・播磨・阿波域が摂津・和泉・紀伊・河内・播磨・阿波域が展開・大阪の地域が表現があったとも言われようが、

その寄句高から見ると、主勢力は地方にあ

その雑多な伝統的な地方風に制せら

大衆の句を選したものを上方句とするなら

上方の前句付万句合の点者が上方

京都版の観があった。いたために、上方句というよりは地方吟のれて、依然として享保以来の停滞を続けて

又、延享期江戸興行の万句合は、九百翁雲鼓・筑文・湖丸・収月・南華坊・桃女等の開巻を見ることができるが、その主流を成す雲鼓・湖丸等の選句は京都版の亜流に過ぎず、収月点にも既に初代収月点の面影はなく、筑文点に至っては全く見るべき佳はなく、筑文点に至っては全く見るべきはなく、

は不便であったと考えられる。は不便であったと考えられる。

従って、延享期の江戸万句合は川柳点の 佐って、延享期の江戸万句合は川柳点の 野四、五年の湖月点によって漸く延享期の 野四、五年の湖月点によって漸く延享期の 大駆的地位を占めるには影が薄く、江戸に の宝 が出まれ、この宝 では、この宝 が出まれ、この宝 がは、この宝 がは、この宝

表的なものであろう。

表的なものであろう。

ま自なものである。

○延享元年『奉納泉州岸和田蛸地蔵尊○寛保三年『奉納家原文殊堂五千句集』〔注〕○寛保二年『堺神明宮五千句集』

万句集』

○延享四年『瓦竹堂中村李坡撰『明石人 九大明神三万句集』

川柳アリンス国と阿達義雄著

田中角栄・鳥屋野潟越後高尾・上杉謙信・角兵衛獅子越後遊女・越後縮・アリンス国

◇頒価 一〇〇〇円

えて、傘寿の記念に刊行された。 柳上杉謙信」「川柳田中角栄」等を加柳上杉謙信」「川柳田中角栄」等を加柳」「鑑賞江戸川柳」の両書から吉原柳」「鑑賞江戸川柳」の両書から吉原

発行所 鳥屋 野 出 版

新潟市和合町二丁目二

九



黒

III

紫

香

選

市 吉

电

野

JII 寿

美

貧め身春

から 愁や許

出

た錆に行く手を阻

まれる

すことの

2

多

か

1)

L

あ

あ平和花屋に春

が溢

れてる た軍手干す

しさに馴れてしまっ

んめんと書き足す母のかな便り

さよならを何度言

わせる花吹

雪

阪

市

清

水

康

惠

浪

花節

0

b

か

る助

人

が散り悲し

ダー

0 城 0 汗 がたたぬ果敢 逆転 劇を見せた なさ水すまし

子六百

花

繚

乱

0

か

12

7

戻る

肩 10 0 な

蝶

八尾

क्त

高

村多

T.

歩

誕生日律気に覚え老いはじめ東西屋に白けた笑いみな中流

0 がくる 西宮市

紀 市

郁

栄

宅に住んではいるがみ の八方美人が気にいら いことが多すぎる な他人 82

手鏡を拭いても美人には遠い悪女だと言われ続けてけしの ちょい でい つも どこかに傷がある 花 尼崎 市 福

礼

H

子

ない 師に飼 男と歩 われたハトでくたびれ 3 ・昼の月

る

手 頼

品 1)

增

長をさせてはならぬヒゲを抜く

神さまに事あるごとに叱られ味の素ぐらいでごまかしは効外壌を埋めた音から黄昏れる

るか

X

抱

きしめ

てあ

げ 3

明

日散

る花ならば

藤井寺市

赤

木

和

子

裏 ri li 1) 花

通 じ社

1)

步

いた女の捨て台

お

0

ちょこ

それだけのひとだと思う受話器おく

足音も小さくなっていく母

ょ

ある日ふとひとりになる日を考える やすらぎをお地蔵さんにもらいます

-42 -

東予市 小 山 …	針山に女の愚痴をつき立てる	過去の傷そっとしておく春の風	美しい嘘にストロー屈折し	拍手する猿の悲しい目に出合い	亡き夫に逢いたくて見る星ひとつ	熊本市 永 田	一目惚れの顔でなかった箸二ぜん	電話器へ声を落してまだ粘り	保護色を拒み流浪の鳥となる	保険屋が玄関で説く死生観	別れ道コントが一つ落ちていた	富山市 舟 渡	茶柱が一石二鳥を勇気づけ	応用のきかぬ相手へ気がつかれ	誰よりも付合い上手なかすみ草	気にかかる視線がいつも背中さす	母さんに公休などない忙しさ	熊本県大川	与えられた包丁だから研いでおく	髭剃って女運から遠ざかり	深入りをしすぎて出口みつからぬ	泣き顔がとてもきれいな受賞式	手ちがいが少し気まずい風になる	尼崎市田中
悠						俊						杏						幸						晴
泉						子						花						子						子
ほら吹きの男が辿る曲り道	尼崎市	助太刀にあとは任せる裏出口	静寂の中から摑む心の灯	今度いつ逢える尾灯が小さくなる	晩飯に来いと和解の席が待つ	吹く風は男を焦らす処方箋	尼崎市	ふとこぼす言葉を風が黙らせる	気紛れな風に耐えてるかすみ草	雨女つらい音色の笛を吹く	似合う服着れば翔んでもみたくなる	蝶二つまぶしい程の和やかさ	米子市	奥の手は人間くさい味がする	先頭も矢印ばかり探してる	小庭雨今日六月の肌となる	ン・ドウ・トロア 靴はシンデレラ	喧騒のエアポケットに独り居て	名古屋市	火事見舞い善意が温いにぎり飯	廃止線過疎の絶景惜しまれる	セールスのノルマを責める棒グラフ	蝶々も浮き浮き花が咲き乱れ	ヘルメット仕事の貌になる職場
	丹						児						茂				のサ		藤					
	下						玉						理				イズ		井					
	玉						歌						高						高					
	子						子						代						子					

結論を急ぐ男の失語症	冷えの朝ジョギン	点滴の雫やり場のない瞳	大阪市 藤	払えると踏んだローンにある誤算	停年を話題に夕餉わびしくて	親の目で見ればつまらぬ奴に惚れ	縁談が来るので親が落着かぬ	熊本市 宇	石ひとつ積んで仏に遠く居る	鳩百羽寒もどり来し本願寺	逢いにゆく傘が重たい夜の雪	かくし芸終ると猪口がゆききする	しあわせな絵皿に春のいろを溶く	長岡京市 木	背のびした分だけみじめになる自分	意地と意地ぶつかり合った日の無口	ゴキブリも生きる権利は持合せ	赤札へ少し無理した試着室	よく喋る女で情報確かなり	京都市 松	去って行く女のメモを握りしめ	中流の生活見ているうちの猫	雨やどり軒の表札読んでいる	地方版町の詩人が記事になる
			森					野						本						Щ				
			小雅					昭						如						芳				
			子					代						洲						子				
言い訳は用意して来た花時計	母の絵はいつも吾が子の彩になる	自画像へ朱を入れてみる春嵐	兵庫県 東 浦 砥	花言葉哀しい嘘を信じきる	だまし絵の蝶に孤独のレモンティー	この春を蝶になれない計が一つ	子を産めぬ女が嫌うひな祭り	今治市 野 村 京	人形もしゃべりはじめた春の部屋	甘い言葉だけ聞いてる耳飾り	逃げ道をさがして迷う蟻もいる	昼の月蝶の化粧を見てしまう	米子市 光 井 玲	雑草の中で薬となる役目	夜は紫ひとつの恋が消えるとき	ワンツースリーエアロビックス妻励む	再会を信じ別れの握手する	鳥取県中原み	母よりも大きく伸びた子と並ぶ	背に家紋着せて男の児を信じ	義理がたい牡丹が蕾二つ見せ	明るい真昼電話どこにも通じない	鳥取県 中 原 汲	よく喋る男と茶店の昼をいる
			代					子					子					さ子					香	
																		-					100	

われく	岡山県 小 林 妻 子で息が出ている。 というしょう という という という はいま はいま ない はい はい はい はい ない はい	羽曳野市 田 中 隆 二パチンコの街だけとなる新開地 東市が乾いたままの共稼ぎ これきりと思う逢瀬を断ちきれず	ウスタイプルに指定する とい案は出ぬまま酒を追加する をは出ぬまま酒を追加する は、大きないないですがあっても酒を出すでなしまがれあがれと言っても酒を出すでなします。	超袖をたたみいつの日また着れる 型油をたたみいつの日また着れる 少しずつ過去を忘れて生きている	大阪市 上 田 柳 影ポストが赤いので真っ赤な文になる
	産色の絣似合った日の想い 妻のメモ今日の献立早わかり 一片のメモから鋭い好奇心	が見えてますよと月笑うが見えてますよと月笑うが見えてますよと月笑うが正んで寝てる冬の床	芝青み雀二羽ずつやってくる 青森県 福 士 ト キ 芝青み雀二羽ずつやってくる 雨やよし庭木一寸ずつ伸びる	もう冬の酷しさはない梅の影 明を育てた里の耕耘機 関豪を育てた里の耕耘機 二刀流の構えも見せるガイドさん	後を継ぐ子の海鳴りへ心せく 伊丹市 樫 谷 郁 子

終り無き対話がつづく森の中納得のゆかない幕を引いてみる和歌山市 桜 井 千 秀	の月	ばか面	こころあらたな衣替えおろし一味違う酒	落ち椿ころげて花心の彩が冴え 高槻市 笠 嶋 恵美子 茶ち椿ころげて花心の彩が冴え 一番 かっぱい でとしま いっぱん あいまし いっぱん いっぱん いっぱん いっぱん いっぱん いっぱん いっぱん いっぱん	吹田市 茂 見 よ志子車間距離守ればすぐに割り込まれどの位置からみても美事なしだれ花	らごっとなざりる兼二条の一時間待って診察二分間
遠廻りすれば犬にほえられた親の敷くレールなんども踏みはずし 枚方市 二 宮 山	行商で流した汗で回り椅子恵友の誘い心の角で待つ	家中が絡み合うてる洗濯機 吹田市 井 上 照自画像へ黒枠なんか用意せぬ	んな吐かせてそろそろしゃべる口にはチャッ	ご近所は中流面して共稼ぎでドンナにウインクされてからの熱精糠の妻も書いてた雕緑状間上の羅漢さんなら女好き	老人に手を貸し亡母のこと憶う生きる荷が少し重たい母の死後生きる荷が少し重たい母の死後二次会は誰言うとなし同じ顔 西宮市 松 本 一	i a

朝

征

郎

久

子

ライ たんぽぽをコップに浮かせて春を見る す 肩 割烹着ひとつに女色と柄 これも愛息子のくれ 1. 底辺で明日を信じている暮 演 奥の院は大木の根もあらわなり 中流になれたとおもう庭園 カセットテー 御 車窓より見える桜で満足 ち 信の返事に返事 前 札にちょっとは目効きの出 せを摑みきれない 電話耳を交互 奏会の招きが桜の咲く頃に 定に立 b バルがそこそこ伸ばす棒 て喫う一 様どれ程呑んだか靴の音 直る支えを妻の手から借 がとれてだん L 一って明日の夢探す Vi 仲間 服をうまそうに プ中におふくろ生かしとく に 0 視野 だだん 書 使 たディ 細 b 12 て恋 だ 低 がせる 僕 ナー 灯 t 腰 来る年 いる グラフ 1) 今治市 発田 大阪 能 京 小都市 本県 市 市 月 1 高 亀 森 给 木 原 JII 野 井. 春 宵 春 くし 枝 3 草 女 敏腕 呆け深くなっ 菜の 辞 花冷 霧晴れる視点を換えただけ 左手で制し右手でさぐる欲 相部屋の鼾にそっと湯へ抜ける 身を守る術タイミングよ ここだけ 好きな人の助手席 見せられぬ涙を見てた昼の月 結界にポツンと小菊咲いている 許 子をもうけ拓けた視野に壁が取れ 合 散歩コース今日は古本屋が休み 善人の似顔絵どれも丸っこい 自 す気になってエ 鍵 80 の婿 花 屋 車を作るロ ますと好きな上司にすねてみる えのコー のキー を手折り逆 で 0 使 話を囲 麻雀強すぎる Vi て平 トに嘘をつつ はドアー 切 る包丁 ボットつくる人 プロ 和な母となる 縁 せい に乗り夕暮れ 0 昼 子に レン白 の気 を研 1) みこ くする に召さず 供 なのに 涙 え 鳥取県 大阪 愛媛県 高 尼 3 む 槻 崎 市 市 市 [II] 吉 八 さえき 渡 瀬 部 塚 永 芳 三 五 伊

ż

島

郎

子.

極楽は遊んで食えるとこらしい傷つけぬ言葉選ってる思いやり 愛媛県 石 手 武	星が降るうれし涙がとまらない美しい指で逢いたい日を決めるふりむかぬうしろ姿を信じよういのちを燃やして蛍が翔んでくる	久方の客今日は忙しいとも言えず人の気も花の心も知らぬ雨たとう紙に式服おさめ娘を思う	譲り合う同年配のバスの客 岡山県 後 安 ふさえしなやかな指を想像した見合いしなやかな指を想像した見合い	喧嘩しなが 順 ボ ボ 逆 ら わ なが 打 た わ	い立ちを波に聞いてる浜千
すみれ草昔話が好きそうな好物が同じでどちらもよく笑い良い事が続いて後ろ振りむかぬ	、心配を隅っこに寄せ街に出る いわし買う堂々と買うスーパーで	家元に連なる女白い足袋 四十年平和な風が曲りかけ 関ルの胸のリンゴがにおい出す	ウインドーに見とれて友を見失う 面白い世相を聞いた露天風呂 面白い世相を聞いた露天風呂	川柳に火をつけられて古希燃えるいざこざにかまわず富士は夕焼けるいざこざにかまわず富士は夕焼けるを軽任の噂もチラホラ花曇り	野仏の少しうるさい土筆取り 静岡市 渥 美

美代子

寿美子

弧

舟

妙

子

敏

子

大阪市 布 施 サチコライバルのよく似た過去を聞かされる 靴磨く父子そっくりの減り具合 で言す 秋 元 て る 西宮市 秋 元 て る	ロボットに人間の仕事盗まれる 米子市 堀 江 純 子陽が登ると時計が急に動き出す 米子市 堀 江 純 子	善い事をした夜の星は美しい 定年を待たずに定期券が切れ 山口県 高 崎 雀 声	雑草の涙を月が見てしまい 雑草でいいさ明日は起き上る 憧れの椅子がくるりと向うむく 鳥取県 福 田 あや子	買いに行った女の跡もないも彼も知り度い人の影を追柱に賭けるもの有り紅も濃	中古車になって身売りの値札抱くメシにするパンがよいのと朝の膳洗い髪風と遊んだ昼さがり 大阪市 横 山 為 子
満開の桜に明日のないさだめ 和歌山県 森 三 枝 子花見客もてなすための草を抜く 和歌山県 森 三 枝 子で表の墓何を言うても片便り	帯一つ跳んで絆が狂い出す島根県 園 山 世 似腰かけた石の一つが語り出す	再軍備の姿チラホラ千歳飴 米子市 小 村 てい子若い頃結んだ小指のフルムーン	西宮市 待 田 麻 黄白さぎの白さが映える里の山 西宮市 待 田 麻 黄金える日の願い遙かな雲に乗せ	打ち明けた後はりんごが良く剝ける好きだから話がもめる菜種つゆ 違いに行く赦すつもりで逢いに行く	正反対の意見も胸の底にある 倉吉市 淡 路 ゆり子これ一つ片づいたならと今日も暮れ宝石の要らぬ変った女です

憎まれることをしゃべってしまうロライバルかいないと競争しない馬		本当の勇気無口が持って居た	聴診器今度は舌を出しなさい	春闘と平行線で来る物価	熊本市北川一	目と手だけコンピューターに動かされ	落書きのできる余白に夢浮かぶ	雑音の彼方に消えた花の色	熊本市 黒 田	民族衣裳の帯が一人で結べない	監督が一番小さい女子バレー	レストランで主賓の孫が寝てしまい	大阪市 田 中 節	楢山へ行く道知らぬ鳥を飼う	妻でない女に弱点にぎられる	花開く種の心を知りつくす	岡山県 千 原 理	あの時の皮肉が徐々に溶けてくる	本人はそれより飯にしてほしい	ガム嚙んで後の方で聞いている	弘前市 田 中	相部屋の寝言も旅の語り草	何もかも未熟なガイドでいい笑顔
	哨彦				進				緑				即子				违				叶		
つくば博人の流れにさからえずサービスのつもりが歯科医能くれる	日に父のごろ寝が許される	呉 市	はらはらと桜吹雪の長いみち	島守にあの娘のうわさ告げる風	もう一度逢いたいばかりに船に乗る	伊丹市	作業衣を形整え高く干す	霊園に公園つけて売出され	白足袋をならべて干せば向きあいぬ	吹田市	商魂は道路に出して積みあげる	鯉のぼり隣のを見て育てられ	幸せを悟る茶の間の笑い声	大阪市	年金も受けてサイタさくらが咲いた	それなりに写った写真にケチをつけ	もう春よいやな奴だが蜂を見た	出雲市	ままごとのパパとママ居て花の翳	桜散る社務所に暗き灯を置いて	お揃いの傘が路地ゆく姉妹	八尾市	昂奮をしてる言葉がすべり過ぎ
		蔵				Ш				Ш				今				小				鷲	
		重				崎				田				西				玉				見	
		成				君				里				静				満					
		人				子				子				子				江				章	

鳥取県 灘	L U	花吹雪逆らい飛んでる蝶二匹 超山県 牧 花吹雪逆らい飛んでる蝶二匹 標活けて老母一人の雛節句 高槻市 梁	シーソーのつり合っている隠しごと食うだけの事が男の手に余る病室へ隣近所が出来てくる 川西市 野	誤字もあり温みもありの母便り 自転車に乗れば春風ついて来る 音森県 波	木登りの猫がウルトラCで降り 減量は祭りがすんで始めます 病む腰で夫の入院用意する 唐津市 浜	ふり向いた人と目の合うひとり旅 暇人にされて幹事の役貰う 中流の顔ぶれでいるレストラン 兵庫県 森
尾	1	班 川	村	*	本	脇
民	3	秀 吉	静	た だ	ち	和
子	Ĩ	香 子	雄	お	ょ	子
英語しか解らぬ孫が帰り来る	世草も止めていつ迄生きる気 世草も止めていつ迄生きる気	これもまだ吏えるもので場所を取りよく似合いますよと売子如才ないおうないとのではないのではない。これもまだして牌さばく	ラッパ聞えを見せる娘	骨までもしゃぶりたくなる娘を育てふとん被って花見疲れの雨を聞くスマートな燕がどじな俺を抜き	カラス会孫の写真ももってゆく カラス会孫の写真ももってゆく は計図へ意見の指が寄る茶の間	兵き
	Ш	高	桝	芦	乾	円
	原	野	井	田	喜	増
	章	不	蕗	静	与	貞
	久	-	児	江	志	子

「人は皆旅人歩かねばならぬ 他人から見ればなんでもない事件 他人から見ればなんでもない事件 自分との対話ができる古寺あるき な木市 井 上 盛	新人のさわやか受付け若返り他人行儀になって疑い深くなる 兵庫県 奥 野 テ	夢一つ転がしながらバスもゆれやがて渡る河なら石を積んでおこ何時か見た青空尋ねて森へ行く 米子市 祝 部 寿美	さんが残す形身は作業服とさんが残す形身は作業服となった。	コボットに飲わせて見たい充分飲電線のスズメおのろけ聞いて居り 今日も又化粧直しの雨となり 岡山県 富 坂 志	持ちつけぬ金に目がくれ逃げ遅れ生かされてふと振り向いて足の跡
雄 子	ル	子	風	重	
古傷を面白そうに言う他人 古傷を面白そうに言う他人 大モをして買物に行く年になり が来て風邪の土産を置いて行き が来て風邪の土産を置いて行き が来で風邪の土産を置いて行き	すき女であるが母であるの春はあまりに色多く	孫みんな巣立ちわびしい雨の音 があるさとの一人とでいく悲しい日 があるさとのつくしの味に出あう幸	県	に を と き は の ら な い 方 が よ い カ ル テ 、 と た と た り ま し た り ま し た り ま し た り ま し た り ま り ま り ま り ま り ま り も り ま り も り ま り も り ま り も り も	もう一歩離れて眺めてみるも策
戸	伏	古,		Ť	Щ
H	見、	永		H	田
種	すみ	な	-),	平
子	れ	お	子	子	和

大阪市 堀 口 欣 一	大物になれず石橋たたいてる	大物になれず漫歩の六十年	老い先の地図を描いて物足りぬ	鳥取県 松 本 みをき	小さい芽僕が見付けた僕の春	妻 倅 嫁 孫二人 丑の春	三十分早起きをして梅見てる	弘前市 真 喜 内 實	捨てきれずあれもこれもとゴミを溜め	ライバルの笑顔を見ると寒くなる	ランニングシューズを脱ぐと女になる	島根県 小田川 智重子	和やかな心を乱す悪い耳	人恋し降り込められた昼下り	コットンの着心地十五年夫婦	竹原市 石 原 淑 子	フェンスに隣同士で布団干す	傘の下親子を結ぶ雨の音	牛の糞耕し秋の米づくり	出雲市 小白金 房 子	メルヘンの世界にひたる夜桜見	老いの美の追求をする髪を染め	残り火が燃える三面鏡のすみ	竹原市 信 本 博 子
お総菜少し控えて花の苗	田辺市 染	一日は一日分だけ新芽伸び	ダイエット我慢我慢と言いきかせ	朧月今夜の妻は美しい	高槻市 笠	愛一つ捨てる女の壺がある	やせ我慢しなくてもよい母の膝	面白く逃げて手を打つ道化役	岡山市 中	旬の来た頃には飽きのきた野菜	春風に隣棟上ぐ槌の音	和を守る馬鹿になる日が多過ぎる	岡山県 池	落葉して木も頑張っている姿勢	逆光を受けて網張る女郎蜘蛛	年なりの苦労を背負う鍋光り	指宿市 渡	惚れぼれと男盛りの汗を嗅ぐ	単身赴任眉宇出征に似た気満ち	ぼんやりとして悪口はみんな聞き	鳥取市 若	ぼくの朝ぼくに出逢った夢をみる	花咲いてむかしをしのぶ茶臼山	笠智衆淡々として春の夜を
	道				松				嶋				田				辺				林			
	佳				高				千				牛				伊油				_			
	明				子				惠子				仙				津志				止			

眠くても顔に出せない招き酒	大阪市	給料はコンピューターが決めて来る	偏差値の言葉におどる若い母	大阪市	捨て兼ねてごみを被ったおもちゃ箱	夜桜を横眼に急ぐ塾通い	竹原市	春が来てチャイム頻りに鳴り続く	出不精の庭に春が咲きこぼれ		手内職時計のネジを巻いてから	った子	和歌山市	あったぞと天眼鏡で見る名前	表札へ別居中とは書いてない		神苑の松さえ虫が喰い荒らし	所持品にすべて名を記す佗しさよ	島根県	とび越える勇気がなくて皿洗う	コーヒーが人事異動の話させ	河内長野市	春の川子も大もいてあたたかい	界地図トイレに貼っ
木	公			兼			佐			北			堀			Ш			森			植		
Z	本			松			藤			Ш			畑			П			Ш			村		
	5			宏			令			悟			靖			高			英			喜		
i	· ·			安			子			郎			子			明			子			代		
核家族親の小金が気にかかり	i	泉南市 坂 根 流 水	貸工場借手はうどん製造業		泉佐野市 大 工 静 子		香りだけいただく隣の沈丁花	岡山県 杉 本 伊久栄	長女を貰った故に上座に居	セーターを脱いだり着たり春近い	倉吉市 田 中 八太朗	志賀の女浜を守りて威勢よく	大和路を春風うけて老いの坂	大和郡山市 岡 田 寿美礼	思い出を忘れぬように結びおく		西宮市 飯 森 泰 世	赤くぬる鳥居は神の情熱だ	子の居ない部屋のスリッパ裏返る	米子市 金 山 夕 子	一本のさくら囲んで家族の輪	太陽へ向って旅立つシャボン玉	. 島根県 岩 田 三 和	解らぬが結果をのぞく心電図

鳥取市 武 田 帆 雀いつまでも刺しゅうのハンケチ引き出しに	シャネル5つけてハンケチスターめく	大阪市 松 尾 柳右子	畑仕事やっと終ってサロンパス	仏様こぼれる程の願いごと	岡山県 福 原 悦 子	ひな壇に登れば無口喋りだす	まっすぐに走れば春の風笑う	岡山県 矢 野 山 人	つきつめて行けば気弱の夫頼る	出稼ぎの宿でこけしが泣き笑い	益田市 里 本 たかし	ありがとうその一言で変わる風	人柄がわかる団地のごみ出し日	唐津市 米 倉 彩 女	修正のきかぬ心を茶でしずめ	涙 涙 涙 まだ残っていたらしい	和歌山県 山 田 久 子	立ち話陽だまりのよい寺の庭	庭の梅世辞の一つも行商人	藤井寺市 菊 地 繁 男	戸締りをしても吹き込む隙間風	十字路で耳をかすめる亡母の声	倉敷市 赤 沢 沢の藤	
今日もまたひとこと言うて掻き乱す 吹田市 西 岡		足裏を名札代わりの哺育室	泉佐野市 真 崎	お互いにサン付けで呼ぶ元夫婦	医者よりも待合室で教えられ	八尾市 松 下	朝寝坊するなと雀かしましい	空腹へ隣の秋刀魚よく匂い	島根県 高 尾	涙もろくなってテレビへ妻の留守	絵心が無いのに無料で見る個展	橿原市 西 本	老い虚し意見は古いと反故にされ	句のこころ少し解って句のとりこ	兵庫県 野々口	部屋いっぱい埃に女のいくさみる	案じてた便りに笑顔描いてくる	鳥取県 林 原	年金も貰うが税も払ってま	写し手が下手でニコンの味が出ず	大阪市 平 井	景気でも付けよう貰った酒がある	碁が好きで四つ置かせて苛めてる	
进 52			浪速子			蕉露			よし子			保夫			悠也			尚			露芳			

生流く似てる	耳遠い同士大声張上げて	きい] こここと ごう 義理をば謝しつつ焼香す	七五三金太郎館とスナップに 鳥	粉病	i	び出した蛙とひょっ	大阪市 野	春四月なれど炬燵をしまいかね	裏庭の畑にひょいとふきの薹	新宮市田	病室に今日も見舞の千羽鶴	名月や病室ぬけてビヤホール	八尾市 #	優勝へ祝辞一言土佐訛り	決め球の三振伊野商日本一	高知市	蓬餅色粉ばかりで春を告げ	ふるさとは龍宮から来た程変わり	和歌山市	うんうんと猪口傾けて聞いてやる
	西西		 H							田			椎			北			三	
				展			村			中			尾			Ш			谷田	
	文	Н		清			八一			围			公			竹			周	
	次	ři	ì	茫	ì		重			彰			子			萌			Ξ	
いてなお心結べ	あらためて生命の不思議考える大阪市	沈丁花庭中香りでいっぱいだ	皆を言う舌でおざも	夜業する妻に済まない花の酔い着雨に濡れて出歩く猫の恋		彼岸のお墓の前で般若心経	地下鉄の待つ間もおしむ週刊誌	大阪市	見て聞いて読んでは書いてボケ防ぎ	サンマ焼く煙中流漂わす	兵庫県	情報化三年経てば大昔	尻軽いだけが取柄のへボ医です	和歌山県	天と地の空間科学で結びつけ	公園の桜へ宴の下見する	守口市	世界中炬燵で見れる有難さ	恋愛で結ばれ仲人頼むだけ	広島市
末	橋		Щ		中			山			仲			北			岩			花
永	本		本		内			脇			井									
														Ш			林			H
英	悦		炉		朱			正			素			凡			市			繁
枝	子		斉	•	坊			之			水			太			郎			子

市船越	大阪市 朝 田 晃 世春うららデートですのと羽ばたく娘 大阪市 安 西 カ ネ	大阪市北川	阪市松岡久留	からへ馴	単身の赴任を曽やす国祭化親の意に添わぬ就職だったけど 米子市 宮 本 佳女男小さい子小さい役に立ってくれ 米子市 宮 本 佳女男買得品女の垣をのぞき込み
おべんとうたまごはいつも入ってる母さんがわに皮もってどこへ行く母さんがわに皮もってどこへ行く友(でつにひと足入れたら春が来た	茶柱が立たぬとはしで立たせてる ジュニアの部 枚方市 二 宮 摂 子 始ふくむローぱいの甘い香が	大阪市北田	蝶結びやっと覚えた一年生蝶結びやっと覚えた一年生大阪市 字 久 はる子	大倉	二代目の肩を暖簾が撫でている 唐津市 相 葉 あ き子離れで夫婦の会話途切れがち

年 度

60

川柳塔賞 路 郎 賞

候 補 作 品品 中 間 発 表

至 自 昭和60年4月号 昭和60年1月号

路郎賞候補作品

(到着順)

太 茂 津

野

村

もつ一度叱ってほしい看護する 内芝登志代 味方撃つときも哀しい顔をする 波多野五楽庵

本人の前なら悪口言うがよい

内海

幸生

意地はったつもり誰にも気づかれず からくりを知ってどうなるものでなし 谷垣 増田 史好 次章

何を盛っても許してくれる白い皿 味わいの深さ土鍋が煮えている 安心をさせると母が頓死する 光代 英詩

年代

言い含めながらコンニャク炊き上がる

自我張れるのも妻がいて妻がいて

病床の友が笑うたので笑う 敵持たぬ男の肩がたよりない 死ぬほどの想いを伏せて返し針 元旦やどちらを向いて拝もうか 清姫になる自信なら持っている 岩田 松原 西山 耕花 美代 寿子 幸

正 本 水 客

何を盛っても許してくれる白い皿 母の声遠くで叱っているらしい 餡パンにヘソあり女愛すべし 国道を無事に渡って来た毛虫 谷垣 児島与呂志 高橋千万子 史好

うちの酒が美味しいなどと言いはじめ 元日も家族は私一人だけ 友達の後を歩く安堵感 藤田 春城 泰子 代

正朗 憎いほどかるいことばで別れてく

小出

智子

形見分け宅急便にして届け

十字架としてならギブス軽すぎる

八木

千代

双六の上りに置いてあるみかん 怖くないナイフで女房が林檎むく 松川

病床の友が笑うたので笑う 西村 北野

久子

早苗

聴こえたら長い電話をするだろう 御命日腹立った事思い出し

安藤寿美子

西田

柳 宏

心開くと笑って見える鬼の面 父が居る凧がやっぱりよく上り かるがると蟹太陽を差し上げる 越智 小砂 奥田みつ子 白汀 水

竹内花代子 林はつ絵

埋もれ火は明日の風が掘り起こす 有難い法話へ鳥カアと啼く 谷垣 史好

久家代仕里

相談をする気へ夫もう寝息

堀江

芳子

文平

馬鹿になることが上手な母の箸 昇る陽へ無神論者では居れぬ 勝目ない喧嘩野良犬避けて行く 台本のない人生に悔いはない 水ポトリ自然に還る旅に出る 背伸びなど止そう塩つぼ砂糖つぼ 辻 内海 西山 安藤寿美子

橘 薫 風 ブレーキの遊び程度の役をもち 八起き目の勇気は神の鈴も借り 母の声遠くで叱っているらしい

中島 野中

正博 御前 児島与呂志

泣きながら立ってる塔もあるでしょう 木守柿二階の窓は受験生 西森 花村

ほんの少しからさが足りぬ敵の塩 大根処刑貴方を許す身代りに 槇田 都倉 八木 求芽 英詩 千代

うちの酒が美味しいなどと言いはじめ 多喜一忌や骨の髄まで二月なり 腹切りの好きな部下がいて困る 飢えていた頃に与えていた母乳 高杉 川端 岩本雀踊子 柳子 鬼遊

新しい出逢いへ低い靴を買う

掃除婦のマスク決して笑わない

春城 西山

年代

魚にも鳥にもなれず海に佇つ

新家まさる

睡いとき眠る齢をいただきぬ 小出 年代 高飛びをする気か蜘蛛が糸を吹く

義理チョコを食べる会などいたさんか 蒙古斑いずれ男を悩ませる かるがると蟹太陽を差し上げる 憲法の序文に愛の字を見つけ 陶枕展賢者の夢と愚者の夢 波多野五楽庵 小砂 前川千賀子 白汀

Ш

安藤寿美子

モーニングサービスを出てゆく一兵士 国道を無事に渡って来た毛虫 高橋千万子

牛の背中でときどきは振り向こう 弥生

影すこし重ね旅人すれちが 素うどんを底まで吸って達者なり 一十匹の猫二十匹妻したう 八木 中原 笛生 千代

ルメットかぶれば女も負けていず 樫谷 寿馬

やがてニコニコ宅急便で届く核 結納を持って下車する白い里 父が見ているとよく飛ぶ竹とんぼ 人間が好きな日嫌いな日の暦 谷垣 星野 角野かず子 はつ絵 史好

人文字の中のひとりで抜けられぬ 正江

III 柳塔賞候補作品

野呂

鵜汀

谷 垣 史 好

先頭が転んで運が向いてくる ぼかし絵の浅い眠りにいる少女 胡桃割る天地を神が砕くごと 革命の旗はお子様ランチから 枕辺にみな居て風に鳴るトタン 花の種千の想いを裏返す 野村 山口 田中 寺田 塩田新一郎 裕美 京子 高明 11

む とても器用に卵を割って淋しいよ 藤井

狂虎

じゅげむじゅげむと言うてるうちに暮れなず

友達が大勢いてる普通の子

福田

礼子

おしっこがしたく出て来たかくれんぼ 松本ただし

夫婦喧嘩に猫が逃げ犬がくる 山に陽が隠れるとこが今日の宿 順番に咲いて散るなら事もなし 豆腐好き個性ないのが一人居る 裏切りの背中は追わぬあかね雲 麻野 羽津 田原 川公乃 久子 幽玄

鬼 遊

さだかではないがあの時見たは愛 先頭が転んで運が向いてくる 寺田 裕美

赤木 和子

寝ておれと叱るが何もしてくれず じゅげむじゅげむと言うてるうちに暮れなず 藤井 高子

友達が大勢いてる普通の子 礼子 静子

福田

明治大正昭和と生きておもしろし 堀口

欣一

花の種千の想いを裏返す

まして冬恋の湯冷めはせぬように

ごちゃごちゃとうるさい方が先に酔い 狂虎

思い違いのボタンがずれたままで秋 古川美津枝

どんじりの味方がくれる傷ぐすり 清

寿美

すり抜けたかすがい火の章水の章 田中 晴子

ユーモアも忘れてしまったビルの窓 淡路ゆり子

つ手前の角を曲ってつつがなし 清水

日銭追い裏も表もない暮し 舟渡 高尾よし子

杏花

康恵

小 出 子

明治大正昭和と生きておもしろし

いい話聞くだけの耳持っている 頼りにはならぬ味方が手を叩く 堀田 如洲 欣

> 鬼よりも貧しく生きて鬼になる おかしうて少し哀しい老いの芸 病院もポストも近き佗住居 どの家も岩湧山が見えている 日溜りへ日だまりへといく話 自画像にまた誰か来て髭を書き 年のゴミを叩いて身が軽し 山田 神平 植村 田中 小畑よし子 妙子 狂虎 紀雄 喜代 p+

五分五分と言われて闘志湧いてくる 秋元 てる

白無垢で隠しおおせているつもり 順番に咲いて散るなら事もなし 吉永伊二郎

何か言いたそうに蜜柑剝いてくれる 列に並べばみんな胸を張る 礼子

板 尾 岳

たとう紙に行み込んでるおんなの炎 千の矢を研いで私に弓がない 速力のない妻の矢が避けられぬ 裏切りの背中は追わぬあかね雲 終着の駅に夫婦の湖がある 寺田 上田 田原 鈴木 清水 康恵 裕美 佳秋 良征

寝ておれと叱るが何もしてくれず

かくれんぼ母が探しに来てくれる 北向きの窓から届く果し状 涙顔かくすおかめの面を買

野村

この塀の向うが見たいカタツムリ 野瀬 月原つくし 昌子

> 約束がまだ果せない冬苺 どんじりの味方がくれる傷ぐすり ある記憶鶏がいて母がいる 涙もろい鬼で地獄を馘首になる 高杉 福田 田中 田中

> > 礼子

叶

空瓶へ無茶苦茶流が活けてあり 稲本 永田 凡子 俊子 鉛筆の芯いつも尖らせている孤独

晴子

河 内 天 笑

友達が大勢いてる普通の子 モナ・リザが笑って見てる資金繰り その嘘に妻は安心して眠り 何食べていようと旨い差し向い 児玉 田中 高野 宵草 歌子 叶

ちょっといい話リズムを狂わせる 何不足ないが酸素が足りません 涙もろい鬼で地獄を馘首になる 岸野あやめ 高杉 福田 八木 芳水 干步

変身がとても上手なちぎれ雲 灰皿へ本音ぽろりと置いて行き 掃除機の掃除が出来た定休日 米倉 森脇 平松かすみ 今西 彩女

ロボットは社長にお辞儀しなかった 入院をしますかと脈とりながら 順番に咲いて散るなら事もなし 浅野 赤木

少しずつ埃払うている余生 大西 小林

橘 高 糞 面 選

春へ歩く痛んだ足をひきずって 寂しくて根をつなぎ合う雑草だ 大阪市 小 # 木 金属の墓標が並ぶ筑波博

いっそ敵に廻したほうが楽になる 智

7

和歌山市 西

春はまだかぼちゃの馬車はまだ来ない 川西市野

だんだんに齢とっている写真帖

二枚舌が利かなくなれば落選サ

青森県

I

藤

甲

古

大正ロマンを白髪は秘めている

コイノボリもF16も空青し

笠岡市

木

Ш

读

悔しいが桜のように散れぬわけ

寝たきりの恩師に習うことばかり 签岡市 松 本

グリーン車の顔をちらっと通り抜け

摘み草はこどもに任せ裏話

休戦の啓示はなきやイ・イの民 春霞かかったような御挨拶 茶ヶ崎市 Ш

民営のたばこ値切ってみたくなり

脱税も先生という腕を持ち 厳しさが父の温みとやっと知り

リラの花残留孤児に遠い春

背チャック馴れて虚しい孤りの灯

叶

日の疲れ

桜満開米ソが少し歩み寄る 片手だけ団結をするエイエイオー

お役所が会社に変る四月馬鹿

伊丹市

谷

寿

馬

封筒の中から故郷の風が出た 国捨てた女の部屋に酒がある

原

宵

明

近頃は日本男児よく笑い

島根県

刑

村

早

苗

澄んでいる水と聞こえる水の音

寝屋川市

iT.

光

子

ひとり言心づもりがつつぬける 連れが降り女スイッチ切ったよう 孫のように育って猫の行儀かな 道行きて川あり川に橋が在り

堺市

高

橋

千万子

墓へ出る道もすっかり春の景 玄関で神説く春のお昼頃

花屋さんに頼めば事は済むのだが

幸

どの顔もあきらめている人形たち

静 雄

忠

守口市 原 静 步

1: 元 才

鳥取県 福 H あや子

高知県 111 菊

野

中

連翹忌生れかわるも女の子 連翹の黄の極まりて淑子の忌

岡山県

白

岩

文

衛

T

代

急ぐ程ゆっくり動く自動ドア 妻の口封じる咳をひとつする 岡山県 ± 居 耕

花

初恋は赦せよ胸の内のこと の人を送った朝の雪を掃く 岡山県 小 林 支 子

吹田市 後 藤 火 鳥

慟哭の激情越えて寺巡り 好きだとは言わなかったが通じてた 尼崎市 春 城 年 代

じゃが芋の芽が叫んでる籠の中 天衣無縫の女も持っている鏡 枯

雑兵の溜り場ぐつぐつ芋が煮え 名古屋市 越 村

その指に止ってからの不仕合せ 谷 まさる

茜雲いま亡びゆく男あり 高槻市 河 瀬 芳

子

うなぎ一匹実篤の絵の旅の宿

吹田市 儿

豐

梅の香に慶びの酒光ってる 益田市 里 本 たかし

かまきりに喰べられている夢を見る 和歌山市 坂 部 紀久子

の音でおちる鍵 富田林市 藤 H 泰

花びらの地吹雪に遇う坂の街 近江八幡市 前 111 千賀子

	京都市 松 川 杜 的	肩書の癖を家まで持ち込まれ	橋本市 岸 本 木 魚	花むくろおとこの視野にふれるなよ	島根果小砂白汀	鳩、雀、ひわ、からす、僕、梅見てる	弘前市 真喜内 實	他人には知恵も小出しにして使い	米子市 小 西 雄 々	水すぎた記憶にどもる遺児あわれ	高知界山下登舟	遠いとこよう来た孫と握手する	寝屋川市 岸 野 あやめ	7	和歌山県北山凡太	愛憎の両刃女は生むと言う	唐津市 久 保 正 敏	际	唐津市 田 口 虹 汀	粗食よし美食尚良し老いの膳	寝屋川市 宮 尾 あいき	髪洗い忘れることが出来たなら	西宮市 奥 田 みつ子	花見宿床にもサクラ生けてあり	米子市 菅 井 とも子	花吹雪仁王は少しも怖くない	米子市 政 岡 日枝子		藤井寺市 赤 木 和 子	0 2 2
浜 本 義	幸せネ電話暫くとぎれてる	河内長野市 植 村 喜	杖を持つ春が思慮を深くする	富田林市 岩 田 美	麻酔全治したなら叩こう母の肩	平田市 久 家 代仕男	まんだらの仏の数と罪の数	高機市 笠 嶋 恵美子	定年でよかった妻を看てやれる	倉 利	子の愛に支えられてる俄か寡婦	中綾	愛深し森の奥から届く声	市川端柳	音もなく椿が落ちて以後の闇	米子市 林 荒	どうしても雨には勝てぬ男達	神平狂	失敗をつなぎさらりと書く自伝	新発田市 上鈴木 春	鳴り続く亡母の笛にも四季があり	米子市 寺 沢 みど里	娘の家のリビング僕の指定席	田中正	愛情の鎖が錆びていく決れ	那質都 大 屋 秋	医者の手が神にもみえてくる夜明	上照	地にかえる美学に桜風に舞う	上江河勝
		代 青春の父の日記は反戦記	羽曳野市 田	代花がみなほほえむじっとしておれ	米子市 青	第 牽制球連れの女へ投げてみる	小松市 小	分 代表の名刺に錆びが出ています	守口市 長谷川	義 職退いて庭の植木が活気づき	西宮市山	珠子を嫁にとられた方が平和です	豊中市 上	子ちっぽけな蕾が春を知っていた	岸和田市 芳	介 孫娘へのマシマロは試食して	和泉市 岡	虎 皿幾つ割って女は主婦になる	唐津市 浜	枝親不孝倒れた父の齢を越え		有難や三晩でテレビ	豊中市 額	坊 縋られて縋って夕陽温かい	島根県 堀	峰質問に笑っただけの聴診器	島根県 堀	子 思い出の山河を被覆う雪の里	唐津市 简	子神は鈴仏は鐘に招び出され
	刈		中隆	2.1			林靖		台川		片紀		田登志実		地狸		井やすお		本ち		波多野 五楽庵		田明		江芳		江 正		井朴	

島根県 榊 原 秀 子 石の声樹		島根県 松 本 文 子 父の古稀	修羅もあろう巣立ちへ赤い飯祝う	大阪市 渡 部 さと美 ほどほど	花の下上司夫婦の笑顔あり	和歌山見 南 恵美子 今日のこ	ねぎ坊主白い雲までのびたがる	鳥取県 さえき や え 綱乾きき	銭出してコアラに顔を見せに行く	葉あき	春の風邪初孫抱けぬもどかしさ	大阪市 大塚節 子 口紅で鏡	楢山は名を変え今も生きている	育敷市藤井春日 托鉢に頭	落花幻熊野謡う声艶やかに	西宮研 朝 山 千世子 顔のきくご	煙草持つ手がほんとうを語ってる	八尾市 松 下 蕉 露 出すぎた	自動ドアー開かぬ母になり給い	大阪市 中 西 兼治郎 爪の色少	蜻蛉より蜥蜴に似てる大八州	大阪市 西 森 花 村 菜種梅雨中	流行でも軍服色は嫌いです	米子市 茂 理 高 代 本心をかり	難波なる花はこの花梅の宮	大阪市 川 口 弘 生 赤字線だ	一度童子昔の記憶の部屋に生き	米倉彩女	日帰りの旅も旅なり土産買う
石の声樹の声聞え庭に春	兵庫県 野々口 悠 也	父の古稀嫁真心の祝膳	岸和田市清野こう	ほどほどの欲が見えてる人間味	和歌山県 天 満 三千代	今日のこと父に話して安眠す	島根県岩田三和	綱乾ききって汚染の海が凪ぎ	今治市 矢 野 佳 雲	もくれんの白い心に亡母憶う	米子市 光 井 玲 子	口紅で鏡に書いた果し状	尼崎市 春 城 武庫坊	托鉢に頭をさげる先斗町	大阪市 桝 本 蕗 児	顔のきく顔でないのに頼まれる	岸和田市 武 俊春	出すぎたか二の矢気にする老夫婦	静岡市 渥美 孤 舟	爪の色少し若やぐ木の芽立ち	吹田市 栗 谷 春 子	菜種梅雨病夫に春はまだ浅く	羽曳野市 吉 川 寿 美	本心をかくす眼鏡は色をかけ	豊中市 奥 田 満 女	赤字線だから自然が生きて居り	島根県木村はじめ	花の下人の心が透けて見え	鹿児島市 吉 永 な お
	7 FF 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	干前1時5分か	発表 6月33日 (日) ラジオ第一放送	大阪放送局、されべか位場。係			(ハガキに三句以内)	締切 6月10日		課 題 「時 計」選者 森中恵美子		NHK川柳募集		橘高薫風(ハガキに3句)		*	年下の御主人友は派手を着る	貝塚市 行 天 千 代		和歌山市 福 本 英 子		岡山県 山 本 玉 恵		兵庫県 東 浦 砥 代		愛媛県 石 手 武		兵庫県 北 川 とみ子	ラッシュアワー掃除機のよう吸い込まれ

自選百句

小林由多香

1

18 1+ 7

を

嫌

さい

it

がら

n

かいい

理 ス

1

形

語 生

10

名

簿

名

を

か

8 む

泡

13 b

る 確

う 3 ネ抜 てき

0

妻

を

あ

to

てさ

せ 疲 むる

手せ

3

並

な

गि

0

鍋 坂

43

たく

10

て気

n

が囲

.7

た

先

2 b

街

会

10

もてち シ悪位転懐保 再宝結神ユ う 慣 6 工友 護 n 置 勤 L 色 00 7 3: 合 な h 0) 変 から ~ 13 犬 思 を吹 輝 埃 n 坊 文 45 力 を避 た父 か 13 でよ 1 毛 7 Vi 甘 12 疲 出 0 石 n 花 て逃 1+ 之 俺 H to 0 L 1) 0 n 話 0 ズ 7 3 堅 丸 道 0 た 炭 好 冷 汽 ムに 名 味を 顔 を みれ 13 嫁 実 遠 る な道 車 To 飯 かい 平け 今 部 着 隙 < 食 遅 あ は狙 いわら 和む 步 H が屋 \$ がる 3 掃 させ すい は 1) C b 3 酔 12 < n 向 to 3 1+

地弁勲出

俺 開

ば

今

朝

0

ス です 月が を

う

0 17

b

さを

け

てく 包

る

章 稼

輝 0 嘘

£

失

せ は

た平 まる

俺に 考えな

13

あ

1)

され

席

0

から

b

<

欠愛子ポ高伸地口残同 す一執燈 情 請 b ス 形 実 業 UN 味 r) 浪 明 きっ 1 を U 0 車 か 切 7 つくる H 今 12 柄 b U 12 母 てゴ 父に ととき痛 女 H 出 帰 あ 鏡 母 機 6 n た 麗が 元を遠ざ 嫌 4 素 悲 ば 4 n 句 もう 等 被 ラ 0 直 F 悪 害 な 1 2 63 亡父 者 救 歯け 切 Va ゴ 母 酒 負 4 で 1) 3 手 11 17 to さく 紙 あ to 西华 7 n 抱く ま 1+ 戻 るい 3 1+ 45 ず b ま 12 た な 10

10

1+ H た わい 婦 母 1 北 17 调 去呼 0 づ 個

件

ま 耳 な 0 3

曲

げ う

派

隅

3

1)

咳 閥

ま

b 居

之

な

ま

方 かい 0) 提 t 和



俺平先父新店塩蟻交野サ新 4 英 逝 今 替 雄 等 売 in 地 任 0 頭 など 者 ٤ な 0 1) け H 0 E 品 顔 13 3 ス 17 言 井分走 7 ボ C は か 石 慕 もう 安 持 生 材 n 0 つわ 戸け 12 か 1 b きて たな 持 ば h 蹴 勝 7 n 0 12 11 10 再 b 7 部 底 ば 孤 0 H 2 た う 3 思 笑 な n ス 謀 14 起 É ぬ Va 下 か 長 独 た方 腰 顔 80 が反 6 男 0 間 0 販 5 列 笛 10 気 きま を崩 は 1 は 機 物 17 技 なだ 0 糧 母の城 添 2 7 価 0 0 0 Va がさな 2 高 < b 面 40 人 ル か か 3 7 あ < ts b to 負 12 60 か お 追 3 3 4 E Vi V3 V3 投げ う 3

選 il 紙 返 3 13 + を 事 歌 1 かい ス 4 重 1 お ち 3 あ F) 笑 X お 调 ち 商 疎 1 to 捨 お 失 た n 11 丰 n す

> 計裏お鍵 共盛 過国 覚 長 1 0 冷 去 0 0 方 役 大 捨 ぎ夫 を 補 電 所 子 之 L 先 て 7 替 拍 1 助 話 居 0 た 行 猿 えて ラ 3 待 K 道 2 夫母 婦 手か 7 U T 草 婦 0 ス 0 12 賑 0 嫉 * とり op 此 かい 妬 F か V 15 V 7 b 札 磨 b か 3 漏 を ネ 苦 な 母 き 0 1) 0 11 かく 1) 旅 拍 かず かい 10 40 え合い < 15 手 4, 居 火 15 あ 離 か は 酒 聞 3 b 3: 3 2 す 3 ケ Vi 1:13 抜 0 か " たせ お 1) 切ぬ 17 淮 置 ++ 13 備 V1 (す

2

を貝

る珠

など持

短

リ反腕車計会ワ 濡義後子団 13 省 椅 れ理 を 6 0 Ĥ 70 子 人の連 h 視 0 衣 決れ 野 7 横 お 心 0 L 0 ま to 灯 ス 顔 獲 等 E 0 か す げ 3 J' > 世ぬ物 あ + は 9 椅 HK 15/-ᢤ 1) 0 など 足 待 中 進 0 1 列 か から から 定 1) 1) 0 1 7 持 H 崩 12 進 冷 ま XZ た 顏広 寸 ż b がい す た を場 笑う 3 す 寸 3 ま 出 ま 0

る

報

ま

ti.

信

C

らら

12

10

駅

1

たつ

自選百句

内 竹 錆

老眼

鏡

お

むでこに

1:

0)

t)

睡

下つ

する

吹

雪

点字

タイル

11

てお

球を受け

のよう

もちゃ げて却

きげんは

x

ガネ

振 0

りまわ

0

0

10

部

下

通 勤 科 前 1 1 0 迅 17 出 語 地 谏 T 扇 鞄に I. かい 利 場 ま 鉄 すわ る 與 Ti 慣 + 5 か 子 n 鉄 0) るに かい 持 持 切 論聞 たれせ

入

電

車

色

足

L

た

町

切

t)

ひら

歌それ

1)

I 出

育

术

"

鳴ら

路

1)

1)

年

状

講演は家族の 語し合うこれ 対談のきげん がみ がみ 水 銀 借 景 しみ 品 黙る でもてき \$ VD 0 じり 角度 家 泥 11 か君が仕 なす 暦以 VD 0) 炊きたて く二人 迎 知 之 6 難 後 百 時 を狂 0 ね彙 1 乗りが 名調 子 0 0 昼 分 から かい i. を宣 を食 えぬ 譲 低 1) 鳴 子 が地る 1)

録

圃 だ声

B は

起

承

結

ームラン

造

知

らず

筆

と編

集

部

泥

落

ささす

之

完 製 博覧強 7 透 賞 計 校顕 銀 大 視室 受け 職 义 算 歌 微 髪と 室 尺 ラー 鳴 鏡 # る血 醸 幹部 医 記 位 聞 義 t) in ラ 師 牌 出し とネクタ < ~ お V 0) 部言うことなくて去る即もワンマンらしい辛いま骨壺に移される」 父も楽 のよう ルを上 のが 風 戦 順 14 肥 4 壇 上に酌ぐビ r) 1 13 抽斗 ます はかえりみず ぬらい 当 帽模 た る 1) 12

将 棋す せの X 1 しに んだよう 国ではガムを嚙 10 スケ 7 1 11



字学老消工嘱全豪場英球バ気中文扁 悠 窓 1) 賞 会 外 ガ 体 ス 放 審 1] 象 継明平 袋 宙 託 集 17 0 ネ 白 景乡 HB 誌 ゴ カ o It 11 木 紙 0 ウ 循 0 開 鱼 7 0 0 0 足 身 親 胃 4 話 消 は 星 衛 H to. 滴 tr 11 L 15 14 服券 4 を h 次 性 性 7 な 1 0 ż 7 35 雄 星 11 H オ 彙 7 0 11 なら よう とわ 1) は 読 4 1 ち 大 洒 見 課 撮 9 12 Vi 3 番 曹 匙 筆 せ 長 1 10 外 ス 屋 0 ガネ 野 ポ クラ 減 働 順 3 譙 D: 1 些 か 0 0 かい る身 で読 でみ 文 髮 ĺ 徳 客 る 4, b 去 石少 1 見 棚 to 話 __ 1: なな 1 蜂糖 Ŧi 家 80 裏 " 43 1) もそ な 紙 のる な を 1 祖 1 0 か から +0 La 加 t) 0 ti. える なり 記 父 席 拍 IF ぜ か H す が 首 1 無 家 眉 柱 なえ を奪 念館 来 调 手: To 0 は 掛 かい か to 1) あ 0 1+ B 3 刊 h 1) 領 癖 台 3 x 計

万名曲 悠 仏文 すつ 9 賀 D 結 絲 在 I J. 九 1 武 别 書 宅 ス b か 狀 17 品 装 L ころく カ は写解 E ŧ 勤 は ま 山以 É 7 ブ 面 卒 0 B. 講 で務 ま 刑 T げ 減 12 力 後 口 滴 道 b V ざる 7) 斑 ż は 1 1: 0 3 1 定 生説 4 1 n 0 真 義 囲 ス ラ刷 11 2 テ 7 悲 x F 年 0 永 潮 V 0 X 7 6 テコ ガ 児 き声 圭 15 朋 私 科 1 1) 父 Z 時 加 ス き L ーさえ 北 語 3 年 ネ 17 7: 0 h 随 1) 祖 b Un に悩 て 3 3 0 蟬 金 子 H ば のが 雏 から ま 金 とる 襲 来 紅 10 寸 15 " 弔 ŧ 0 裁 0 か か 手錆 集 I 定 とき孫 b 1 3 ンが 1) TK から É から 主 古 紙 V ま to か 1 来 歌 来 ŧ 書 は n 知 0 余 成 衣 かい

b

分

1+ -3

勤

80

1

调 1

1)

37

コ

ス

ター

7

15

げ 0 留

み師 3 並帰

1)

ぎの

から

消

Ш 孫 3

5

ま

61

0

C

7 12

13

売帽

ネクタ

1

0

3

i)

郡上八幡 白川郷の旅 •

《翠柳吟社創立10周年記念川柳大会に参加》

昭和60年4月27日~29日

折しも春たけなわ、旅装を解いて今、

迎えの武庫坊さんと出発地の難波へ向 夜からの雨に濡れて旅情たっぷり。 して寺尾俊平先生、森中恵美子先生とも思い 武庫坊ご夫妻様、智子様のお迎えを受け、 より特急バスで上阪し、紫香先生、薫風先生、 大きく視野を広げて頂いて有難うございます。 雄大で立派な、この世の楽園があることを と自負して来たのに、この日本にこのように 使った山陰をこよなく愛し、一番よいところ ことの嬉しさ。山陰で生まれた私が、産湯を 私の生涯に川柳があり、川柳塔社に所属した らしい旅の仲間に入れて頂いたことを感謝 んと一泊し、朝を迎えると大阪梅田界隈は昨 茶漬をご馳走になり、新阪急ホテルに千代さ 大阪の「みな美」でわが郷土料理・松江の鯛 がけなく御同伴させて頂き有難うございます。 八木千代さんのお誘いで、四月某日、 朝早くお 米子

第一日 大阪出発—関ヶ原古戦場— 4月27日 郡上八幡泊

瑞

林

枝

しゃるのを、ちらと小耳に挟んだ。 買うて新築の公民館に寄附しようか」とお そうだった。西尾栞先生が奥さまに「あれを 翡翠のアクセサリーがあり、 テーブルがあり、 世界の大理石が置かれ、 は、 が所狭しと置かれ、 工場内には時価一千万という緑色の孔雀石の 山の如くベルギー、 御影石や石膏の見事な彫像 ダイヤモンド、 春の花が咲き誇り、 フランス、 女の吐息が洩れ ルビー、 中国等の

差す魚の群は「うぐい」でしょうか産卵のた ような水の綺麗な美しい町で、 くて、娘さんは紡績工場に奉公したと言う。 麦峠の唄の通り、この辺りは昔、 を越える、 には鯉幟がはためいていた。 えて見え、 と55キロの地点では、 で「勝喊鍋」に舌鼓を打った。 ぶきは劇的であった。 しく陽に映えて、春風にはらはらと舞う桜ふ めの雨だとおっしゃった通り、窓外の緑は美 モアが絶えなかった。栞先生が今朝の雨は浄 川柳塔社ならではの朗らかムードで終始ユー 適で、八等身美人のガイド嬢は明るく親切で シャンデリアのある日本周遊観光バスは快 山に囲まれた「郡上八幡」 雪の野麦は伊達には越さぬ 一面の麦畑とれんげ田の田園風景 山の向うに岐阜城が聳 お昼は、レスト関ヶ原 「人は幾つも峠 橋の上から 郡上八幡にあ 擂鉢の の野 底

三十数名の川柳塔社のお方とご一緒させて頂

先ず最初に大理石工場の見学。広い敷地に

顕彰碑があった。自由にディスカッションの 感しました。 城があり、丘には農民一揆のから傘連判状の 出来る平和な良き時代に生きる倖を今更に痛 かすという郡上おどりの里には、 柔かな陽ざしに石畳の坂。 めに川を登ってくるのだと言う。紅殼格子の 真夏の夜を踊り明 山頂に積翠

郡上おどり覚え米子の句座で舞う 瑞枝

郡上八幡—翠柳吟社記念大会— 武

白川郷泊

春 城

庫

坊

■第二日(4月8日

先生の声にさそわれて宿を出る。 所に昨日登った八幡城が、 目がさめた。窓を開けると空は快晴、 を見ると小鮎ややまめがすいすいと泳いでい 右に曲って吉田川にかかる宮ヶ瀬橋から水面 が踊り山峡のすがすがしい空気が頬を撫でる 支流の吉田川と小駄良川の合流点、美しい水 の中の紅殼格子の昔ながらの町家が見られる 朝食をすまして大会迄の間各自散策、 五平餅をかぶりそこね串から落したとたん 渡りきって左に進むと古風な右書き金文 目の前には長良川 幅狭い家並 右手高

> 産物店、 別名白雲水、早速柄杓で喉をうるおす。 行くと、七五三縄を張った祠の下から水がわ いている。これが御当地水のシンボル宗祇水 その横の石畳の道をだらだら下りて 飯尾宗

> > 芸館を訪れる。格子戸をあけて入ると吹抜き

引き返して宿の近くの奥美濃おもだか家民

に入ると先代水野伊兵衛氏(柳人と号し鮎の の土間はみやげ物を並べた古風な店作り、

詠みあって別れた。 和歌の教を受け別離に際し二人はここで歌を 祇が郡上篠脇城の領主で歌人の東常縁を訪ね 文明三年 (一四七一年)連歌の祖、

> されてある。当主水野隆氏は詩人、案内説明 画家)が山深い生活から生れた道具類が陳列

は小学四年生の光哉君、さすが詩人の息子、

自作の俳句を披露してくれた。

もみじの流る、龍田白雲の 三年ごし心をつくす思い川 花のみよしの思い忘るな 春たつさわに湧きいづるかな 宗 常 緑 祇

た数々の家具類を興味深く拝見した。

同拍手。奥美濃の庶民の知性が作りあげ しゃぼん玉屋根にのぼって月の中

愈よ翠柳吟社創立十周年記念川柳大会の会

字の看板に桜間見屋とある名代の肉桂飴の土



八幡城にて

憩の後披講に入る。 兼題11題の中、 町長、寺尾俊平、東野大八各氏の祝辞あり少 始んど満員、出席者約百二十名とか。開会後 場、郡上農協八幡支店へ行く。締切前会場は 天賞に

スフィンクスが大きな主張持っている 石蹴って落ちたところにあるヒント 知

踊子、正坊の八氏入賞。予定よりだいぶおく 五位―はつ絵、六位―鬼遊、八位―千代、 一位一年代、十五位一智子、以下武庫坊、 披講終って個人綜合表彰の発表 百度石女の影が母になる 雀踊子 はつ絵 + 雀

れたため退場、バスに乗込む

はすっかり若葉になっていた。ダムを通り越 御母衣ダムが見えた。六集落約三百五十戸を ほんの僅か出た景色が続く。やっとのことで る。窓外の景色が季節に逆行し落葉松の芽が 川村平瀬のふじや旅館に着く。素朴な造りの して雪を頂く三方崩山(二〇五九米)の麓白 が見られる。水没した村から移植した荘川桜 水中に沈めたこのダム、処々で昔の生活の跡 先ず混浴の露天風呂へ月と山との対話を聞 バスは長良川沿い一五六号線に出て北上す 早速入浴準備、廊下の寒暖計は八度。

> 夜は楽しく更けてゆきました おしゃべりに中国語の勉強に星が輝く平瀬 ケで喉披露やっと大合唱でお開き。あとは又 もり上り栞主幹の中国の手品をはじめカラオ 土地の民謡、句会を終えてきた気易さか座が ような音のスピーカーで宿のママを混じえて と川魚、途中配られたのが熊汁、熊の肉と聞 等席は満席のままのぼせそうになり退却した。 まりお湯の洗礼があったが、すき間の前の特 の龍宮城を拝観、 すき間があった。誰かがすき間を拡げ山の中 いて敬遠した人もあったとか。蠟管蓄音器の 大広間での夕食さすが山家の温泉場、 指を入れて向う側からつか

第三日 4月29日

白川鄉 御母衣ダムー大阪

木 7 代

ば、なんと炭火七輪の朴葉味噌、 いでしょうね」と香りにひかれて広間に坐れ 時間に露天風呂から出てきた方は。 めての旅ごころ。 れんの間」の朝、 たような眠らぬような平瀬温泉ふじ屋 庄川の瀬音をききながら、とろとろと眠 「まさか昨夜のように熊の肉のお汁ではな 素朴な木の湯ぶねに肩を沈 (誰ですか?こんな明るい 朝のお膳に

なく湯があふれ女子浴槽の間仕切り板に少々

月と別れて浴場へ桧造りの浴槽に惜しみ

(

ます。

出発まで

も奥飛驒が漂い

階の板の間を鳴

のひとときを一

らして「袖しー

習ったばかりの 郡上踊り、この ぼーる」と昨夜

嬉しくて哀しく 旅のしあわせが て、昔の女のよ

るのも山の湯の余情です。 明善寺、 うに踊りたくな 八幡社をつな

残雪の山肌、 や木からもらう感動は、生まれる前の人間 ぐ野みちをのんびりと歩いてあるいて二時間 のは民俗の里に伝わる祈りの念に染まるから 言葉が心をゆらします。 心に還るからだろう」と俊平先生の呟かれた 原には水ばしょうが白い夢をみています。「草 くら、すもも、まんさくの花も道ばたに、湿 に浮く落椿がひときわ婉です。こぶし、遅ざ に到着して、遠山家、 も神意の川柳塔日和。やがてバスは合掌集落 の桃源郷、若葉はやわらかく薫り、せせらぎ 雪が光る白山連峰を振りかえりながら今日 何を見ても掌を合わせたくなる いちいの木、杉の木、

ものです。 りますが、 ろくも少々。みんなの視線が鬼遊さんに集ま たでのティータイム、「鬼殺し」の銘のどぶ でしょうか。合掌造りを模した珈琲店の炉ば わが社の鬼は明るくてしたたかな

期のえにしを旅人の心の襞に。川はいつか長 ド、湖底には30余戸の民家をのみこんで寡默 の流れと時計とが別れを意識させて涙は流れ 良川へと変り、バスの中は郡上節の合唱。川 た樹齢40年の荘川桜が花を残してくれて、 に水をたたえます。みぼろ湖底から移植され 高さ31m堤長46mの御母衣ダムはエメラル



白川郷にて

らない別れかたで私達は降りたのです。 っぱなし、「さよなら」もまともに言えぬしま

旅行に参加した みんなの声

大変便利であった。次の機会にもよろしく。 火のように光っていたのでトイレに行くのに にした事は、川柳の絆と別に親しさを増すも にした。大小の違いはあるが鼾と寝息を一緒 のである。消燈した部屋に正坊さんの頭が蛍 郡上八幡と平瀬温泉の二泊を正坊さんと共 寝返って鼾が合った飛驒の宿

西尾美与子

の気持で若返らせて頂きました。 川柳ユーモア旅行のすばらしさ。五月晴れ

寺尾 俊平

ご厄介になりました。

郡上よし唄と踊りと水うまし 黒川

紫香

板尾 岳人

あのあたり蕨が出そう白川路

合掌の村に一竿鯉のぼり

郡上八幡新婚旅行で来ると決め 千代

御母衣ダム湖底のがれた姥桜

みんなが隠れたところを見せ合いました。 アーア、タノシクアリマシタ。

174 尾

楽しませて頂きありがとうございました。 新緑に酔いながら白川郷の合掌づくりで春を 紀州路では味われない長良川荘川の清流の 天気よし友よし飛驒路の春がよし

候で何より楽しい旅でした。旅館へ着くのを 三分?遅らせて済みませんでした。 浄めの雨から出発、三日間は素晴らしい天

すっかり身についた郡上節のリズムを首でと りながらバスの揺れも楽しい。 さしく笑いかける。ゆうべ平瀬温泉で復習し 川郷へ向うきょうのバス、窓から山の春がや しごかれた句(苦)大会から解放され、 林はつ絵

紀雄

翠柳吟社創立十周年記念句会に参加を兼ね

秋元 てる

野村

きみ

晴れおんなの千代女と踊る郡上節

踊りのレッスン郡上八幡の夜は楽しさバツ

グンでした。感謝

旅はよきかな合掌の里に群れ

内芝登志代

堀端 三男

驒に遊ぶ 大型連休のはしり四月末の三日間を利し奥飛

飛驒の雪五月の鯉に山桜

奥飛驒にどぶろくの友露天風呂 林

瑞枝

瞳の中にああ百幅の絵を刻む

萬 幸子

って帰りました。 山紫水明のよきながめと空気をたっぷり吸

岩本雀踊子

旅だった。 くの盛装で車内一ぱいの花盛り、ああ楽しい 見る様だ。バスの中に川柳塔の婦人作家の多 て民家に鯉のぼり、一月から五月迄を一度に こぶし、石楠花、梅、椿、あんずの花が咲い 楽しい旅だ。山には雪が残り道端には桜、

柿花紀美女

文化とは悲し村埋め御母衣ダム

樫谷 寿馬

合掌と御母衣のダムや雪と花

白川郷の花と一緒に咲きました。 小出

智子

とっても楽しかった。

らひたりました 白川郷平瀬温泉の露天風呂、 星を仰ぎなが 小谷 千年

羽原

ほんとうに楽しい旅でした。ありがとう。 合掌とプレハブ奇妙な対話する 合掌の里鈴なりの湯につかり

鬼遊

雑兵の首を湯舟に飛驒の宿 御母衣ダム桜樹二本に巡る春

白川の里残雪の山を負い

神谷凡九郎

を迎えてくれて笑いかけてくれる八重桜の顔 人間万歳としかいえない。 五月間近で鯉のぼりもあちこち、そこへ私達 山頂には雪が少しではあるが残ってるし、 柳縁のぬくい握手に八重桜

椎尾 公子

冷えた体をあたためて呉れた平瀬温泉は、

思い出に残り、大会の思い出になります。 稲葉 冬葉

うつり気な女を酔わす鬼ころし 奥田みつ子

けの別天地 に囲まれた露天風呂へ。はつ絵さんと二人だ 朝五時すぎ、雲ひとつない空と残雪の山々

西口いわゑ

合掌の里に日の丸よみがえる 白山にちらりのぞかれ露天風呂

静步

上原

逸

良い文化を守りたい。 ている。いつまでもたやさないように日本の 民家の里はあたたかい人情が昔のままで残っ 白山雪をながめて白川郷に。合掌づくりの こきりこの歌はささらでひょうしとる

小熊 江美

いて嬉しくて……。 初めての旅なのに栞先生に名をおぼえて頂

コーヒに旅を語って白川郷

きて幸いでした。 が、文字どおり家族のように和やかな旅がで 「川柳塔」という絆に結ばれた各地の柳友

田中

正坊

垂井千寿子

させて頂き嬉しゅうございました。 いご親切な方々にお世話になり、よい旅行を よい時候、いい天気、そして川柳塔の温か

平瀬ゆく雪に桜と鯉のぼり 吞城武庫坊

存城 年代

あたたかさを味わいつつ、大八先生、俊平先 生のご参加で一層素晴らしい旅になりました。 の花々はいっせいに咲き揃い、川柳塔一家の 雨に洗われた新緑はまぶしく映え、白川郷

(武庫坊·年代報

水 煙 前月号から 抄 句 艦

瑞 枝

出ています。 舟も、やがては大海へ出て、荒波に覆される 海に出るまでに笹舟救わねば でしょうとの思いやりが、牧歌的によく滲み うららかな春の陽射しを浴びて流れゆく笹

界が展開し、若さを試して見たくなったので のでしょう。そこには今迄に知らなかった世 弾んでいるのは垣根を越えてから んてん手毬」 垣根を越えてしまった手毬は、きっと「て の唄につられて屋根まで飛んだ 赤木

くのでしょう。美しい原田泰治の世界かも知 蝶になり、その何かを学んで大きく育ってゆ が映し出される。子供達は、そこで鳥になり 風の子よ童話が池に浮いてるぞ。さえきやえ 森の中を歩いていくと大きな池につきあた 池の表面には、いろいろな世の中のさま

頂上で海を見おろすにぎりめし 福田 峠の茶屋で下界を見おろしながらの親子の

> り、一刻の私の迷いや、イライラを、それは ず動き続けてくれた振り子は、家の歴史を語 は祖父の何よりの遺産。 誰よりもなだめ上手な古時計 洗われて、カワイイ栗鼠ちゃんが覗きます。 うて頂きに佇てば、何事も綺麗に見えて心も 対話が聞こえる。山のオゾンを胸いっぱい吸 こうよと、思い違いをなだめてくれる有難い 百年も経った大きな耳を持っている古時計 一世紀の間をたゆま

それは鏡に写っている作者自身の姿なのです。これほど怖いライバルが他にありましょうか。 それに気付いた作者の素晴らしい感性に拍手 ライバルの見事な鼻の見える位置 存在なのです。 真正面に位置するライバル。その見事な鼻 藤井高子

逃げもせず槍をくり出すかたつむり

たいものですね。 めらわず、臆せず、こういう生き方を私もし かたつむりは、作者自身の姿なのです。 玲子

せて欲しいものですね。 つかは溜めていたものを吐いて、すっきりさ 本音などしゃべってみたい二枚貝 肝心な時になると塞いでしまう二枚貝。い 「一度だけ鳴いた小鳥の黙秘権」は私の句 山田妙子

出来ないのが当節で…… その通り、その通り。 なかなかその通りに 仲きく子

大切なものに気付いた優しさが嬉しい。

いたわりの言葉にお金かからない

さからと言うべきか、その逆もありそうです が、可笑しいかしら。 ね。私も夫を最大の味方と思っているのです 妻だけが味方と決めている夫 あなたの背の君の育ちの良さからか、 松川

車間距離守ればすぐに割り込まれ 安田志津 運んで来てくれ、青春の歌が聞こえる。 人生の向う岸からきた燕 それも生存競争か、同感ですが、それでも 春になると翔んでくる燕は、夢をいっぱい 蛍

友達が時々温い釘を打つ はうまく嚙み合わないのです。 ルールを守って走らなければ、 前の句と対照的で、良いお友達に恵まれて 世の中の歯車

横糸がなじまぬままに陽が落ちる とてもお倖せそう。

横糸がなじまなかったら、ぎくしゃくして 淡路ゆり子

マジシャンもやっぱり悪い金まわり とても暮して行けませんですね。

他所行きの顔になり貫禄が出来ますね。 懐具合。生きることは、やっぱり大変らしい。 出を見せるマジシャンも、本当は私共と同じ ネクタイを外すと父の顔になる 男が背広を着てネクタイを締めると、 帽子から、たなごころ、空間から見事な演 田中

おかしくもないに笑うも武器であり 自己主張だけで生きられないのが浮世なら

帆雀

追従笑いもうまくなろうと言うもの……。

結

3

無赤入手ネネ点親結ア過春小帯島結同胎契帯試蝶 とびファの指をとば意動約結験結 結ゆべ結るに母結直夫が び結べない。 1 け世 ぶて 慎み深くなえ (資業など要らぬ 工な そうの 政治 化してなる日 遺愛 足 に愛 が日が産が年 がの 荷実へ遠 手道園 分結中 をが児 を結 くけば火 20 るの飾結ぶなのれの 怠 結 跡期ぶき 輪ぬ女 3 ぶ夢る席 カ耕か右悟重悠玉克素身が大されて、花み近郎人泉恵枝郎 代砥明麻晴静仕 男代水黄彦歩 江芳子 帯帯結十赤千い

し一ば字い秋

質りない。

を る

世賜

1+

174 3:

る股口

字に結

,まだひ

とり

んる

んと結べ

る桐

4

7

河瀬芳子

出

顔となり

++

7

ぬ言

娘わて かけれて世の

> いる 結

覚

然坊

て倫夢

出れみ

3

れ出夜の葉れ とおどさり るお人柄 るすがら た結待若 道文一圭彩周洛枯輝悦高寿正静公喜 子止介女二酔梢月子子美坊子一酔

廃

絶

1

結

ば

12

3

は

す

地

球

A

水

51

3

7

<

結

di

鶴

Ł

亀

め天

結結带母結 緑 びば結のび 結 れぶな目 目 を 1, E 3 確まだ男母佳 かでけ結の が合うて老いては仲人嘘げの 男も 先結びの子のゆ 戸 う 老い二・世界が出 離 婚 辛 は兼大テ じめ郎柏ル Ŧ. 秀 噴炭温原旅湯湯煙煙盗裾山滝町煙山噴年

クタタ

んでほ 0-

0

か しおが

h

君た

す独だ

里米山はる 風朝久子

イイ点

妻やさし 朝

んで妻

なる

40

1+ 倦 終と

妻と

H

5 謎 から 解

1+ IF.

触

rhi

5

線

煙を泉発人煙煙害幕塁野焼壺内害火煙金 のを事がが の焼のへのににををの焼き を 亡張逆 なく街煙目首孫 の見 くの埋 一言と にだ抱 っ転 湯たはけた徳 煙煙 め て勝 居庁変 も若つ 煙い絵浮な陵抜ち 島過 士まわ 絵疎に顔にいがでけの混草く 7 でり ら喋道砂じ山し煙 申あ にの詩となた わろ考けるをた な風が甘る国ら が ら物生い桜訛べうえむ春這水ら上出 ず詩れ顔島り唄かるり霞い煙 青秀悠かさと砥弧耕寿カ久天 七弘や規不明子泉み美代舟花美工於彦山朗お風

路

飴

尾

良

人

0

ポ

な金煮

6

買

5

1:

飴

7

い蟻

鍵

0

子

E

す

なり

規不風

3

んね 土一分ん 産つを の歩ひ 1) の飴でラジコンせしめられりの飴でラジコンせしめられりの飴によき日の味があるりの給によき日の味があるひかえた飴が売れてますな り 揺れてく 肩 車に 祭り揺れてく 肩車に 祭り揺れてく 肩車に 祭り揺れてく 子祭 飴の手が無理 言うて 千 愛 よ 雅 輝 大 克 志子 村 月 柏 枝 入飴ポ禁飴飴年飴飴入老口ひ飴駄 代程 な | 煙 を守るデスクに飴の缶 女程度上積みをしてストを避け 素めて人の心は計れまし めズを てしまえばといるまでのなどである。 は 知 b 如 好 小苦 意 言繰り 0 孫 返歳の す 軒なはしめ 素身郎 花

ねお飴糖ど飴綿善

T 年 0 伝 統 油 煙 0 奈 良 0)

墨

勝 美

-

がっても折っても折っても七

りまだ続き

芳文サ右佳ひ妻高正はる 子平コ近雲で子明坊子

湯香香ひ落火雨伊う地湯逃

落 旅

武旅 地下

者情

の深

花る クの

ま

草

だけ

老父となる

里

きがる湯

3 煙

 ∇

たえる

パニッ

煙攻

S 60

なし津久 なんたく

煙廃煙煙ひ

け離さず小さいま 処に 真実 ひる 大煙 突に 目集 ひるの煙の中に思

たひそ

が

冴

ż

玉歲

た咥孫も蘇えが孫

大きく

1) T.

まし Ŧ

to 佁

飴めを飴

が大

並 樹

1 0)

の陰に居の陰に居

け所る

坑た幕と

のつの筋

処向の

か思

も慕

*

ん知

たぬ

0 れお

大義春枯克

柏美日梢枝

2

飴

E

7

歳砕

ま

F

0

練

あ

わてな

女神

見 訓

えた

ルシル

17

+

葉葬煙

0 異色

0)

煙

向

尚 男

に焚筋焚場るの

煙 煙

を

秋

0)

え清のとあ散の

B 1)

高

101

慕

筆春歌

硝

がの情挽

を ح

0)

言

小写

るめ

みどり

桜

辿

n

ば

梅

咲

現

煙 から 消 ゆるこ 天 なき ilE? 111 界 地 īE.

坊

飴嘗代多口歳な

組が折に入れ

箱

ま っべ

め 紙

里が春納

っても笑う飴 一る京の飴 値踏みする る祭り笛 サ

に故いたけ

里五

あを

生 き 7 る 煙 噴

玉歯人答と買 場 菓 島 検 のにの ż 刻 つする 証 の転は口 屋 を た 0 余 鮎に願いる方 飴 虚く 飴 娘 て を見 0) すぶ 頰 は計れまとは知られたがこめてもとは知られて 昔付 6 すの 3 け 船 中に立 即が禁 まぬあた物ぼあ るちでこ 3 車居 展 粘 本 鵜 宵 圭 静 倫 梢 棒 汀 明 介 歩 子 灣芳子 飴金綿飴干お飴干飴飴干可鬼

細

I.

の手

63

る懐

手

どんたく

雄

練抜

1+

せる

ラ哀タイしバ 茜耐 しバ 雲 ż バルをや ポる .7 0) 解め ٤ 4 飴 いた飴 教えている。 7 はで < 女 マ母は 出れの マの ぬ輪 来 を飴 五に ŧ 待のい 色 つ数ぞ 船 1) 道砥寿秋可

子代美峰住

な D る 飴 飴は 0 都 合で風を変えようか 溶けにく 40 三五島 京 子

飴 女 0 F ラ 7 0 幕 かい 開

<

久留美

Ŧ.

歳

L だけ母 1 近 ね 1)

飴

す

75

和步数室

題 TES.

211 的

れます。 て損をしている句が相当にあったように思わ は少々ばかりずれがあり、作者の気持が弱く 出したものであり、皆さんが作句された時と なって読者に与える感銘もそれだけ割引され 課題 「雨」は六月号に発表されるために、

帰る姿が目につくのですねえ。 は園児や一年生達がカラフルな傘を連らねて 」と言えば皆さんも一番に目につくの

かったのですが、次の一句でご勘弁を 雨傘で水を掬うて通学路 雨傘が躍る園児の朝の列 カラフルに雨傘園児今帰る 新しい傘さしたくて雨を待つ 雨靴を買ってなかなか雨降らず 雨靴に幼ない夢を持ち帰る 年生雨が嬉しいニュールック 句句、 句の心を追うて添削もしてみた やすお 男

雨降りも楽し園児の傘の列

句意はころっと変ってしまうのですが…。

春雨の詩情に遠い老いた背

男

久

嵐呼ぶ雨の言い分聞き洩らし

雨の音にもいろいろあるのですねえ。そこ トタン屋根雨音リズムくるい出し 雨だれにショパンはうまく節をつけ 雨洩りのリズムをかえた雨の脚 雨音を二倍楽しむトタン屋根 春雨が伴奏している立話 次に多かったのは雨の音の句でした。 兼治郎 武庫坊

甦らせてくれるものですねえ。 墓参り亡き人偲ぶ通り雨 雨はまた、今はなき人や、思い出の数々を 「雨音急にジャズに変ったトタン屋 墓参り時雨は亡母の涙雨 土砂降りに亡夫見送りし日を想う 七色の虹を渡って逝った子よ 高 子明

祝いの会が催される。

あか書で雨天のことを書き添える 道灌の目に山吹は雨に濡れ 雨合羽太田道灌身を悟り 私の句の方がちと弱かったかな。 雨天なら変える文句に朱を入れる サチコ 宏 安

ら下五 ねえ……どうでしょう。 おあついことで、お惚け有難う。 きっかけは雨降りだった妻が好き山 人を恋う女へ雨は降りやまず 降りしきる雨に別れた人想う 「妻が好き」を「今の妻」としますが だが私な

111 柳塔社常任理事会(5月1日)

宏子·萬的·文秋·鬼遊·凡九郎·天笑 生・智子・岳人・史好 出席者―栞・薫風・形水・太茂津・紫香 へ・笛 柳

議事並に報告事項

された、との報告あり、 より報告あり。 ▽生々庵名誉会長の新居を訪問された栞主幹 治に尽した功績により藍綬褒賞受賞の栄に浴 ▽藤井明朗氏(島根県)が春の叙勲で地方自 小石ご夫妻ともお元気とのこと。 眺望絶佳のお住いで、生々庵・ 地元では5月12日

集発刊記念句会が開かれ、本社から栞主幹が ▽10月13日唐津支部三周年並に田口虹汀氏句 ▽久家代仕男氏(平田市)の理事推薦を了承 盛り上げることとする。

6月の常任理事会は1日(土)

子

(嵐呼ぶ雨音言い訳聞き洩らし)としたら、 公乃 7 古傷がうずき出します菜種つゆ 古傷がうずき出した雨つづく 雨に濡れすぐに風邪ひく孫おもう) 駅の灯にポツンと次男の迎え傘 お医者さんらしい句ですが私なら 迎え傘冷たい雨も温くなる 春雨に詩情に遠く濡れて行く 春雨に濡れて風邪ひく現代子 秀

川柳塔柳箋	理て吉 をのがれ 見恵る子 れ好 ヨ	(雨降りをいい事にして朝寝する) (雨降りをいい事にして朝寝する) (雨降りをいい事にして朝寝する) もな句を並べさせて貰い、その責任をのがれきな句を並べさせて貰い、その責任をのがれきせて頂くことにします。 をえた日の軽いほてりに傘たたむ て る 達えた日の軽いほでりに傘たたむ て る ネオン街ヤボな男の通り雨 理 恵	寿 爱 久 柳	(
宛先 〒598 阿 萬	日 てい 章	同条ってやしたより (東立つ子の後姿へ春の雨) (巣立つ子の後姿へ春の雨) (巣立つ子の背しか細い春の雨)	て い 子 子	(色を増すあやめに小雨降り注ぐ) (沈黙の人が欲しい春の雨) (沈黙の人なつかしい春の雨)
「月」 7月10日締切 (9月号発表題「海」 6月10日締切 (8月号発表のがきに5句以内のがきに5句以内のです。	サークの一切の一切の一切の一切の一切の一切の一切の一切の一切の一切の一切の一切の一切の	(降り込むも吉日だという祝い客) (定年後 晴耕雨読とはゆかず) 通り雨桜見の宴を散らし行く 通り雨がサッと散した花見客)	愛 あや 仁子 子	梅雨空がとても好きそう花菖蒲(小糠雨紫陽花の咲く寺の道)(小糠雨紫陽花の咲く寺の道)黄砂雨大陸の過去想い出す)
逢えた日の傘の雫はまろく切る 南の日の献立夫と気が揃う 雨の日の献立夫と気が揃う	豊かれの表治郎	降り込むも良い吉日だ祝い客 豊 (蕗の薹をそっと育てる春の雨) (てるてる坊主二度目の分は吊り足され)のである坊主遠足二度目吊り足され)のである。	里 孤 升	子)の豪
菜種梅雨お風呂帰りの足袋濡れて 節 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	孤 寿美子	(蕗味噌の香りも里の雨の朝) 雨の朝蕗味噌の香へ酎とろり 雨空に負けずまっすぐ杉木立) (長い雨古い玩具にある記憶)	あ ち 克 や 子 よ 子	2
野仏が鼻水垂らす小糠雨 章 久雨上り待ちかねてする庭仕事 千代女	豊 太	雨降りに古い玩具を可愛いがり(肩寄せて雨を見ている雀の子)	秀子	(無情とは雨に散りゆく花に似て)花に雨人生無情つきまとい

柳 展

集録·板尾岳人

題と選者 所·新潟厚生年金会館 日 · 7月14日 (日) ★第63回柳都川柳大会 26川柳研究社大会係 10 時

定金冬二 井見也子·骨=海地大破 悪=久保田寿界・似る= 笛―石森騎久夫・消える―

人間 ―佐藤岳俊・ブランフ 田口麦彦・蓋=石森騎久夫 ひとつ=寺尾俊平・挑む= 実· 雑詠 河口

所・まびき会館 日・6月23日 (日) 10時 ★川柳展望10周年大会 (岡 四山市

★新京都社創立七周年記念 学·井戸 = 石森騎久夫·歩 兄=水粉千翁・船 題と選者 -金築雨

く = 保木寿・白 = 細川不凍

う=神谷三八朗・雑詠=岡 田尚美・芸―荒木秋栄・揃 家―辻嬉久子・作る―須 ★紅川 日・6月16日 司·光=時実新子 马 橘高薫風・牛= 柳会創立30周年記念 (日)13時 黒田高

題と選者

(出席者

各2句

題と選者 誌上川柳大会

所·東京千代田区東条会館

日 · 7月21日

(H

正午

講演—大野風柳 弘·大野風柳

柳研究社創立55周年記

郎・雑詠は同一作品を三選 崎徹平·児玉怡子·墨作二 題と選者 所・カンポ Ī ル京都

新京都 姉小路通柳馬場西入・川柳 投句先:一時京都市中京区 締切り7月10日・発表9月 者が共選 野可川人 紅=戸井田慶太・宣伝 山晴生・集う―本庄東兵 母=森田可南女・都会

先輩—越鄉默朗·流行—佐

藤良子・賢い=松井清志・

題と選者

(投句者)

各3句

正敏選

柔かい

野村

圭佑選

角

礒野いさむ 選

茶六選 蓮夫選

集まる

橘高 尾藤

薫風選

快

三柳選

土居哲秋・危ない=斉 時半 平和 日焼け へそくりを妻の手柄にして ★59年度周魚賞受賞作品 ▽お便り△ した顔 できれいな金 小川日 五郎 出丸

投句先一88府中市新町2

橋

り5月31日

· 賞合点30位迄

題と選者

十貫·投句料

千円

締切

美作教育会館

松本佐知子·記念=小田二

日・6月2日 ★第7回津山川柳大会

(日)

10

西郷かの女・午後=

第 九 П 全 H 本 JII 柳大会

れ=中川一・昼=八木千代

藤正

一・久二

西条真紀・

日時 奈良市三条大路一丁目五一三七 奈良市史跡文化センター 昭和60年6月9日 (H 午前10時開場

下車西へ3分 近鉄奈良駅前より奈良交通バス「市役所 電話(〇七四二)三四一九〇二二

宿題 胀 進 第一部 (事前投句・ 3 関 締切りました 選

宿題 数 第 当日 出句 片岡 締切12時) つとむ

部 隠 山尾 定 在 金 冬二 智子 風 選 選選

各部各題とも二句。 二千円(昼食·記念品代共 文部大臣奨励賞 未発表作品に限

会費

本 JII 柳 協 会

川柳大賞・大会賞

史を持つ。 号は52年、 もって40号に到達した。 正13年の発足で満64年の歴 ★川柳ひろしまが5月号を これを記念して 200号は43年、 300 幼稚園視察と続き何かと多 式と続き、 を発刊した。 合同句集 ■3月は卒園式4月は入園 Ш 3月末タイ国の 柳ひろしま」 石原 伯峯

忙

羽原

静歩

頂く子定です。

藤井明朗

日·6月10日 (月) M1時

お春よと呼びたくなります ん。庭の一隅に桜が二本お なった私にはピンと来ませ ■花見の便りに酒がダメに 第26回赤旗まつりが堺市の 感動その場で作品に

尼 緑之助 俳句と川柳が新たに加わり 大泉緑地で開催され、 塩満敏氏が選者として参加

■一筋人生。

晴れやか春の

30日宮中参内陛下のお言葉 ■ 5月29日上京、 て誠実な人。はみんなの評 の弁も控えめ "おとなしく 中国新聞一島根版より 総務庁へ

生来の温厚な性格から受音 なんかがおこがましくて」 が藍綬褒章を受章され「私 褒章に木次の藤井明朗さん

を拝してたばこ・お菓子を

.

西宮北口川柳会

グラマー

新

同

人

紹

介

短歌 兼題 西宮中央公民館

兼題=杖・強い・ポスト 所·豊中市立中央公民館 日 · 6月17日 (月) 13時半

南大阪川柳会

兼題 所・寺田町・高松会館 日・6月19日(水)夕6時 ||学友・疑問・現実・

日・6月20日(木)夕6時 ■南海電鉄川柳例会

兼題=日永・滝・のろのろ 所·八尾神社内西鄉会館 日 · 6月10日 (月) 夕 6時

.

菜の花句会 V

句会案内△

兼題—往復・請求書・市 本社地下食堂

■富柳会

所·富田林市中央公民館 . 兼題—影·午後·立話 日・6月20日 (木) 東大阪川柳同好会 PM 13 時

上

原

薫風・鬼遊・紫香推薦

兼題 所・東大阪社会教育センタ 日・6月22日(土)夕6時 買う・交際・熱中 ·2F布施駅北へ5分 口車

柳宏子・小路・智子・柳伸推薦

松

星

柳! 右

子

||帽子・スリム・自由

■もくせい川柳会

自由吟

所·南海会館内南海電鉄㈱ ぐずつく

席

題

〈川柳列車日程

場

9時26分 鳥取発 10時23分 若桜着~~~ (バス) 氷ノ山 11時 着 わらび狩 一部披講 (量食)

(バス) 若桜発 17時19分 車中川柳大会 18時24分

■
動つなぎ川柳会

所·寺田町·高松会館 日・6月24日 (月) 夕6時

兼題―印鑑・呼ぶ・資料

111 柳で乗って残そう若桜 《氷ノ山わらび狩り川柳列車 線

行 受 日 付時 鳥取駅コンコースで8時30分より 昭和60年6月2日

参加費 大人二、五〇〇円 若桜町氷ノ山 往復汽車賃、昼食、 小人一、五〇〇円 賞品、発表誌等含む

*山歩きの出来る服装、 雨具持参のこと

題

「レール」 渡辺 小林由多香選

森山 門脇かずお選 盛桜選 独步選

守

3

底

当日一題、 各題2句 発車と同時に発表

16時30分 氷ノ山発 鳥取着(解散

本 五 月 句 会

五月七日(火)午後六時 ンター ズ ファッショ M F C

> 子・柳伸・美房・亜成・薫風 子・岳人・楓楽・天笑・頂留子・洋子・雀踊 与呂志・幸生・小路・節子・智子・久子・寿

> > 資

兵庫県在住者または在勤者

紀 市 郁 栄

幸せな紐と易者が予言する 靴紐を結んで留守の注意する トレードになった私のループタイ 温かい空気が洩れる母の紐 巾着の紐をゆるめに孫が来る 夫婦結ぶ紐はゆとりを持たせとく 不器用な父にさからう紐である 紐解いて雅びな世界に棲んでみる くみ紐の配色を選る伊賀 小包に使える紐は溜めておく 実録を多彩な紐で編んで置く 腰紐を解く指先に軽い罪 組紐に彩鮮やかな春を出 規不風

英壬子・白兎・みつる・月子・美代子・泰子 都路・山久・萬的・すえお・三十四・可住・ 好・正坊・いわゑ・みつ子・文秋・蕉露・古 渓子・柳宏子・喜風・形水・一郎・寿美 大・史

昭和

60年度兵庫県芸術文化

県民川柳大会作品募集

選

規不風 かすみ 柳宏子 男

番号明記

締切・6月20日

(当日

消印

住所・氏名・年齢・職業・電話

ハガキ使用(無料)作品の左に

(未発表句) 1人1句

雑詠応募のみ)

規作

品 定

選

北浦牧郎・小松原爽介・助川助 大森一甲·奥西弘昌·柏木三明 晴美·植村客遊子·大伴破智郎 去来川巨城・伊佐次無成・卜部 死先 −650 兵庫県文化協会内 県民川柳大会」宛 神戸市中央区下山手通4-16

和田光代(50音順 真殿舎句里・光森良・山本哲

日 会 会 場 時

金太・寿美子・冬葉・春蘭・柳影・章久・白 隆二・水客・射月芳・英子・晴風・あいき・ 紫香·悦郎·狸村·勝美·凡九郎·規不風· 男・太茂津・敏・栞・武庫坊・年代・重人・

あやとりの紐から生れた童唄 小包の紐がゆるんだまま届き 出席者―笛生・郁栄・紀雄・鬼遊・幸・三

凧あがるその素直さの紐になる

目に見えぬ紐であやつる妻と居る

みつる

〈発表大会〉

郎

アランポーまだらの紐が人を恋う 和服着て紐に心を縛られる

七色の紐で大厄くぐり抜け

制限なし(他応県からの参加も可 津名町中央公民館 昭和60年8月18日(日

)12時開会

「ユーモアの源泉を探る」

六・常岡孝風・時実新子・西村 道也・橋本衛門七・藤本静港子

山へと移っていった。

月間賞は西山幸さんが獲得された。

S

一射月芳・亜成・山久

受付一冬葉・年代

る、ということになる。そして話題はやはり 自分さえよければという考え方は間違ってい をなぜ起こしてやらないのか、亀は卑怯だ、 亀」の教訓も、今の考え方は、眠っている兎 前置きし、まず日本語の理解のむずかしさに

今月のおはなしは初登場の板尾岳人氏。ご

山男だが、きょうは山の話はしないと

ついて身近かな例をあげ、

ついで童話「兎と

温もりがちょっぴり欲しい紐ゆる 紐いっぽん女の掟くずさな 母の紐つっぱしる子をたぐり 不覚にもパンツの紐が切れ 父の結んだ紐がなかなかほどけない 々々で出来上り から吊った定期 ました 寄 め 寿い 節 1 雀 わる 踊子 路 里 厚いべ ~ かのベー のベー かのべ ルをはがすと影武者二人いる ールを買うているのは鬼夫婦 かず 1 1 ルをかける名議長 ルかぶせて花活ける ルはしあわせ満ちてい ルにも似てかすみ草 1 11

花嫁の紐

靴の紐あしたは替えようかと思う 嫁にやる紐をしっかり縫いためる 言うだけは言うとく紐をつけてある ゴム紐がいつも私を引き戻す 腰紐がいつも弱気なことを言う 白智 太茂津 泰 月

泳がせる紐の長さは決めてある 腰紐をゆたかにしめて慈母たらん 紅白の紐なら足音軽くなる きれいな顔してる紐かも知れないぞ 可 住

> 剝がれないベールの中にある政治 北の島ベール戦後はまだ続く 頂点で孤独を隠すベールもち ベールからそれてA子は村八分 国宝のベール正倉院展ひらく グリコ犯ベールはがせぬもどか

与呂志

美

房郎

妻が紐伸ばしてくれる愛だろう 雀踊子

席題 ベール 山本 規不風 選

絞首刑の紐が夕陽に動かない

人妻でうす紫のベール着る

īE かくされ 夢も 害児かかえた母 た生活 追加 高 通 知 県 か 眉を描 朝 0 の床 手を握 き加 幸 i) 之 泉

沈黙のベールを脱ぐと銃がある

ルきた自画像妻子には見せ

生い立ちはベールで包む立志伝 平和へのベールをはがす手をつなぎ

愛する人へおんな素直にベール脱ぐ 一、三枚ベールをかぶり生きてゆ

勝寿楓

ミサイ

ルにべ

何

遍〈一

ルの下で弄んでる核ボタン ル脱げぬまま朽ちて尚名を残

規不風

楽

幸年美代子 豪邸のベールをあばく大法廷 ベール脱ぐ時に女の嘘のぞく

ールが欲しくなる

乳房まだ涸れずべ

ールはかけるまど

ルは剝がされ

2

智 萬

子的

七難を隠す

運命線ベールの中に隠される 好きだからベール死ぬまでかけたまま ワインカラー マスコミに人脈ベール剝がされる ール着た噂にすこしだまされる 1 のベー ルの花が朱に染まる ルで覗いてみたくなる 楓い久山 東ゑ子久 白 狸

本当の事はベールの中にある

みつ子

射月芳 美しい人のベー シルクロードのベールにいどむ学者の

宿 題

魚橋

庄司

淡泉選 新吾選

寿界選

みつるいわゑ

生む 人形

> 黒川 平山 久保

紫香選 繁夫選

五百円(作品集呈 各題2句 締切12時 室田 千尋選

しさ

みつる

会

笛

4

正庫坊

雀踊子 智

協賛 主催 兵庫県· 番傘川柳社 兵 庫県川柳協会 財兵庫県文化協 .

一隆柳

二伸

川柳天守閣 ふあうすと川 ・時の川 柳社 川柳塔 柳 社 社

病状のべ 正体をベ 他人は皆ベールのお蔭という美人 ゆれ動く心のベールの愛模索 おぼろ夜のベールがさせたはかりごと ĺ ルに企み秘めてある ルにつつむペンネー 太 茂 津 郎 代 坊

ぬいでもアンタ素顔のないおひと ルを被せた平和論

凡九郎

西 Ш

幸

選

いたずらな神で三人目も女 生真面目に貧乏神と同居する 柏手の無心に神をうたがわぬ も当って欲しい宝くじ 太茂津 代子 男

公然と神を欺く誓詞読み

さい銭を見て神様が動きだし 神の眼の届かぬとこで昼寝する 神棚に煤けた神が住んではる 春の女神はキリキリカリカリせぬことだ 神が泣けばいても立ってもいられない つごうよい話へ神様そっぱ向 へ絵馬が取次ぐのを忘れ 柳宏子久る 智 笛

神様に軽いジョークでちかづこう 神様がいない電化の台所 淋しがりやの神さまがいて困る

鬼

п

郁

栄 遊

満点の神は宙返りがお好き 万円札の賽銭神様聞えたか

神様も見落す事がたんとある

与呂志

時々は番くるわせもする神さん 神の意のままにブランコ揺れている お田植神事にっぽんの雨が降る 神さんを最後の盾に残しとく 神様も夜遊びに来る春のよい 神様もきっとあしたはわからな 表神様だけが御存知で 10 節水英 美代子 みつる Ĥ

みどり児の眼に神さまは逆らわず

秀才の知恵先走り雨に遭う

神さまが百度数える百度石

神様が行方不明で長い夜 善人を見て神様の自己嫌悪

神さまの見える暗さになって来る

神様にいちばん近い赤ン坊

神様がいつも味方でない不安 神さまの目をつむらせている浮気 神さまの恋は静かな森がよい 神が振るサイコロ透明で困る 人間を創った神のザンゲ録

神様にこれは内緒にしておこう

知恵

海 幸 生

選

悪知恵にまんまとかかる欲の皮 知恵のない話性善疑わず 知恵袋とまらぬほどに知恵が出る

一生駄

月へ行く知恵を休める縄のれん 知恵つけた男に或る日背かれる 電話口横に入れ知恵らしい声 里帰り入知恵だけをもろてくる 横丁の隠居の知恵を借ろうかな 蝶を呼ぶ知恵なら花ももっている 悪知恵を借りてるらしい電話口 悪知恵をときどき使って生きてます 風が吹く迄ぶら下る蜘蛛の知恵 三男 雀耕幸弘 踊子花一生

丰 闡 露

番の知恵者で幸せそうにない

様もおカネが好きとおっしゃった める 規不風 好

知恵の輪

がゆっくり解ける闇

0 底

方から神が見ているので止 の低いのは女神の

水鬼白柳 兎 影

ところどころ繕う母の知恵袋

生きるため中間色を選ぶ知恵 潮どきへ浮んだ知恵を折りたたむ

英蕉寿

せっかくの借りたい知恵が寝てしま

本当の味方と妻の知恵を借り

柳宏子

兎客遊

Ĥ

天鬼

凡九郎

母さんを騙す知恵だけよく回 嫁さんの知恵お姑さんお姑さん 知恵余り文珠に使い方を聞く

逃げ道をいつも作っている知恵者 知恵の無い男が知ってる黙秘権 知恵つけに来たなとコーヒーいれている

与呂志

知恵借りに行ってミイラになって去に そこで知恵そこが世間よ世渡りよ ない袖を振ってくれるも母の知恵

枝になる芸は見事な虫の知恵

割勘の知恵で牽制ばかりする 受け売りの知恵をひめくりからもらう 脱税の知恵も儲ける知恵もない 尻尾切るとかげの知恵を笑えない 痛いとこじんわりつつく妻の知恵

鬼美柳晴

伸 風

兎遊房

考えた挙句アホーになってお 知恵のない猿で柿の種を喰う 裏道にそれたばかりに知能犯 れ者の意外にかるい知恵袋

入れ知恵で良し永生きしてと孫

あいき

旗を振っておくのも知恵だろう あいき

82

月寿 凡九郎

乗り換えの切符を贈るある野心 贈る 児島 与呂志

頼みごとこめて無理した贈り物 み滋綾弘子雀珠生 一峰

贈るより贈られる方が気を使う 開けるなと言えば開けたい玉手箱 贈られた四ッ葉に虫もついてくる 嫁ぐ日の無言の愛を娘に贈る

港の灯旅の人情贈られる 青白いあなたに贈る万歩計

所帯を考えて消耗品を贈る 結婚に贈る言葉を考える 父として贈る言葉は選っている

文 笛

男

何げなく贈った言葉が発火点 好きな先生だからプレゼントはしない

贈る言葉を胸にたたんで席につく こっそりと贈れば礼状見つけられ 贈られて贈って義理の続く仲 記念日を知っててくれた贈り 新婚へ贈る言葉に少し妬け 考古学古代の言葉贈られる 物

嫁ぐ娘に贈る言葉を選っている 贈り物少女のようにいただきぬ 嫁ぐ娘に贈る言葉がみつからぬ 花束贈呈処女とはかぎらない 妻に贈る一つの言葉あたためる あの人は飲みはるという贈りもの 先様の心を汲んだ贈りもの 義理一つ贈って風の町へ出る

トゲのある花かも知れぬ贈物

文 重 隆 秋 人 二 三美年十四房代 美年久 子秋人

太

まっ白な画布をはたちの子に 贈られたことばを入れる朱の 二十年妻に贈ったことがない 贈りものしてから変る風の向き 値打ち知る人へは小さな品をより 心で贈る父の日母の 贈る 小筥

頂留子

楽

金

贈る日のチャンスなかなか摑めない スペアキー贈って激しい愛を射る

久寿 みつ子

柳宏子

7

浅はかな欲つめてある贈り物 物置きの荷物になった贈り物 贈りもの受ける女の指になり お返えしの心配ふえる贈り物 贈られる立場で贈るものを決め

モーニング贈る言葉をふと忘れ

郁水栄客

武庫坊

与呂志

雀珠

見本だけ持って峠をひとつ越え コンパクト阿呆の見本をなぐさめる 親馬鹿の見本の様な顔をする

撒きえさの様に見本を配られる

黒

JII 紫 香

選

一秋堕幸晴 峰 駄 一彦

晴

ウインドでマネキン見本の柄を着る ジーオーダー見本の服がすぐ欲しい 英壬子 太茂津

新薬の見本で効いたことがない

成人に母が選んだ色見本

阿呆の見本私は真直ぐ突っ走る

見本より実物良かったいいお店 ブラウン管見本どおりの恋を追う 早世の妻の見本は何処もない 教科書の見本のような妻と居る 本物はもっと美人というさそい 墓石をデンと石屋は建てて呼び 見本より実物の良い時稀にあり

郎

三十年先の見本を母にみる 見本より光って見える子の帽子 色眼鏡掛けて眺める見本品 見本では切れ味良かった筈の鋸

お見合へ老いた見本の母と来る 見本とはどこかが違う皿の中 セールスが見本を無理に置いて去に

> 白渓子 美代子 みつ子

太郎遊

買うつもりないのに見本とりよせる 見本には肉も玉子も入ってた 見本市利益は地元へゆく仕組み

見本よりましな女が酌をする お薬の見本どれが効いたやら 夫唱婦随の見本に月がまろく出る

注文が届いて腹の立つ見本

姉さんが見本にされて嫁き遅れ 見本だけ置いときますと今日は去に ほしそうな顔で見本に立ちどまる 見本市手近な物から売れている 花見本一つもらった花の種

> 雀踊子 寿美子

いわる

見本とは同じ模様が見付からず 見本通り作るとコスト跳ね上り 化粧品の見本旅行にとっておく 無為徒食の見本に河童の泡が浮く 街頭でくれる見本はたかが知れ マネキンが着ればセンスのある見本 白渓子 英壬子

清記·泰子)

83

雀踊子

天

三十四

武庫坊 みつ子



作品は雅号も含めて20字まで。 締切毎月末。 必ず原 稿 用紙使用のこと。

整理·板尾岳人

聴障川

家の内互いにほめ合い平和です ほどほどに褒めてくれればよいものを ほめられて少し自信がついて来る 褒めるより叱ってくれる父が好き ばばは嫁ほめず嫁またばばほめず 老妻は他家の嫁さんばかり褒め たかお 行承和

静いも何時しかとれて七十路坂 スナックのマイクへ女蘇る ジャズ体操やっぱり年齢を考える 宿のユタンポにぬくもる母の味 偏食の子に飽食の世が憎い うぬぼれはほどほどが良い水鏡 ジェスチャーへ孫の個性が面白い 悠々と老いを楽しむ夢外れ 医療費の一 豊作の香りが米の地位を下げ 流行を追わずモンペで野良に生き 女一人重荷に耐える化粧する へ母娘で満ちた日となりぬ

霜の畑打つ老農を陽が愛す 石見川柳会

> 田秀 幸一報

子

あげた手を意地が素直におろさせぬ 愛だいて静かにうねる母の海 自画 知っていてなにも言わない目に怯え 灯を消して女は愛の笛を吹く 暗算で出来ぬ単位の汚職沙汰 肉親の母に会えよと親離す カラオケの軍歌に痛い過去がある ロボットにいつか主役を奪われる 逆波へ男の意地の櫓がきしむ 像の暗さが語る愛の飢え

孝太郎

昇進へ

病名に老人性がつくショック 戸籍謄本ショックその儘伏せてある

智

空襲のショックだんだんぼけてくる

僕でなかった日のショッ

青秋智

湖峰

久

恵道

度胸満点あらし突ききる紀の国屋

気のつかぬお人だ孫を未だ褒めぬ

供には子供同士の義理

上があり

潮時を心得ている父の意地

植村客遊子報

柳化粧櫓

ほめられて女余白のない日記 半分はお世辞と聞いてるほめ言葉 褒めるでもくさすでもない批評点 ほめられて目の細くなるあどけなさ マナ板がほめているらし歌料理

豊 鼓 文 み 一 作 草 古 る 晄

八惠子

貧亡にゆとりもあって茶を替える 調子はずれの唄喜びがかくせない テレビでも見ようか無職もてあ 出稼ぎのわびしさ癒やす独り酒 寡婦と居て他人は友と見てくれず

カラオケが嫌い音痴の独り酒

の日も主役は父で恙なし

ます

石月香詩鷹

腹心にまかせ主役の席を立つ

これからが辛い

中国孤児帰る

遮断機が降りたまんまで孤児帰る

み 永 悲 互 秋 ね 子 楽 子 伸 信 輝 今ここで言えば仏に傷がつく 言いつける母のない子の夕まぐ 暗算で金と情が割り 暗算で人の心は計ら

切れれぬ

飢え知らぬ子の贅沢がふと曇る 難民の眼に飽食を裁かれる 川柳しんぐう

ありだたさだけは科学も 科学科学でおとぎ話も消えそうな アフリカを救う手だてが無い科学 川上

満点を信じ切ってるペンを置 怒らない日の母さんは満点だ 満点へただ黙々とカタツムリ 満点でないから夫婦腕を組む 科学万能それでも迷信生きて 科学する心横着から生れ 科学では解けぬ心をもてあまし いる

客遊子

まさ子

和

孝みサワ子 栄子子

あかぎれがまだなおらない与作の手山岳部冬の素顔の中に坐し 負け大を描くと自分の貌になる お見事な皿に料理の不 まだ欲があって老後の夢を描く 逢うて来た余韻を床でまた描き 子の描く夢は自分も持っていた ごげ茶色あればこと足る自画像で 川柳塔唐津支部 坐味い 久保

敏報 70

正 水 干山弘輝平金英忠緑 寿 子久生子和太子雄良 豐悦狂 寿美子 道 子雄良水郎

84

人里の触れ合い行商徳を売る 谺さえ還らぬ島を北に持ち かくれんぼ弱い子供がいつも鬼 げんこつの痛さ互いに分けて持ち 親切の押し売りもあるシルバー席 スーパーへ寄ります露店早 梅の香も聞かず鶯藪で鳴き 召し上げた土地にペンペン草が 咲き 正朴 久仁於 级 素四あ高

シ駄子

ランドセル並べて土堤の春を摘む 井上

喜酔報

敏

人の夢世界に開け科学博 開けるのが恐い家計簿で泣く 開発の遅れ古墳が輪をかける お弁当開けば包う母の愛

正 流

河南子

雅

卓

念願の夢が開いた大銀杏 嫁ぐ娘のアルバム開き父の私語 開幕もま近狸の皮算用 受験すみ胸一ぱいの解放感 三浪で合格したと天狗なり 浪人のくやしさ晴らした桜咲く

比呂志 酔

停電でひと息ついたテレビです

浪人がお好きと職安も知っている 浪人はしても希望は持ってます 甘い罠エリートコースを踏み外し 甘い物食べるとかい人に殺される 浪人をできない友の祈願する 初孫に甘さを添えて鯉のぼり 大方に甘さがあった事故現場

凡九郎

敏

金

金一好太步栽

パンは便利で裏に危険ひめ みつる 本蔭棒 天柳 甫久路

ご先祖に甘い躾を叱られゆ

胃の中に写る危険な影ひとつ

成功の蔭に潜んでいた危険

水不足野井戸の恵みで息をつく 母だから危険な花は塗りつぶす

出雲路は茶どころ味よい井戸の水 郷里の井戸瞳写した少年期 帰省してこんなにうまい井戸の水 マンションの井戸端会議はおどり場で 日本の善意砂漠に井戸を掘る わかあゆ川柳会

停電をして雷待ち受ける 腹立ちを鏡に見せてやめました 古刀持ち頑固すぎたり刃のこぼれ 見込みたて思いついたがはかどらず

ヒデ子

停電をしたらどうするニューメディア アドバイスそれから先が愚痴になり アドバイスくれた先生禿げている アドバイス耳に入らぬハネムーン いい顔をちょっと鏡にして見せる

輝悦歳

停電が一瞬罪を唆かす 曇りない鏡に時々叱られる 宿題に悲鳴をあげたアドバイス アドバイス通りに嘘のつけぬ奴 アドバイス刺を一本抜いてから

は鈴清英侑民るみ江泉子正子

居眠りをするくせ寄席が大好きで アドバイス半導体が受けつけぬ 停電の闇で心の目が冴える

美

雅

巣

猿山のベンチで居眠りせぬように 世話好きの最後は葬儀委員長

泰子報

老妻のいねむりに合わす古時計 世話好きの庭は雑草のびるまま

內月 馬

白汀報 洛軒重 於郎人 敏 しげお 明 人の世話するほどうちでやれと言う 世話好きの夫の世話は妻がする 沈思黙考実は居眠りしてただけ 大物の居眠り作戦とみられ ポケットに噂を入れて四月馬鹿 世話好きで花の散るのも気をつかい 白昼夢居ねむりしてたは五分程

娘持つ男で女傷つけず 猫の子を捨てに拾われそうな場所 聞き役に徹しひそかに身を守る 老人の気まぐれ笛を吹くばかり 春を呼ぶ雨と思えば降るもよし

逢いたいのひとこと心に波が立きき上手うっかりもらす胸の内 浮世絵の細い眉毛にある色気 妖艶の舞台にゆれる細い眉 いつからか眉引く少女反抗期

智重子

かつ子

眉太く画いてダルマが生きてくる 木炭の眉素晴しい雪だるま 百歳を生きる翁のながい眉 ご長寿を賞めて見直す太い眉 眉キュッと妥協許さぬ父頑固

風坊吉萌鳥興野

悪戯の電話身の毛のよだつ声 集まればいつもの顔が若くなる おねだりも絵も画 春の雨溜めて大きな下駄の跡 京都塔の会 いてある孫の便 松川

杜的報 代

松風報 康 泰美 みどり 美柳 美佐子 弘登春 生舟枝 子房次緒太人 足音でわかる合格不合格 野仏も花よりだんご好きみたい 国策に添うて悲劇の孤児生まれ 邪心みな捨てよと叱る空の青 首のない顔触れ同士飲むノレン 建前と本音木の葉のうらおもて 惜しまれて散る花だから美しい プッシュホン燃えてる恋の指はず テクノロジー蘭の芽が出る試験管 同窓会綽名を聞いて想い出し 春の音誰にも知らせずしのびよる バスツアー食べるプランも入れてある 吊橋をトントン馳ける山育ち この島も汚されてゆく橋が出来 石橋をたたき臆病者になる 夕立の激しさ忘る虹の橋 吊橋の高さ見上げてああしんど 腹割って話せば罪を抱く女 母さんに抱かれるといつも眠くなり フォークまだ春になれない苺皿 食パンへ壁塗るように苺ジャム いちごつぶす女野獣の目 春の宵カチカチ苺潰す音 屑苺ホームメイドのジャムになる つくしんぼの頭が丸い春の風 廻り道しすぎましたと余裕持 帽子掛怠惰な寒さがぶら下る手のかかる子がバランスをとっ 猫抱いた女将が風邪をひいてい 川柳藤井寺 の苺に四季をまどわされ かる子がバランスをとってくれ が覗く る む 和子報 与呂志 紫 × 飛眉た明紅鼓春求 香 女鳥水子代陽城江芽 本 蔭棒 江 和孝弘冬杜水武葉友江生子的客坊子 喜代志 美代子 治 つ志 白渓子 象の目は無邪気な童心見る思い 象の瞳は優しく死んでゆける瞳だ 象の耳からサバンナの砂おちる 象の背で核におびえるお釈迦さま 立ち直る息子へ許す罪 牙だけが値打ちで象が狙われる 象使い象に踏まれた夢で覚め 芸をする象は昔を語らない やさしさが包み切れない象の足 血の匂う風は好まぬ象の鼻 杖となる言葉を君のたびだちへ うぬぼれの日毎に失せてゆく鏡 動物の鳴き声聞いて植木市 饒舌も過ぎればうっかり本音出る インディラは敗戦日本に灯をとも 水戸黄門杖がなくては絵にならず 春霞五重塔が絵になって 参道の遙か高きに借りる杖 効きそうなのは何となく高 天王寺天狗がつどう釣列車 天王寺亀が懺悔を聞いてくれ 再会の孤児ホッとする血液型 手話のおしゃべり公害にはならず 流氷が時計のように動き出し 余生なお燃えるものあり冬苺 つけものに菜葉の花の味もあり ハビリの杖にすがって一歩二歩 川柳塔まつえ 虫巨星倒れて動き出 い方 叮紅報 ちかし Œ 寿美子 和正作 かな女 美恵子 たかし 雅和麻 末昭 子枝秀 17 美 80 督促状膝の震えが止まらないひと言は言わねばならぬ膝頭 新しい数珠が私を老いたてる 宗教の心開けぬまま写経 もう走る年でもないと万歩 雷鳴よりひと足先に突っ走る よく英語喋れる人に陽が当り ライバルが英語を少し知っていた 娘の日記英語で書いて伏せてある 検問をあばよと暴走族突破 英語でお世辞ジンマシンが出そう 中流の端でわが子も英語 英語塾外交官の夢をもち 英語より身振り手振りが役に立ち 捨てられぬ英語の本は子の遺品 子に店を譲れば英語の名に変える 許す事ばかりで耐えている女 対等の意地が許すに時間とり 結局は許す気ていて聞いている 許すとは言わず黙って手を握り П 許された時から青空見えてくる 一番目を走る男のたくまし そくりでせっせと孫の夢を買い そくりをしこたま持った老いの旅 そくりを見つけ疑い出した妻 枕さして背骨を抜くおんな そくりの下手な女房ほど可愛い 車うっかりのって気を許す すとき親 柳ささやま 気は世間の見栄を捨て 葉を浮かしとく

伸び盛り隠せぬ膝があわてさすわずろうてつくづく温い血の絆 円満へ母は標準触れずおく 中流の嘘包み込む標準語 標準を越して気分が満たされ 鼾かく男と寝たが運のつき 迷惑な大物見舞点かせぎ 母の手のあたたかさ知る手糸編み 冬の空まっ青なんて似合わない 常識の標準合わぬ老眼 真夜中に酔客連れておい開けろ 勉強中母さんそうじ機めいわくだ 青春の華は卒業から開く 趣味の道高小卒を悪びれず ご自身の給料あげるストライキ 干羽鶴どれかが飛ぶと信じてる 合格をポストの口が嚙んでいた 人情は明治の色のままでよ 手鏡に騙しきれないものがある フキにウド菜の花妻は春が好き 卒業が待ちきれなかった岩田帯 お隣のピアノが鳴ると散歩に出見てあなた!明日の卒業告げる寡婦 フルムーン渋皮むけた顔と顔 ひげ撫でて口下手迷惑しています 迷惑な隣の枝が花をつけ 迷惑なコピーを怪人から貰う 一千年たてば夫に起こされる 柳ねやがわ カネボー る 博泉報 微 靖 真 文きし江平 婦美子 摂 と正眉勝弘鉱求杜松創 まさの 米 あやめ まさお 敏春君 子 水美生平芽的庄 子朝 笑 子 L 子

> 特徴はちゃんとつかんでいるあだ名肩書はどうあれあだ名で呼びかわす 迷惑は承知の上でビラ配る 卒業は優秀新郎新婦共 国中が迷惑してるグリコ犯 東大を出たのが邪魔で嫁きおくれ かつがれた同士が縁の四月馬 卒業の朝も新聞配りする お隣の大で目に角立てられず たよられて嬉しいくせに苦い 合格の届いた日から喋り出し じん麻疹パパと意見が喰い違い 白黒黄抜くことできぬ皮膚の色 ばけの皮はがれてネオン廻り出す ニックネーム付けて貰った頃が花 卒業のビリが社長の名刺出 皮一枚残し再起を決意する 卒業式子供のかわりに母が泣き 血の滲む卒業証書よ夜学の灯 ふぐの皮男不惑にさしかかる ックネ が迷惑提げてやって来る JII 柳きゃら木 鹿 顔

> > 頂留子

亜

泉 成

石垣 花子報 柳宏子 あいき 三千子 薫 敬

> 千仞の谷へ鰤子の芋こりとし、出おくれた芽は忘れない土の恩茄子の枝二本と決めて容赦せぬ 森の中新芽の私語が弾んでる踏まれても負けず雑草芽を伸ばす 姉咳いて木の芽 花の芽みな噎せる もういいかい春を待たずに出たい芽よ 非行の芽摘み取る空は晴れている 紅ダスキ八十八夜の新芽摘 せりの芽に姑の背中しゃがんでる 花の芽を教えたこともない根っこ 柳わかやま む

> > みさと

吉 吉 之 助 近 郎

まさ乃

てまり

玲時伊田な

重子子子都鶴み

晴

斜めからあてる光りの意地悪さ 毒舌を斜めに受けている戦

三男報 栄美子 凡九郎 花

10 選 田 正 坊

佳

句

地

前月号から)

てい子 みど里 寿美子 寿々子 風 八 花 嘘 妻 姉さんの婿になる人かわい 叩 友情がもっと阿呆になれと言う U 人 一人信 志 < と言で駄目 心 目 0 伝 のはよそう飛べ ŧ つ母の背中 II 父でドラマ の敵は < じみかんの皮とい は T 「な男 ち *t*= 鏡 い 男 にされている 0 1= t の中にいる ない冬の 中 裁 い 0 なと に か 11 n そう 精 思 る る 髭 蠅 る う 花代子 柳 律 紅 鼓 紅 白 史 子月草 伸

呼び合って雑草の芽も萌えて出る髪の芽の覗く並木に春が舞う枯れ枝の陰からそっと新芽吹く

芽一葉摘みかみしめる一番茶 猫柳芽吹くと風も動き出す 蕗のとうたしかな春をかみしめる 裏庭で新芽余寒にたえている

草の芽に春の足跡おいておく

品

馬鹿のつく坂をマニアは越えて来た マニアにはマニアの瞳だとすぐ判り 珍品へマニア孤独な旅をする 骨董マニア自分も骨董めいて来る その事に触れていきいきするマニア そこに山有るので登りたいマニア **、 場系に弱い財布の口が開く** マニアにもなれず半端な趣味を持ち 壺一つ観てもマニアの眼が徹る マニアめく衝動買いのつづら箱 石マニア石のささやき聞き惚れる 骨壺を開くと聞こえる反戦歌 娘の華燭今日丹精の花開く 文明開化人も地球も痩せて行く 頑なあなたを開く鍵を選る しずしずと古代が開く御所の庭 安らぎを心開いて取り戻す 花開く無心へ宿る神の意志 盲点をのぞかせ罠が待っている にんまりと盲点突いて来た不覚 禁煙をすすめる医者も煙草好き 盲点をずばりと突いてくる風だ 盲点をつつくと真実洩れてくる 頑固親父の盲点見たり母の通夜 気がつけば盲点埋める母の影 許す気になって斜めに印を押す 盲点で時を稼いでいる男 一人三脚共に盲点かばい合い 期一会桜斜めに散り急ぐ 重描く木曽路 0) 雨は斜に降

ŧ

桂忠武和眉

雄 雄

> 骨壺に抵抗のない壺マニア 土鈴マニア心の奥に鈴を抱く マニアかな毎週買います宝籖 マニアだといわれた切手孫が カラオケのマニアになっている音痴 Y.F.C 武庫坊 年 男

翠記報

英狂信正康緑登

子虎秋秋勝

例年のよう律気な春の風邪 聞き流すすべを覚えた嫁の 糸電話小さな耳と向い合う 中年を孤児とよばれて母国踏 手なずけて信じられないブルドッグ 人寝の耳に今宵も菜種梅雨

白光子 11111

手を動かし口動かしてあみ続け 房 忍

ダイエットの目にお土産のケーキ函 むらくも観桜句会 藤井 明朗報 たず子

まっすぐな線しか書けぬ強い父 寝たきりの母に料理のこつを聴き 母さんの強さは弱音はかぬ事 老眼鏡替えて若さをとり戻す キリストの声が聖書にとじてある 雑草のいのちふたたび春に会う 楽しさは妻だけでないフルムーン 松川芳 花代子 雀踊子 緑之助 的

香水が気になる娘の恋すすむ 帯キリリマダムは強い意地を見せ 香水をかえて女は変身す 若返りによいという事はみんなやり 強情も頑固も妻のいる間 シンデレラの夢を一度は見る娘 滴の香水少女の恋めばえ 文 みどり 孝太郎 鶴

朗

千光正凡公正雅 寿 子代子太子己子

噂の渦逃れ女は黒を着る

松本文

太茂津 紀美女 紀久子 輝

千 柳宏子

意外にも強い女房のアキレス腱

予約受付中!!

よし津 ▽発刊予定 ★予約御送金は左記へお願いします。 『菊澤小松園遺句集』発 頒

価

冊二千円

予約制

Ħ

昭和61年2月22日(三回忌)

〒593堺市堀上緑町2─9─1

〒55大阪市阿倍野区天王寺町北1 [II] 3 月 伸 11

菊澤小松園遺句集発行委員会

尾

代表 河 内 天 笑

介養員長 津 in 守 内 塔 月 柳 伸

親の目も気ままを許す末娘 香水もやはり美人の肌が好き 香水が浮気な風に乗ってくる 末娘時には母の胸を借り 親の声遠くに置いてきた傷み 強がりの男が持ってる隠れ蓑 ゲートボールあれから老妻の若返り (場) 芳 正林 子朗

代仕男 多賀子 きみえ fili

渦巻いた帯から女は足をぬ

タバコ屋の娘が好きで吸い始め母に似る父に眩しい娘の育ち 補聴器を取れば遠くへ声が行く 嫁がない 核の渦かつて地球に人ありき 七転びしたとき天の声を聞く 新妻の待つマンションへ一直線 庭の草取る楽しみが妻にある 親欲目娘の花に夢のせる 香水をふりかけデート春うらら 名コック先ずは視覚へ味を見せ 残されてそれから強い母になり 子離れの母さんパートで若返り 香水がかすかに包う夫婦仲 強いのはただ口だけでろくでなし 揉め声に嫁が出番で仲直り 強くなった孫の将棋の歩がこわ 鳴戸の渦 ベッドイン待つ香水は花の精 航跡へ逃避を叱る渦が巻く 女子高 カタカナの料理が口に合わぬ祖母 受話器より流れる声をつかみたい めでたい日香水匂う母達者 すれ違い香水匂う春の風 猿芝居楽しそうだと石仏 安のカードは乾いた声で呉れ の日の料理娘が来て作 楽し すれば噂の風が立 楽しい声が舞いあがる へ赴任して来て若返り 理由母にもうちあけぬ へ架けた昭和の肝っ玉 60

ゆ為一与巡弘喜ふ清富 ・ 根 ・ 子郎歩一歩朗美女祥子 一孝湖翠マは蚊は太初紫舞吉快正房 サじる 葉華楽星コめ声よ伸子吻吉野哉江子 肇 ころころと笑う娘は夢を持ち ほんもののダイヤと信じてた甘さ 週刊誌広げて食べるめしのれん お言葉に甘えお代り三杯目 とはいえど洗い流せぬ胸のきず 甘 朝 こんなめし食えるか言えぬ稼ぎ高 行 若返り嫁のかわりに婦人会 老人も春の彩着て若返り 三歳の娘おませな口達者 手料理で一品そえるにくらしさ 地図めくる楽しい旅のプランたて 渦中から七十五日遠くなり 若返る人事に窓際族のぐち ひとときの楽しみ茶筅の泡といる 渦潮に春くっきりとそこらから 日の丸を降ろすと電電若返る フグチリに恐る恐るの箸を出 娘が選ぶ伴侶に父の赦免状 マンネリを蹴って町制若返る 人生の渦にあがいて雲に乗る 楽しくはないがつきあい酒にいく 飯の恩を忘れぬ人がいる ンキ塗り替え連絡船若返り 酸ぱい思い出の駅降りてみる めしを抜いとく釜ヶ崎の雨 商のわかめ売る声春の使者 翠洋会

兼治郎報

登志実 兼治郎 いつを 童子子仙子

> 割勘と知らず社長について行き 残業で奥さん夕食二度食べた 残業をことわりパートくびになる

割勘では困ると女対男

妻の分まで割勘を払わされ タクシーを割勘で乗る寺参り

甘いささやきばかりでない春の風 鈍行の窓が童話の色となる 甘い汁吸って苦汁の日を送る 五目めし竹の子安うなりました 人き き歩いのれんのめしの字が乱れき嫌い言わせぬ母のまぜごはん 川柳サークル卯の花 旅 0 朝

京みやげ数々提げて母が着 楽しみは宿題のない春休み 若返る薬仙人持っている 娘をさらう大安だから僕は

年 代 代

歩代

12 40

桃色の噂もまいて今日主役 桃の花添えて四温へ流し 事故あまたおっちょこちょいが乗る車 桃が咲く故郷は急行通過駅 桃割れの頃の写真も見せて喜寿 桃活けて老尼は過去をみな話し 桜桃忌ひとり気儘によみ耽り もも色の袂ふるえて謝辞を読む

ヤ早八弁鉄牛松みよ九 治花 歩 女女 歩

残業の塀でとまったラーメン屋 残業を夜警ときどきのぞきに来 残業反対その内ロボット会議する やら 白渓子報 恵美子 さと美 明鼓房敏高 あき子 武庫坊 とおる 鬼楓春 君 城子子 男 江 7 遊楽子子子江

多 質 子 花代子 八重野 7

なの 保克 子子子

ふさえ

節竹

江 75

残業の分だけ吞んでくる夫

毎日が残業中小企業です

さくら

残業のパイがゆれてる午前 残業と顔色だけが嘘を知る 残業とどこで何して居るの 帳尻が合わず残業あせり出

盃に花びら一つ添えて見る ライバルが互いに牙を隠してる 待つことに馴れて女は強くなり 言えなくて背中に指で好きと書 待ちました草書が拗ねる掲示板 単調なくらし日記も一行で 寄せ書に夢がいっぱい乗せてある ちぐはぐな思いで神とすれ違い 人の不幸をなんと思った沈丁花 あわて癖花にも人にもあるような 湖の水位上がり洗濯気を許す 徒食して旬には旬の味を賞で 老人と自覚したので背を伸ばす 墓参り一 残業の日毎に変わる花だより ヒロインになった気分の一 ひもじさのひの字も知らぬパンの耳 待つことに馴れて今夜も待たされ 大陸へ置いて帰った若い影 春の陽が母の背中を伸ばしてる 待ちながら女は次の夢を追う 春の陽を避ける小鳥もいるだろう 米櫃へ米が一ぱいある安堵 ぬるま湯のなかで世間へ戸をたてる 割勘で二日酔いとは何事ぞ 一次会は割勘でなしつけで呑む 人一人払うてレジを困らせる の娘が来るたんび何か減る の幹事で二次会別に持 尼崎尾浜川柳会 日延ばした菜種梅雨 のぬく 10 人旅 春城武庫 3 **炸報** 千一 伊三郎 陽暢 笑杜梅露子子雪的風 弘 寅之助 武庫坊 良佳夢之助征秋助 よ志子 鬼年栄 よしを 清貞 歌 子雪的風村 合格の 賢夫人無理正しいと主人立て 折れた牙抱いて男は旅に出る 春風に騙されやすい耳になる 母がもう待ってはいない無人駅 向う傷ばかりで戻る橋がない 失恋の傷はだんだん美化される 死別して初めて妻の良さを知 釈迦も言う女性は常に度し難 猫なでの妻もいつしか牙を持 糸くずを払ってあげただけのこと 中流のつもりで飾ってみたくなる 順不同片付いてゆく子択山 赤提灯ばかり目につく帰り路 御先祖を語る欄間の彫ゆたか 騙された日から女は貝になる 友の名を借りて言いたいことを言い 母思う凍える風に月眺め カラオケを据えて娘は活気付き ハワイ話聞かしてくれと女給言う 女の娘桜祭りで美を競い ゲートボール女両手の暖かさ 花園によくも似たよな淑女会 女とて時には刺激欲しかろう 京の寺僧は仏の何なのか 追伸にショックなことが書いてある 一人連れ訪ね来た姉親しめず 尼崎いくしま川柳会 カチを敷けば散ってくるさくら 通知が怖いのし袋 ワイ川柳ウイロー社 硬貨に騙される 市川 角野かず子報

よしつぐ いわお 渓 香 女 女山女山 クレジットカードが衝動買いもさせ 三代目毛並みは良いが爪がな 再会でくすぶり出した古い傷 針山が亡母の話をしてくれる やめた酒電気がつくと飲みとなる 老いるとは孤独に堪えることと知る 過去帳を繰れば先祖がややこし 田 どなってはいるがお前が好きなんだ 好きだから女におまえとは言 お前とは親より長い年を経る 自在鉤雪の民話が煮えつまる お水取り流石冷たい水の価値 つなぐ手に子のよろこびが踊ってる 畑は先祖の苦労知っている ついた女が叩く裏の木戸 御先祖の灯を守る わ

天良玉佳保幸次信征子秋藏郎

80

か紫晴す

子み香子声

郁歌

子

はじ芽 かず子 かね子 アルバムにちちははがいる日の写真 胸借りた相手を倒す恩返し 影響はない 縄でんしゃ先に降りたは恩知らず 蛙の子親の仕事が好きになる 着飾った孫が主役の雛の宴 遅くなったがお前の仕残し叶えたぞ 春うららお前さらった風が吹 春風に切符が二枚家を出る 白木蓮絵になる嵯峨に一人佇つ 友達の友達がいる輪をつくる 母一人子ひとり家柄重たすぎ 家柄へ古い女として生きる の薄さ哀しいまでに人を恋う 南大阪川柳会 のにお辞儀くりかえす 中川 滋雀報

美代子

君

定

雀踊子 子治郎秋雀

静 ときお IF.

郎

伸びきった輪ゴムの様な頼りなさ 影響がないから知らん振りをする 薄らいだ記憶に消えぬものがある 家柄を自慢する程飢えている 恩は売るものでない春の雨 家柄の自慢が小さな人にする ライバルがそっとわりこむ話の輪 薄い肌神経質が透けて見え どんぐりの家柄同士でまるく行く 薄氷を踏む日もあった若い頃 家柄を誇る土塀がくずれてる 婚約の男に父の影がある 家柄は長押に槍が掛けてある 胎教にクラシック聞き共稼ぎ 人情の薄いメッキに見た家裁 単身赴任輪から外れた男の背 輪を画いておんな一人で生きる城 輪の中で女は夢をふくらます 古きずが妙にこだわる薄情け 影響は我が手で書いたシナリオで 家柄は親程気にはしていない 輪の中の鬼は素直に瞳を閉じる レモンの輪切り少年の汗匂う スケスケルック男に夏は楽みだ 家柄がどうあろうとも嫁くと決め こだわりがとけて夫婦に薄日さす 中にいつも一人は天の邪鬼 いしっぺ返しをしてやろう つ心で縄電車 一柳隆 三伸二 勝凡悦九郎郎 柳楓恒白章善 宏 果 明 兎 久 信 千代三柳右子 頂留子 律 綾ハ庸山妙秋円 公 春 喜 弘 門構えセールスなかなか通さない 薄幸の うとうとをさますガスもれ警報器 異常気象地球がスランプかも知れ 野仏をうとうとさせる春がすみ 入学へそれ赤飯やそれ鯛や お客さんの値踏みをしてる招き猫 耐える事教えて強い意志の子に 国立入学親孝行が出来ました スランプで伸びる姿勢の苗を買う 目覚しをかけてうとうと花ぐもり 門標に自分の名前がやっと書け 入学費妻はバイトに出るらしい 陽当りでお化粧しているうちの猫 東大に入学すぐに五月病 どんな人が住んでいるのか花 床柱とは知ってない猫の爪 入学の門の桜は今見頃 大学へ入学レジャーにも入学 門の中八重の桜は今見ごろ 年金の餌で鼠を取らぬ猫 いじめっ子いじめられっ子入学す スランプはスランプなりに花明り 入学期来ると年金疼き出 うとうとを起す廃品回収車 末っ子につき添うママの若造り 人学の子もお辞儀する地蔵さん が過ぎりや耐えたつもりも痩我慢 孤児へ日本の血が疼 の門

da

シ 勝 昭 幸 春 マ 子 美 子 生 蘭 柳宏子 武蕉枯雅右年三庫 露梢風近代男 耐之抜 こぼれ種じっと耐えて春日待つ 灯を消して怒りを耐えるひざがしら 耐乏の暮らしを言えば笑われ しくも苦難に耐える意地があ いた果報が深

鬼遊報

TWI 風

いしわにある

沈黙という奥の手で耐えている 下積に耐えて栄誉の椅子が待ち 圧力に耐えて平和を守る肚 熱い灸効め信じて耐えている 城下町家老もこの門くぐり抜け 城跡の苔が萌えてる平和です 風雪に耐え石仏の丸い鼻 七転び心は晴天耐え忍ぶ 子の無実信じて耐えた母の愛 水鏡耐えた時代は神話です 耐えぬいた跡も見せずに薄化粧 口紅を引くのへ耐える母子家庭 ブラジャーの下で本物耐えている 風雪に耐えた桜が花咲かせ 井上柳五郎報 ゆ八 紫 リス ま 映 弘道 紫幸哲 た 照 峰 好 郎 志 路 みをき 文節康規

ヒーローとして生きる一箇の石を抱き 佐加恵 平隆

弘朗報

二人目の誕生でヒー

ロー入れ替り

天秤棒に艶を残した亡父の

の肩書だけのおつき合 ーは何時も目立たぬ母であ 美柳 凡九郎

冬 雀踊子

葉

射月芳 鬼 頂留子 章

葉

洋悦美柳

地獄ゆき知らずに乗った口車 ドブ川で汚れを流す輸吉さん ワシントンを全部輸入をしてみたら 通り抜けなにわの花見守る盾 日本の食卓鯨が消えてゆ 今昔の感にお城も溜息し

美智子

咲きそうなつばみへ毛虫の眼が光る 花咲いて土佐の四つ子一年生 れんげ咲く線路伝いに家族連れ 怒りたい空腹満たす飴一つ 野仏と名も無い花が咲いている 岩田帯結んで明日の幸に酔う 黒帯を結び決意の金メダル 喜びの荷は紅白で結ばれる どうしても悔し涙の雨が降り 千歳飴女のドラマ幕が開く 散歩道コースの変る人が出来 蝶結びやっと覚えた一年生 雨降りの風情ゆたかに散る桜 結ばれて引張られて来た六十年 開花宣言どちらでもよい花見酒 肩の荷を降ろすと転んでばかり 定年を無事に迎えた軽い肩 甘い飴うっかり舐めて鉄格子 正直な生き方非難の的にされ 金太郎飴切っても切っても裏切ら 春がすみて女の胸に灯がともる 老人のムードで心斎橋を行く 帯あれど自分で結べぬ娘さん ネクタイがやっと結べる新入生 ここからは平行線になる兄弟 一つで敵に廻った事もあり 教師訓練きびし飴と鞭 城北川柳会 揺れる老父 te 如 右近報 仙吉郎 婦美子 カネ 登志代 佐津 乃 子 久留美 覚然坊 草番玉柏信鮫虎鬼 桃柳五郎 右節公静ふ悦 はる子 芙久枝 世は変る箱根八里を子の車 人生の落丁語録で縫いあわす 鈴なりの余地ないとこに絵馬つら 立話して連休の旅を組む 赤電話家に置きたい長話 商魂が咲かす節句の桃の花 熨斗袋入学就職 夫婦舟選んだあなた梶をとり 総入歯口の天井落ちそうで マンションにお国訛りの花が咲 思い出のメロディ耳に浅い夢 点と線結んで悪が見えて来る 幸せに慣れて冒険したくなり 宇治の香を舌で味わう挽茶飴 アフリカへ世界の愛が手を結ぶ 人生の節目に水引き結ばれる 本当の飴の甘さへ茶を入れる **痰切りの飴孝心のプレゼント** 母さんが結んでくれた蝶結び 飴玉をほうばり重機の上に居る 碁敵がたやすく負ける訳が無い ひと刻を飴でまぎらす禁煙車 おみくじを結ぶ小枝を選って居る 五対三飴しゃぶらせて同意さす 帯結び直して遺産分けの席 ザイル結ぶ技にも慣れた登山歴 炎に新婚さんも腕組んで 降りに傘を返しに来る律儀 飴の甘さ幼ない日の記憶 和路を春風受けて老 川柳はびきの 喜寿結婚 10 満 蛙 忠三千代 海 昇州 子 重淑 敏静山八悟満笑 報 歩久重郎子風 弘テルミ 茂正圭達泰麻 綾倫郎之介子世黄珠子 千世子 繁 寿美礼 司 子. 樹 男 隅っこで不安をためてはしゃいでる 仮免の娘の助手席で縮まり お互いの不信不幸のひきがねに 忘れ去る人と人とのふれあいを横顔が誰かに似てる名を忘れ 生い立ちを話してくれた福寿草 武者人形天下を取れる顔でない 傷ついてよろよろ回る夫婦独楽 金貯める本買わされた無駄づか 古井戸でカエルのボスがほらを吹く ぽっくりさんへ任せ不安を一つ消し 弱肉強食上には上がある不安 ジャンボ機にのってニュートン思い出し 政治とは不信のことと断じおり 春の道ふと忘れたことふと忘れ お日柄が佳いのか留袖乗り合わせ 放言も放屁も高い空へ向け 喜びを分け合うペダル妻と踏む 意地張った心を星の空に問う あの人の面影があり京人形 女難には逢うて見たいと鏡見る 石橋を叩いてからの不信感 メンバーにいい人が居るから入会し ふとある日善人の面おちました 合格をしたら神さま忘れられ りすぎた知識不安をかりたてる 三幸川柳教室 夫婦独 かえて

与呂志

隆

衣

保シメ 胡 江子美村

石橋義

比沙胡 多和子

オサム

千秀報

三敏み 千子ね

子子秀

隔谷義 昭

一隆葉弘白み で で で 二子子水る 平凡な父さんでよい子も妥協 雲の中声のみ聞こゆ雲雀かな 嫁達に甘えばなしの怪我をする 判を押し借りる理由をまだ聞かれ 社宅でもよいと長男欲がない 借り物の傘も差し出すにわか雨 笑っても泣いても絵になるのは美人 やわらかく大地濡らして春の雨 赴任して愛の絆も断ち切ろう 国訛り土産に赴任地から帰り 下役のミスで左遷の冷えた椅子 ロマンスグレー単身赴任もててます 春の帯締めてぼたんの寺に居る 猫額の庭をうるおすこぼれ梅 猫の恋だまって見てる鬼瓦 謝罪する心へ口がついて来ず 肖像画どこかあの子に似た目もと 道祖神あの日の顔も風化され 下積みを知るタレントが慎ましい 脇役をつとめ通してグランプリ ドル箱とさわがれタレント幼な顔 借りに来て盆栽をほめ孫をほめ ハナハト ジンとくる過去も貼ってる写真帳 々多忙沈丁花の香忘れそう の音聞いて一人の春炬燵 りに来た話と知らず歓 岸和田川柳会 り下から縁談もってくる マメ習った頃の淡い恋 H 武助報 甘楽富志子 射月芳 寿美子 民治郎 礼子 およう 孝 ゆづる 希久志 Ξ

子

千邦か靖隆由智周 枝な 子 の 子 行 梨 庵 三 隣席は指名手配に似た男 包丁のリズムもどかし背の丸さ 簡単に暗示にかかる単細胞 いたずらっ子活発な子です親のエ 逃げようとすれば指名が追っかける セールスの暗示ふとんが安く見え 喪の家のろうそく無心に燃えつづけ 四月馬鹿いたずらしたい人が居る 楢山へ子無し夫婦の城がある 巡り終え弥生の空は晴 苗代のすずめれ の子に追 11 われ 照路報 せつ子 美佐保 方 良 博

不自由さのけたら完全看護なり 三歳児の躾の平手に有る温み 春風を連れてきたのは君なんだ インフルエンザ流行なら一応やってます 躾にも限度継母責められる 温みある母のお膝が子を躾け 暗示を掛けられたように彼に酔 糸電話たぐって亡母の言葉きく 一針の躾糸からゆがんでる いざ発たんおみくじ大吉まっしぐら 10

平天

用心をしながら暗示にひっかかり しつけされ甘える膝を知ってる子 雑草の呼吸が春を暗示する 六十は若いと暗示かけて燃え 躾にもいろはにほへと種類あり アヒル 真佐緒 トモ子 千恵子 ともる 寿 栄 敏

突然の指名あいさつ地につかず 骨太の女が童話書いて たずらの奥にかくれた好きな人 にた川柳会

美代志 お腰掛けの石とは歴史古い隠岐酒断った目に阿呆らしい千鳥足 鯉のぼり子供にとってはただの布 見て聞いて喋って一歩もゆずらない 共稼ぎ妻の愚痴聞く耳を掻く 泣きごとは一つも書かぬ父の もう昼か鰯の煙這いあがる 丸い背な網を繕う船着場 スカートを押えてしゃがむ春嵐 貧しさを妻が飾って皿に盛る 花活けて主客へ一輪添えて待つ ロボットが血の通わない恋をする

別れぎわの未練はもたぬ花もある 母病めば屁理屈などは言うとれず 約束をつぎつぎ破る菜種梅雨 仕合せが崩れそうになる野心 経験と迷い頭はメタンガス 建前と本音手頃に使い分け 花冷えの底に夫婦の嘘がある

51.

苗朗

柳五郎 かずを なりゆきをじっと見守る不治の床 うちの嫁一番ゆとり持っている 苦手だとさけて通れば又出逢い なりゆきは平和であれと祈るのみ フラモデルに溺れ結婚考えず 駒つなぎ川柳会 問うて迷いが深くなる

幸せな家族いたずら坊や居て

運命にいたずらされた孤児帰国

い負けて髪にも唾がついたまま

一次会へそっと暗示の肩叩く

小 路報 美風明水砂治美

早苗報 多賀子 鉄花人 登美也 真備雄 宗巡 裕 仙

雀踊子

なりゆきの地図に奇跡は起らない パソコンに溺れ乾いてゆく心 この辺で迷うだろうと道祖神 なりゆきの中へ夕陽が消えてゆ 浅草に溺れ秋刀魚の詩が生まれ キツネの目妻の一寸は苦手です 交番所ないから迷う恋の闇 気くばりが出来るゆとりのあたたかさ 重すぎた愛に溺れた笹の舟 糸を引くこんな別れが苦手です なりゆきにまかす女と冬の雨 主導権とってゆとりのある紫煙 醍醐味は溺れてる自覚さえもな 生きてゆく為に苦手はさけられぬ 迷う日の雨がだんだんきつくなる スエヒロへ時どき食べにゆくゆとり 造花とは知らず溺れていた喜劇 苦手です喧嘩しそうになる相手 迷わずに来たのに運に邪魔される 小さなゆとり求めて女旅に出る 肩書に溺れて心空にする 足洗うまでの苦手はデカと言 迷うのも幸せだった過去もある なりゆきがどう変ろうときめた肝 何となくゆとりある様なふりをする なりゆきに明日は北風南風 高笑いゆとりあるよなないような 言い勝って自分の心に溺れてる まさに春だのに苦手の花粉 生の伴侶と思うから迷う マンの苦手が家にひとりいる V 頂留子 千代三 覚円春天 然 坊 女 蘭 笑 すみ子 邦 東 国弘雅 善萬 生風信的葉 柔道衣着て青春の血が騒ぎ 考えてみればいじめに似た躾 チョコレートいくつもらうと若がえる 標的へ息を殺した矢を放つ 春になったらという春が来てまだ寝てる 箸おいて何とお尻に根がはえる 六十坂のんべんだらりとしておれぬ 足るを知る姑は小さな幸と住む 春爛漫祝儀餞別ばかり要り みちづれにしようか落ちるところまで 相和して妻のおつむもうすうなる 卒業式の涙は拭かぬ方がいい 3Fはいつまでもあるサイン帳 終点は来ないで欲しい祖父と祖母 宿題に川柳が出てたまげ 石つんできずいたお城くずれな 入口はあるが出口がない勉強 ひな人形おこった顔が見当らぬ 雨の日はこたつに入り本をよむ 算盤をはじいて迷いから覚める 点滴を見つめて夜が白みだす 秋茄子を買った嫁にあるゆとり キリストは白に溺れて白に死す 通勤着夫の戦さを見る汚れ 立場上黙っておれぬこともあり スターめく旅に鎖がついている コンパスで書いた円だけ夢がある つくしんぼうひょっこりのぞいてかわいいな 飲まぬ人の冷めてる瞳と出会う いから覚めると桜が咲いている 柳たけはら 小五美 小二裕 中三 高 41 小五 中 小三方 生 由 中三希世子 菁居報 白靖蘭敬房淑節 鬼 亜貴子 令 鈍 静 雀踊子 3 焼 子舟水居 昭昭保 路 それぞれの顔持って咲く雪柳 初夏の風せせらぎ添える野のおごり さわやかな客が来ている春の午後 さわやかな笑いを誘う電話 さわやかな風を押してく乳母車 さわやかな朝のニュースでほっとする 巣立つ子の頬へ優しい風が吹く 三振を取ったボー 崩れゆく心の城に夜のバラ 石壁の隙間にヒソと名なし草 石垣に隠れるようにすみれ咲き もし降れば相合傘にするつもり お迎えの傘が重たい雨がやむ つながれて啼いてる小犬に雨無情 白を着て五月の風を切っている 爽やかさだけを残して去った人 虹色に染めて佳き日の日記閉 舞扇盃になり槍になり 弱り目にたたり目風邪に取りつかれ 鳩一羽迷って入った窓をあけ 九十年生きて知らないことば 同じ物持てば心も通いそう 七人の敵へ切り込む靴磨く 大それた夢は崖から落っこちる サボテンにお菓子のような花が咲く あっちゃこっち棟が上がって春が来る たてまえのかげに打算が見えかくれ 子を抱かぬ手なりダイヤを光らせて いた日も散る日も木蓮静かなり ペン皿の会 もくせい川柳会 ルを忘れか

94

節 田鶴子

智子報

かり 12

シゲヨ

のばら

貞浄西

トシ江

田中

正坊報

智いくの

藤

きく子 春

子

花 福

おぼろ月母の乳房の匂いする おぼろげな姉の記憶がふとよぎる 茶の間まで愚痴いい合えるよい仲間 お開きのあと二次会で花が咲き 旅誘うどのポスターも花が咲き ヒロインになった気で出る映画館 おぼろげな記憶をたどり旅に出る ろげに父母を憶えている不幸 美明武富 事 古 古 子 満 正 寿 手 惠 子 女 坊 子

鉢植えも一つさげてる市場篭 島遍路畦で苗を買うている 観光化されて物足りない旅路 ハイウェイ 灯を消して女神も女になりたがる 西宮北口川柳会 - 難波宮趾を徐行する

散歩みちばらは燃えろと言っている山君月おぼろ花に誘われ出る散歩 陽が匂い水も匂うて散歩道 ちぐはぐに継いでファッション街を行く 春江報

百合子

作 慶 郎子

几帳面時間も正確散歩道

親棄てた誤算に悔いる葱坊主 ある誤算ほうれん草が茹だりすぎ よそのラジオふっと散歩の足を留 魂胆があるらし散歩につれ出され 散歩と言う名目で出て一ぱい屋 茶房の名が好きで散歩の時に寄る 80 江み佳暢良花 武舟春勝静庫坊二江紀子

輪の中に底抜け明るいのが一人合格をすれば俺の子わたしの子

羨望の的が三児の親になり

子は遠く大学へ孤独誘う桜に佇つ

金のないわが家に妻の貯金高

ップ酒誤算を明日

の踏み台に

宏 子 子 よ志子

忘れてた道頓堀の風と会う

い夫婦の会話とぎれない

ぬくもりが芯迄届く里の風呂

炊き直し

しても結局捨てる羽目

誤算ばかり増え故郷は遠い遠い

夜の席誤算の女あらわれる

った誤算のつけがくる

先生は今更誤算とも言えず

うやむやをうまく丸めた年の功黒白をはっきりさせて嫌われる うやむやにする札束を重ねられ うやむやにできない性で孤立する うやむやな返事にかすかな望み抱き フルコースの真ん中辺にある誤算 誤算だと思いたくない春の雨 誤算かも知れぬ絆をたぐりよせ 神様も時にはしゃれた誤算する 美しい誤算桜が早く咲き

明

うやむやのメモ税務署の目にとまり うやむやに妻の小言を聞いている きよ子 米一紫よい寿年笑 朝郎香津ゑ馬代女

うやむやにさせぬ裏金だと思う うやむやにさせぬ切り札ちゃんとある うやむやにする伝票を持っている うやむやに出来ぬ判こが押してある うやむやにする片棒をかつがされ うやむやな言葉の裏にある打算 伊春 しげお 白渓子 園 柳 水 廉 步 声 子 影

(結) (栗) 君春 志す山文照 津れ久平子 千世子 千弘志 久平 子子近秀

先生も

神様でない内申書

内申の序列に先生胃が痛む 内申書の嘘がばれてる答案紙 内申へ保護者の顔が掠め去り

勘忍袋の底を時々縫いなおす

地獄生きてゆけるは女だろ

園芸に生き甲斐見つけた老い二人

脱皮せぬ蝶の化身の未来像 年の功きれいに 常備薬忘れず母の旅鞄 63 飾った四帖半 り男が逃げて行く

の誤算は伏せて老夫婦

たと解る愛

は正冬つ絵一子

馬代女る

電車には枕木がありねむくなる 他人かも鏡の中にいるわたし 熱いものは熱いうちにと料理通 桜満開母は可愛いあくびする 密議する部屋が静かなままである 進級で上がった春のお小遣い

満点の内申書にもある疑惑 内申書中味が見たい受験生 内申書ひたすら願う母の肩 東大阪川柳同好会 斉藤三十

短所には浅く触れてる内申書 先生の良心信じる内申書 面接に何処まできいた内申書 先生も頭の痛い内申書 落ちた子は内申書に疑問持 内申書先入観となる恐さ

内申書落ちこぼれとは書いてなし内申書落ちこぼれとは書いてなしい内申に優秀孤児と太字かく あやかって付けた名前が重くなる 折角のげんま破るにくい雨 一度ある誤配

投票に書き良い太郎得をする

美幽杜 好春保智子香的江蘭藏 四報 紀 頂留子 柳宏子 三十四 弘、春 香的江蘭藏郎 珠子近 風生蘭

募 集●

題

吟

(各題5句以内

帖

(3句

橘 黑

高

薰 紫

風

選 選 選

薫 紫

風

選 選 選

気 ★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。 ★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。 歯 Fr. 林 花 H 野 たけ 太 志 光

選 選 選

突

松 1: 森

岡 居

選 選 選

式

軽

40

爱

花 論

★用紙は川柳塔社柳箋をご使用くださ ★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず 月号発 表 6月 15 締切

水川

塔

10句

西

尾

煙 柳 八

抄

10

旬

否

愛 課 水 JII 題 煙 柳 九 月号発表 帖 抄 塔 10句 (各題5句以内 (3句 10 西 黒 橘 (7月15 高 尾 111

H

締

栞

6月の常任理事会は1日(土)

₹545

昭昭 和和 一年 年 分 定 価 五 Ŧi. 百

六六 大阪市阿倍野区三明町二-一〇-発行 印発編 刷 行集 振替口座大阪8-三三三六八 所 ウエムラ第2ビル202号室 所人兼 年年**六** Ш 中 藤 (のな)なまれー Ξ 月 月 円 柳 原島 百 百 一 日発行 逢 童 円 円 料 送 送 ·L 太 50 科共 料共

郎

本社6月句会

席 会 題

> 題 3 JII

当

日発表

各題三句以内厳守

続

14 岩 大 津

柳宏子 雀踊 美

選

子

参 调

五百円

題

会 日 時

メンズファ

六

月

七

日

金

東区内本町

おはなし

地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角 " ショ

電06.941.191 ンセンター3 午後-六時 本 規 不 風

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円 同封のこと。

路 本

守

伸

選

JII 柳 社 塔

期 待 7月の兼題 す 毎 日

7月の本社句会は8日(月)

本誌「柳界展望」

0

段

分が

*

★原稿締切·6月25 一千五百円です

八尾市中田二—三〇 日必 着 高杉鬼遊方

申込みは

計 室

川

柳

塔

社

会

П 千円 暑中広告募集 2.3 cm × 7 cm 大

一って、白宝

夷峰 礼を東 あ氏 がとうござ 深な ま 枷 ましず木 さん

節に川郷の 、私は、 ず 1) や学 至る白いである や山平連 熱を結集 会には、 が し改 めて川東主幹 九月二十

力なの

二十九日 のは至 及きひとときを持てた しの中で、多くの良き しの中で、多くの良き しの中で、多くの良き 福であ 高 一 道 中 間 中 さんら っ旅だったが、 用から新潟へ出 いら新潟へ出 に、能登半 にしまった にしまった。 四泊す

い白を目に 劉延芝も、

栞主幹、

俊平、

宿では

を目に

大会に、人人会に、人 川大の上け柳孝大八三 加したこ 川柳塔の の約束だ るうちる 渡る 減服 一 でしま

としても の長短のに恵まれ に思う。 人遂 のご参 大のれ ズ繰からけっ の が の が の に 返 、 と 小 一 の 変 ー「やっ」と ・ 「バカ、 ・ 「バカ、 ・ 「バカ、 ・ 「バカ、 ・ 「バカ、 ・ 「バカ、 ・ 「・ 」 ・ 「・ 」 ・ 「・ でいっ」と ・ に正述 ・ になっていっ ・ になっていっ ・ になっていっと。 がらぬ間 に呼吸を した。 に正座して「えいは遂に我慢ならず を台 神経冴えるばいる間に寝入と掛け声を掛 かは、 Z 肝ケ 寝をえ た。楽 to おえて 女 111 を流 五円四

い商

れている

3 3

专時

めがお機

11 11

意のとは、

業

な

認識があ

たよう の一路

俊平

然

深

謝の 者和申偶

のや旅の心

柳の

吟通

柳

わお 悄

を残

85

くたの

和違ったりする場合し支えないが、 まで疑い。 遅れた い。健眼れたり、 腹が立つと思うと れわっ健なれて眼 .0 、知人よい、加人よい、加人よい、値段を へ 礼するこ は 挨 るようで 行には - 40 でルあ国めう あ到 頼みがれて官 車舶幸下

ムがな円戦四ない。 当二の経機号が買 ▼で人ばと拶れ めは格おがが違 必需 Hであり装飾品」 がねは私にとっ 、買わな またが ○も○ をグ編 尚すぎる。 O円につく。ど りれば、一グラ いれば、一グラ 見えないことはり装飾品ではな 後記で いるので のであ F 八 15 〇 J

仕方も る家なでの がにいあ多 九 はい相商具 かいのないことでは かいのないことでは かいのないことで をする終理では をする終理では をする終理では をする終理では をする終理では 盛がわい

に別の投床はたがたく、どうか しばしばの昨今っても、特に午後 を下ろす でわ代▼ 家たた 7 、どうかすこ を、やがて夏 はなかた。 火をつけいかられている。 wek す後 ことが、 なか離れ なか離れ

句が頭に入っ なところ 欄け 苦痛にれど、 を我慢 四な通近 HE UT といるだけ、日本権してきて きた。するためである。 直読み進む 悲あ すこぶが

しなり 経験はないのだが、た な同じ風景の中の平坦 本道を走っている、み 本道を走っている、み ないとついつい緊張感 ないとついつい緊張感 ないとついつい緊張感 ないとついつい緊張感 ないとっている、み 経験はない 00 14 だがを いはしな 刺は 肌な 転 が薄が

細胞のところ 臉 ころを に午後の電車は です。電車に乗 かわ が進んで、 かさってく っ進 + 雑 ば独の の実、 のでは に思うが……。 四風景に起伏があ は誰 断魅 と偏 なら 没個 だっ ない りない。そん 九 あると は極 個あ場

投

出出課題 稿

秀句には掲載紙贈呈

Th En 6F

電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

版市北区中之島

朝日新

投稿規定〉

かき 小することい。

间时 力 三 片 三 耳

俳 短 句 選者 選者

)1] 柳

選者

稿 橘

掲載日) 古同 薫



掲載日) 掲載日) 毎週火・ 毎週月 毎週水・ 1 信 金曜日 土曜日 歌上 風

5つの個性 5つの色味!!



なんは我機能本店

東北高島原百貨店 京都高島原百份店

サンストア中之島店 サンストア定席橋店 上本町近鉄百貨店

南海難波駅店 更大販近鉄百貨店 国铁大阪駅店 梅田人丸西黄瓜 京都近就市政店

なかいは新川店



大 阪 なんば



TEL 641 0551